

三ツ木遺跡

早川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

寶 泉	國立中央研究院歷史語言研究所 藏書	01-330
NO. 60-1661	中華民國六十一年一月十七日	8-2 (4)

三ツ木遺跡

早川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

序

赤城山南麓を南下して流れる早川の流域は、原始・古代における埋蔵文化財の豊富な地域であります。この流域に沿って一般国道17号（上武道路）の建設工事が計画され、これと同時に佐波郡境町三ッ木、西今井地区では蛇行する早川の河川改修工事も実施される運びとなりました。これらの工事に先立ち、貴重な埋蔵文化財の保護を目的として昭和50・51年度に実施された発掘調査では多大な成果を得る事が出来ました。本書はこのうち三ッ木遺跡の早川河川改修地域分についての発掘調査報告書です。

三ッ木遺跡は、上武道路分を含めると住居跡の総数が250軒を越す古墳時代から平安時代にかけての大規模な集落跡で、古墳時代初頭の墓地や有力者の住居と推定される掘立柱建物群等の貴重な遺構が発見されました。この地域は新田義重譲状に記されているように古代末期には「空閑の郷々」と呼ばれていましたが、本遺跡の調査によってその時代以前の生き生きとした人々の生活の跡が明らかにされました。調査されたのは遺跡全体の一部ではありますが、ここで得られた貴重な資料は今後の地域史解明に寄与する所が大であると信じます。又研究者の方のみならず、県民の皆様にも歴史意識の向上に役立てて頂ければ幸甚であります。

最後に此の度の調査ならびに報告書作成にあたり、御指導御協力下さった皆様に心から感謝申し上げる次第でございます。

昭和60年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は早川河川改修工事に伴う事前調査として、昭和51年度に実施された三ッ木遺跡の発掘調査報告書である。なお既報（『西今井遺跡、三ッ木遺跡』群馬県教育委員会1977.3）と一部記述が重複するが、本書もって正式報告としたい。
2. 本遺跡の所在地は群馬県佐波郡境町大字三ッ木字自光坊443～446他、堂前437～438他である。
3. 調査の実施は群馬県土木部河川課の委託を受けて群馬県教育委員会文化財保護課が行ない、整理作業は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行なった。
4. 調査の実施期間は昭和51年8月5日～11月2日（65日間）で、整理の実施期間は昭和60年4月～昭和60年10月である。
5. 調査及び整理の実施にあたっては下記の職員が関係した。
発掘調査
（事務担当）磯貝福七、白石保三郎、森田秀策、阿久津宗二、飯塚喜代子、女屋等志
（調査担当）井上唯雄、須田 茂 （調査員）内田憲治
整理作業
（事務担当）小林起久治、白石保三郎、梅沢重昭、松本浩一、大沢秋良、定方隆史、秋池 武、国定 均、笠原秀樹、須田朋子（旧姓山本）、吉田有光、柳岡良宏、野島のぶ江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子
（整理担当）飯田陽一、大木紳一郎、浅井良子、平野照美、細井敏子、山田キミ子、押江さゆり、関口貴子、今井智江美、島崎敏子、神澤幸子（旧姓石田）、坂庭美代子、狩野道子、小淵美和子、関口加津枝、田村千種
6. 写真撮影は遺構が井上唯雄、須田 茂、遺物は佐藤元彦が担当した。
7. 本書の編集は大木紳一郎が行ない、執筆は第Ⅰ章－1を井上唯雄、第Ⅱ章－6を石塚久則、その他を大木紳一郎が行なった。なお出土遺物観察表は浅井良子が執筆し、大木が一部加筆、修正をした。
8. 本書の作成にあたり下記の方々の御指導、御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
岩上照朗、藤田 夫、坂瓜久純、大江正行、下城 正、津金沢吉茂、関 晴彦、女屋和志雄、神谷佳明、谷藤保彦、関根慎二、岩崎泰一
9. 出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1. 遺構番号について
本遺跡は一般国道17号改築工事に伴う発掘調査（以下上武調査と略す。）によって検出されたものと同一であり、これとの混乱を避けるため、両者を統合して一連の番号を付けた。
2. 略称と略記号について
上武調査報告書（『三ッ木遺跡』群馬県教育委員会（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 建設省 1984）に準ずる。
3. 遺構図の方位記号は磁北を指す。
4. 遺物観察表、挿図、写真図版の番号は一致する。
5. 本文中のゴシック体文字は各項目で扱う該当遺構名を示す。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第 I 章 調査に至る経過と遺跡周辺の環境	1
1 調査に至る経過	1
2 遺跡周辺の環境	1
第 II 章 検出された遺構と遺物	3
1 竪穴住居跡	3
2 掘立柱建築遺構	43
3 土 壙	47
4 井 戸	49
5 溝	50
6 埴 輪	52
第 III 章 出土遺物一覧表	53
第 IV 章 小 結	68
写真図版	

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡	2	第36図	118号住居跡出土遺物(2)	24
第2図	95号住居跡	3	第37図	118号住居跡出土遺物(3)	25
第3図	95号住居跡出土遺物	3	第38図	119号住居跡	25
第4図	96号住居跡	4	第39図	122号住居跡及び出土遺物	26
第5図	96号住居跡出土遺物	4	第40図	123号住居跡	26
第6図	97号住居跡	5	第41図	123号住居跡出土遺物	27
第7図	97号住居跡出土遺物	5	第42図	124号住居跡	27
第8図	98号住居跡及び出土遺物	6	第43図	124号住居跡出土遺物	28
第9図	99号住居跡	6	第44図	125号住居跡	29
第10図	99号住居跡出土遺物	7	第45図	125号住居跡出土遺物(1)	30
第11図	100号住居跡及び出土遺物	7	第46図	125号住居跡出土遺物(2)	31
第12図	101号住居跡及び出土遺物	8	第47図	126号住居跡及び出土遺物	31
第13図	102・107号住居跡	8	第48図	127号住居跡	32
第14図	106号住居跡及び出土遺物	9	第49図	127号住居跡出土遺物	33
第15図	109号住居跡	10	第50図	128号住居跡	33
第16図	109号住居跡出土遺物(1)	10	第51図	128号住居跡出土遺物	34
第17図	109号住居跡出土遺物(2)	11	第52図	133号住居跡	35
第18図	110号住居跡及び出土遺物	11	第53図	133号住居跡出土遺物	36
第19図	111号住居跡	12	第54図	135・136号住居跡及び135号住居跡出土遺物	37
第20図	111号住居跡出土遺物	12	第55図	137号住居跡出土遺物	38
第21図	112号住居跡	13	第56図	138号住居跡	39
第22図	112号住居跡出土遺物	13	第57図	138号住居跡出土遺物	40
第23図	113号住居跡	14	第58図	139号住居跡	40
第24図	113号住居跡出土遺物(1)	14	第59図	139号住居跡出土遺物	41
第25図	113号住居跡出土遺物(2)	15	第60図	147・148号住居跡	42
第26図	114号住居跡	15	第61図	148号住居跡出土遺物	43
第27図	114号住居跡出土遺物	15	第62図	4号掘立柱建築遺構	44
第28図	115号住居跡	17	第63図	5号掘立柱建築遺構	45
第29図	115号住居跡出土遺物(1)	18	第64図	9号掘立柱建築遺構	46
第30図	115号住居跡出土遺物(2)	19	第65図	土塋	48
第31図	116号住居跡	20	第66図	土塋出土遺物	49
第32図	116号住居跡出土遺物(1)	21	第67図	4号井戸跡	49
第33図	116号住居跡出土遺物(2)	22	第68図	8号溝	50
第34図	117・118号住居跡	23	第69図	8号溝出土遺物	51
第35図	118号住居跡出土遺物(1)	23	第70図	埴輪	52
			第71図	遺構配置図	巻末

写 真 図 版 目 次

PL.1	95号・96号・97号・99号・102号・107号・109号・113号・115号住居跡
PL.2	123号・125号・128号・137号・138号・139号住居跡・4号・5号掘立柱建築遺構
PL.3	住居跡出土遺物
PL.4	住居跡出土遺物
PL.5	住居跡出土遺物
PL.6	住居跡出土遺物
PL.7	住居跡出土遺物
PL.8	住居跡出土遺物
PL.9	住居跡出土遺物
PL.10	住居跡出土遺物
PL.11	住居跡出土遺物
PL.12	土塋・溝出土遺物
PL.13	埴輪・その他の遺物

第 I 章 調査に至る経過と遺跡周辺の環境

1 調査に至る経過

昭和46年、埼玉県深谷市から前橋市田口町に至る一般国道17号バイパス上武道路の計画路線が発表された。佐波郡境町地内の早川右岸沿いに建設される上武道路の工事に合わせて、川幅の狭さと流路の蛇行から溢水の多かったこの早川の河川改修が群馬県土木部（河川課）により計画された。そして、この上武道路の路線敷に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査と合わせて、河川改修部分の調査も実施することになった。

そこで、昭和48年11月時点で、昭和49年度事業として実施することで予算措置がなされたが、用地確保や上武道路の工事工程の変更などで、調査は昭和50・51年度にずれこまざるを得なくなった。

工事は、早川第二橋梁及び附帯工事を昭和52年度に実施する前提で調査を進捗することになり、さきに計画を延伸したこともあり、52年8月に設計、9月に工事計画のつめ、10月着工の工事工程に合わせて、まず上流側の西今井遺跡から順次下流に及ぼすことで河川課と文化財保護課の間で調査の打ち合わせが整った。

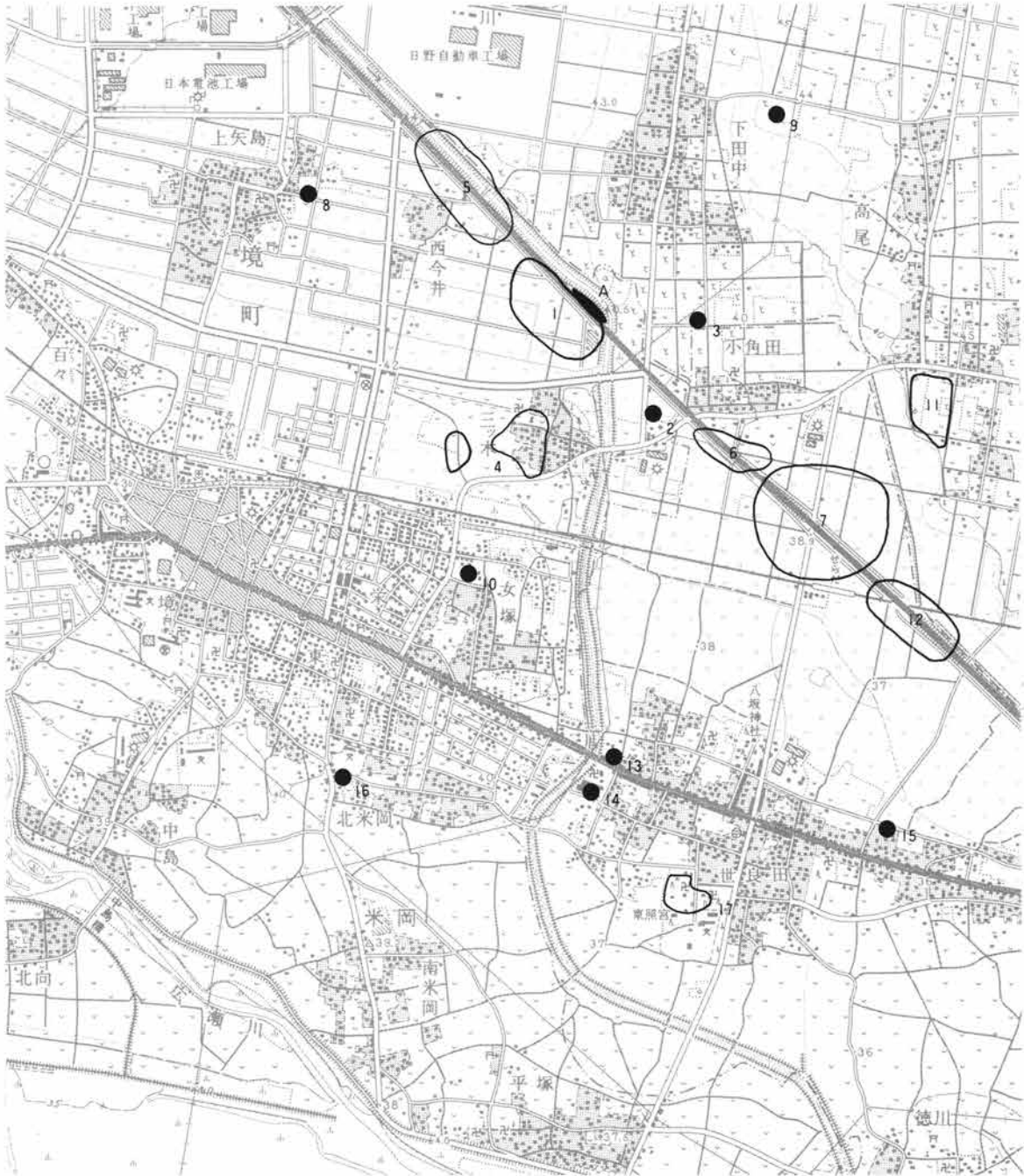
まず、西今井遺跡について、昭和50年7月28日に着手し、50年度は上流の下田中地区から西今井字中道の一部260mの区間に入った。しかし、用地買収の残件や遺跡地が沖積黒色土層中に存在するという悪条件で、調査の進捗ははかばかしく、工事工程に合わせる事が困難視されるに至った。

昭和51年度に入り6月時点での判断で早川河川改修工事に支障をきたす見通しが確実となったことから、再度、河川課と文化財保護課の協議がなされた結果、河川改修工事を予定通り進捗させる方針が確認され、下流の三ツ木遺跡から上流に向けて調査に対応するための別班を投入し、調査の進捗を図ることになった。これにより、昭和51年8月から調査に入るべく準備が開始され、境町教育委員会の協力を得て、8月5日から調査に着手したものである。

2 遺跡の立地と周辺の環境

本地域は大間々扇状地末端にあり、湧水を谷頭とする大小の開析谷が発達し、それにより分断された微高地が複雑に入り組んだ地形を形成している。これらの微高地は現水田面との比高差が約1～2mを測る平坦地で、縁辺部における沖積低地との境は不明瞭なものになっている。本地域における主要河川は、大間々扇状地を縦断して流下する早川で、本地域の地形形成に大きな役割を果たしたと考えられている。本遺跡の立地する微高地は、この早川の開析谷の末端から南東へ約2km程離れた所にあり、周辺を沖積低地に囲まれた独立丘状の地形景観を呈する。微高地上には早川が流下しており、過去における幾度かの流路変更や氾濫等がこの地の集落形成に大きな影響を与えたであろう事が容易に推測される。本微高地の西側には幅2km程の沖積低地が広がり、これを囲むように北西側には扇状地南端、南側には利根川の自然堤防の微高地がある。これら微高地の縁辺部には本遺跡を含めて古墳時代～平安時代の遺跡が占地しており、この沖積低地を主生産域とした集落立地である事が知れる。本遺跡と同じ微高地上には西今井遺跡、西林遺跡、下田遺跡、西側対岸の微高地には上矢島遺跡、南側自然堤防上には女塚遺跡等がある。又この自然堤防上には粕川と広瀬川の合流点付近で100基を越える武士古墳群が存在する。これらの遺跡の様相からこの沖積低地は古墳時代後期から平安時代にかけて比較的安定した耕地であった事が推察される。なおこの低地は土壌調査により半乾半

湿の状態であったと推察されており、その長期に亘る安定した水田経営のためには十分な灌漑を必要としたと思われる。この場合早川からの取水が地理的に最も期待され、その治水技術の如何がこの低地開発の鍵を握っていたと考えられよう。又本地区における水田経営と集落の変遷は、この低地とそれを囲む微高地で完結するのではなく、早川流域特に中流域における谷底平野の開発と有機的な関係をもっていた事が十分に考えられる。



第1図 周辺の遺跡

(国土地理院発行「上野境」1：25000 使用)

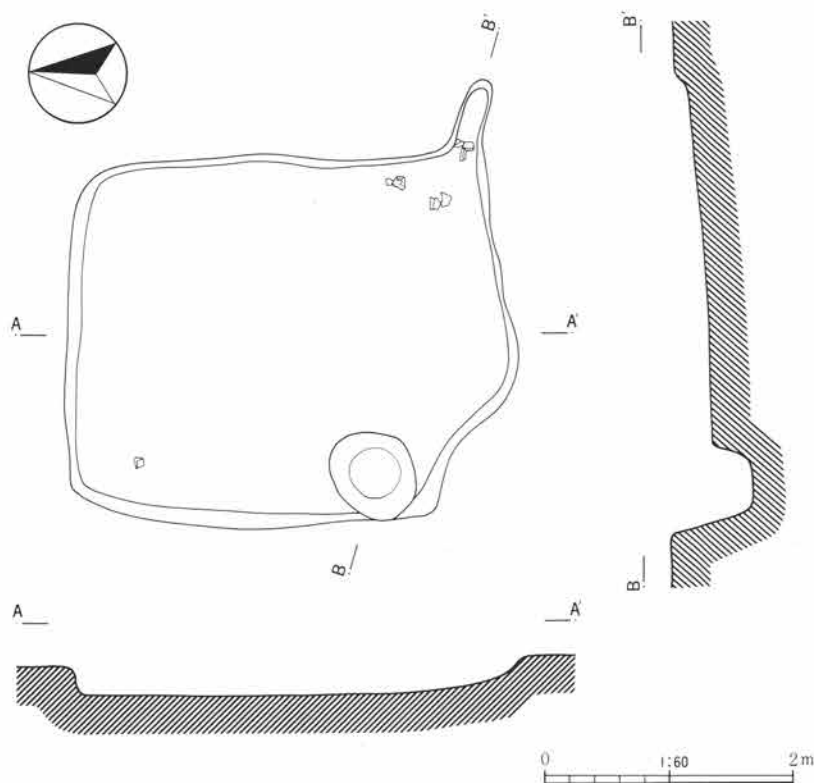
- A 三ツ木遺跡早川分 1 三ツ木遺跡 2 三ツ木越戸遺跡 3 中道遺跡 4 西林遺跡 5 西今井遺跡 6 小角田前遺跡 7 尾島工業団地遺跡 8 上矢島遺跡 9 谷津遺跡 10 女塚遺跡 11 中江田遺跡 12 歌舞伎遺跡 13 世良田上新田遺跡 14 新田館跡 15 二休地藏古墳 16 北米岡遺跡 17 長楽寺

第II章 検出された遺構と遺物

1 竪穴住居跡

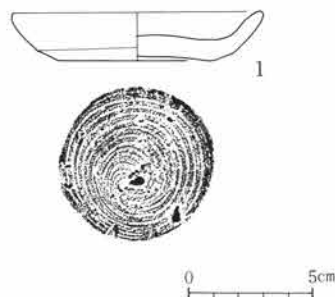
95号住居跡 (第2図、PL 1)

III区 I-5、J-5グリッドに位置し、平面形は歪んだ横長方形を呈する。規模は2.96×3.64mで、面積は9.20㎡を測る。主軸方向はN-82°-Eである。壁は北辺ではほぼ垂直、東西辺でやや外傾しており、確認壁高は最深部で34cmを測る。又南側の張り出し部分には壁に粘土の貼付が見られた。床面は中央～南半部にか



第2図 95号住居跡

かけては周囲より5cm程盛り上がっている。床の基盤は地山の黒色粘質土である。カマドは東壁の南隅部に構築される。そで部は検出されなかった。軸方向はN-103°-Eを指す。煙道部は壁外に65cm程のびる。煙道口はこれから上方に向かって開口すると思われる。貯蔵穴は南西隅の西壁沿いの位置に掘り込まれ、平面は楕円形を呈し、規模は75×65cm、深さ40cmを測る。遺物はカマド前面部を中心に土師器(甕、杯、高杯)、須恵器甕等約120点が出土した。又カマドの燃焼部と煙道部の境に小皿が横位の状態で出土した。これ



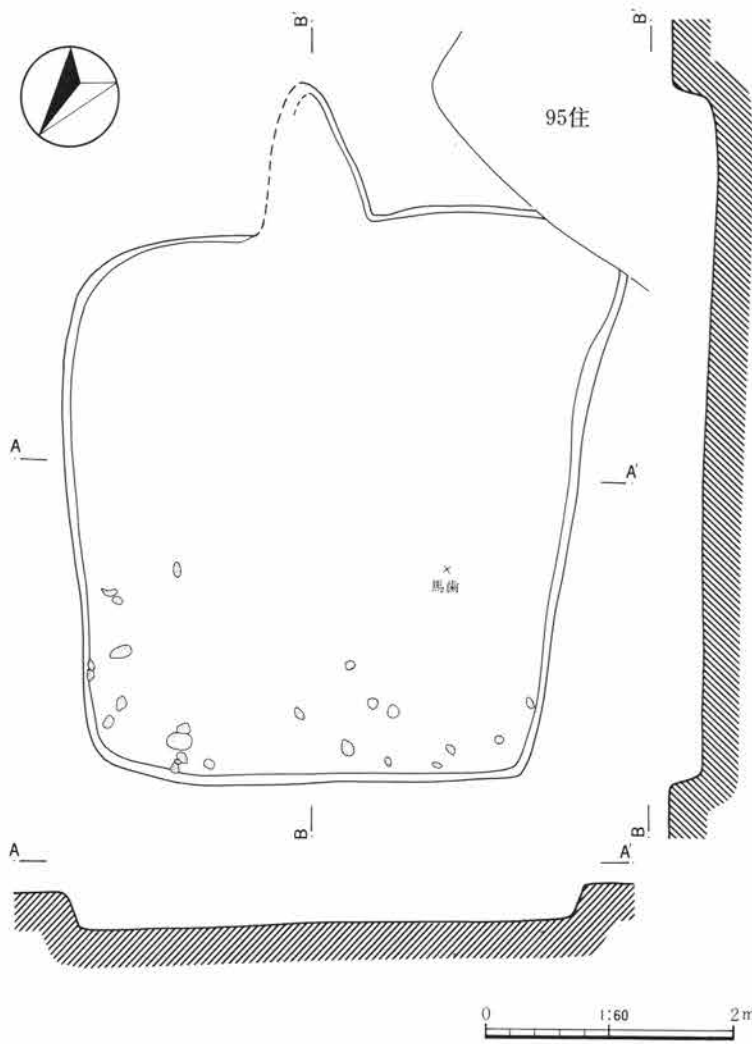
第3図 95号住居跡出土遺物

らの遺物の時期は鬼高期、奈良～平安時代のものが混在し、11世紀代と考えられるものが主体を占めている。

重複遺構は94号住居跡と96号住居跡で、新旧関係は出土土器の検討より96号住→95号住と思われる。

96号住居跡 (第4図、PL 1)

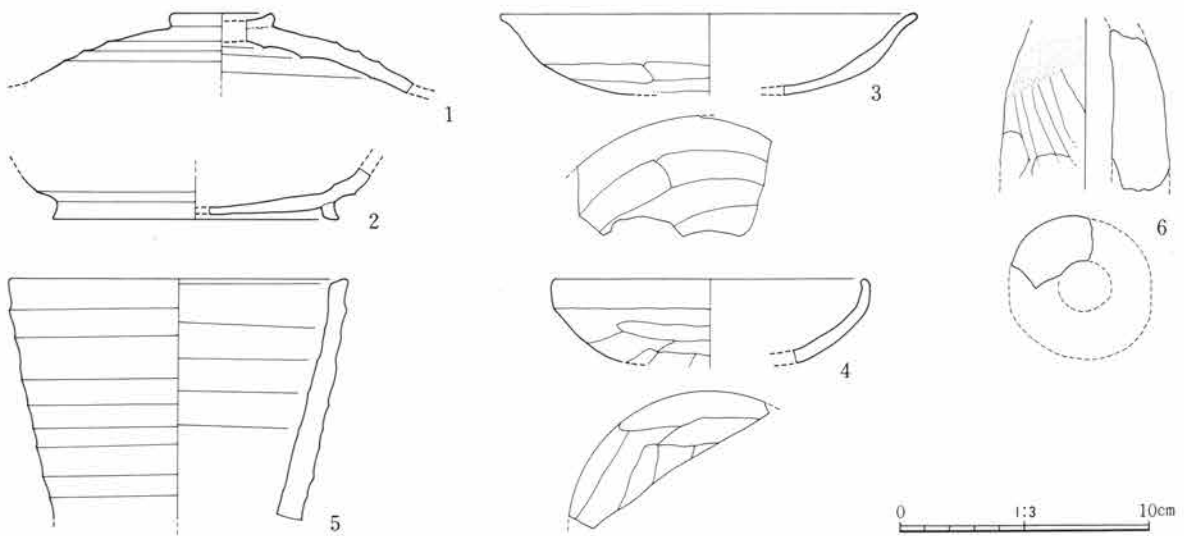
III区 J-6・7、K-6・7グリッドに位置し、平面形はやや歪んだ台形を呈する。規模は4.54×4.40～3.55mで、面積は17.08㎡を測る。主



軸方向はS-38°-Eである。壁はほぼ垂直で、確認壁高は30~19cmを測る。床面はほぼ水平で平坦である。床の基盤は地山の黒色粘質土である。カマドは南東壁中央に構築される。そで部は検出されず、燃焼部が壁外に張り出す。長さ120cm、幅60cmを測る。煙道の形状は不明瞭であった。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。覆土は焼土と炭火物を含む黒色土である。遺物は須恵器(高台付杯、蓋、鉢)、土師器(杯、甕)、馬歯、羽口等が出土した。これらは8世紀後半代のもが中心と思われる。又北西半部の壁にそって円礫30数個が床面より10cm前後浮いた状態(PL.1参照)で出土した。

重複遺構は95号住居跡で、新旧関係は96号住→95号住である。

第4図 96号住居跡



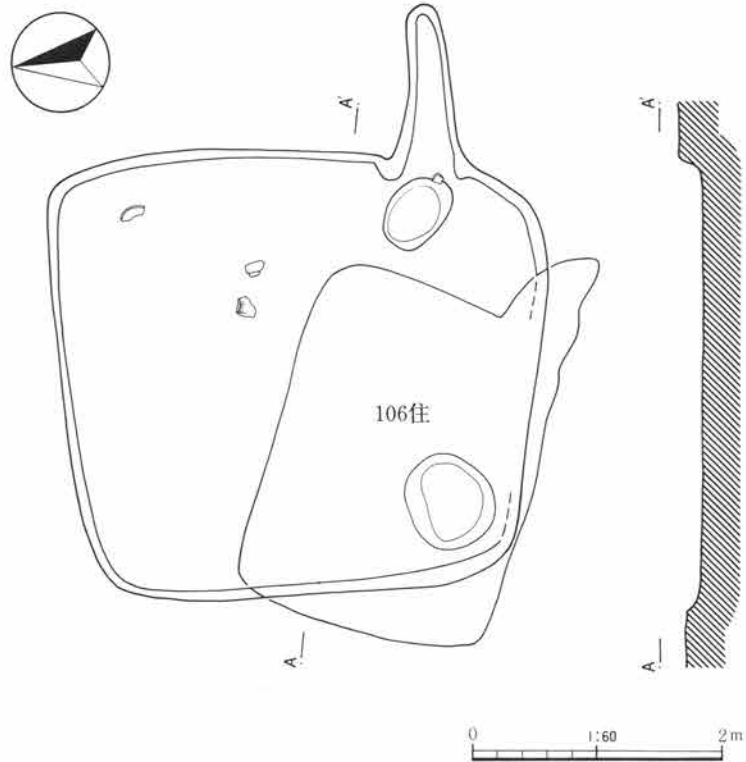
第5図 96号住居跡出土遺物

97号住居跡 (第6図、PL 1)

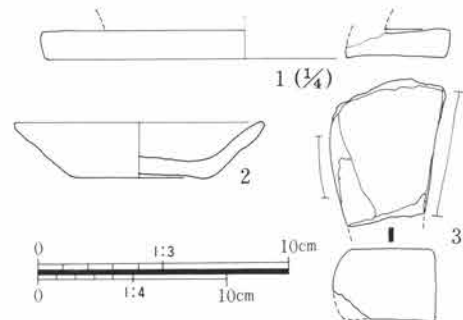
III区J-4・5、K-4グリッドに位置し、平面形は東辺の長い歪んだ長方形を呈する。規模は3.60×4.10～3.40mで、面積は13.10㎡を測る。主軸方向はS-83°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は26～5cmを測る。床面はほぼ水平で平坦である。カマドは東壁南隅に構築される。そこで壁際の基部のみが確認された。燃焼部は楕円形で壁外に張り出し、煙道は緩やかな傾斜でまっすぐに上る。長さ150cm、幅80cmを測り、軸方向はS-83°-Eを指す。燃焼部前方あるいは焚口部分に浅い皿状のピットが掘り込まれており、中に灰が堆積していた。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴と思われる楕円形ピットが南西コーナー部分で検出された。規模は78×67cmで、深さは22cmを測る。

覆土は下層位～中層位に焼土及び炭化物を含む黒色土が堆積する。遺物は甕、椀、皿、甑、砥石等が出土していた。これらは小破片のため時期を限定し難いが、数量的に平安時代(10世紀代)を主体としている。

重複遺構は106号住居跡で、新旧関係は土層観察より97号住居跡→106号住居跡である。



第6図 97号住居跡



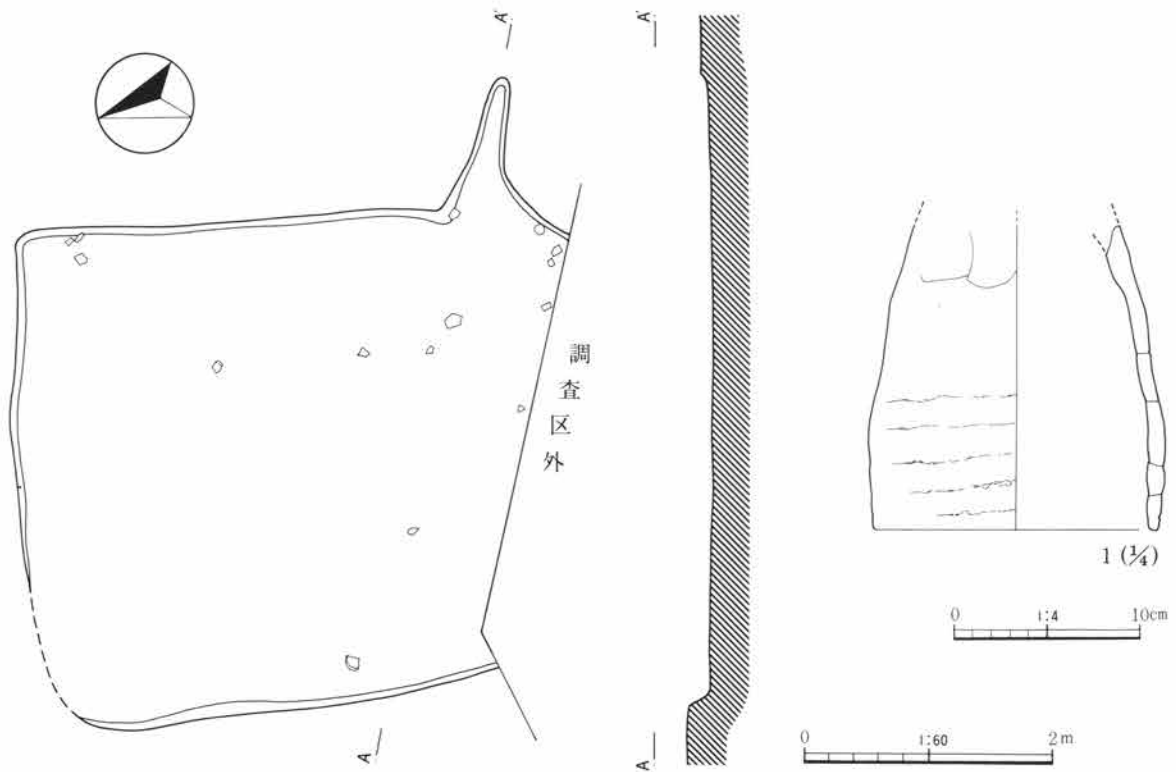
第7図 97号住居跡出土遺物

98号住居跡 (第8図)

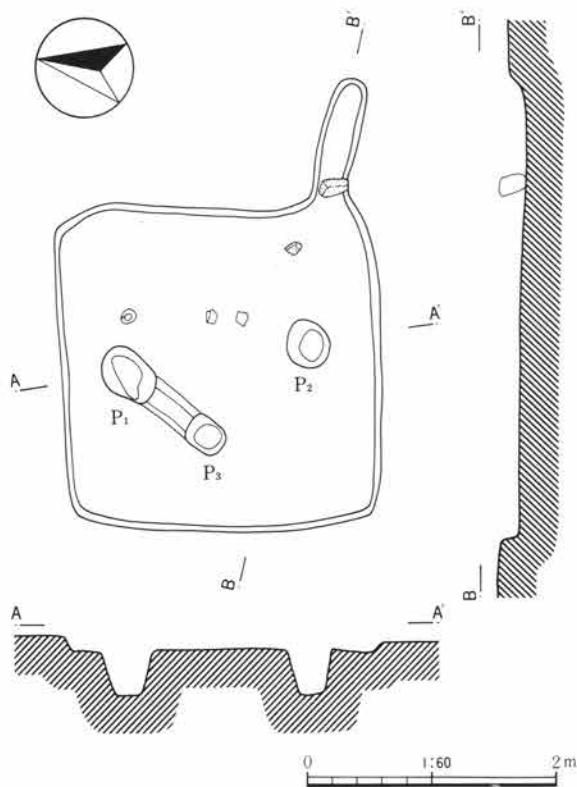
III区K-3・4、L-3グリッドに位置し、平面形は長方形と思われる。北西隅は99号住と重複してほとんど確認できず、又南壁は調査区外のため不明であった。規模は3.90×4.50m以上を測る。主軸方向はS-88°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は19～4cmを測る。床面はほぼ平坦で地山の黒色土を基盤とする。カマドは東壁南隅に構築され、そではほとんど確認されず、燃焼部と煙道が残る。推定焚口から煙道端部までは110cmを測る。カマドの軸方向はS-52°-Eである。柱穴、貯蔵穴、周溝等は検出されなかった。

覆土には焼土、炭化物を含む黒褐色土層が堆積する。遺物は覆土中から土師器杯、須恵器(椀、皿、甕、羽釜)等の破片及び支脚土器が出土した。なお支脚土器は本住居跡と99号住居跡から破片が出土し、両者が接合され同一個体である事が判明した。これはおそらく重複部分において古い方の住居跡より流れ込んだものであろう。遺物の時期は11世紀代と思われる。

重複遺構は99号住居跡で、北側コーナー部において重複するが、その新旧関係は不明であった。



第8図 98号住居跡及び出土遺物



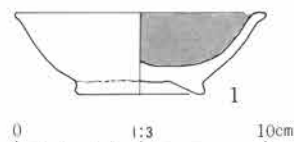
第9図 99号住居跡

99号住居跡 (第9図、PL 1)

III区K-4、L-4グリッドに位置し、平面形は整った正方形で規模は2.55×2.59mで、面積は7.19㎡を測る。主軸方向はN-80°-Eである。壁はやや外傾し、確認壁高は22~2cmである。床面は中央部がやや高く、全体に凹凸が激しい。カマドは東壁南隅に構築される。煙道は壁外へ110cm程のびる。そで部は検出されなかった。燃焼部は浅い皿状に窪んでいた。カマドの軸はS-88°-Eである。燃焼部と煙道部の境付近でカマド構造材あるいは支脚に用いられたと思われる楕円形の礫が出土した。ピットは3基が検出された。P₁は北半中央部、P₂は南半中央部、P₃はP₁の南西に80cm程離れて掘り込まれている。規模はP₁径48×36cm深さ36cm、P₂径38cm深さ35cm、P₃34×26cm深さ24cmを測る。なおP₁とP₃は幅26cm、深さ13cm程の溝で直結している。配置と規模からP₁とP₂が棟木の支柱穴となる可能性が考えられよう。

覆土は鉄分凝集の見られる黒色土が堆積している。遺物はP₁の東脇床面から完形の杯が出土した他、須恵器の蓋、甕等の破片が覆土中から出土している。これらの時期はいずれも11世紀代のものと思われる。

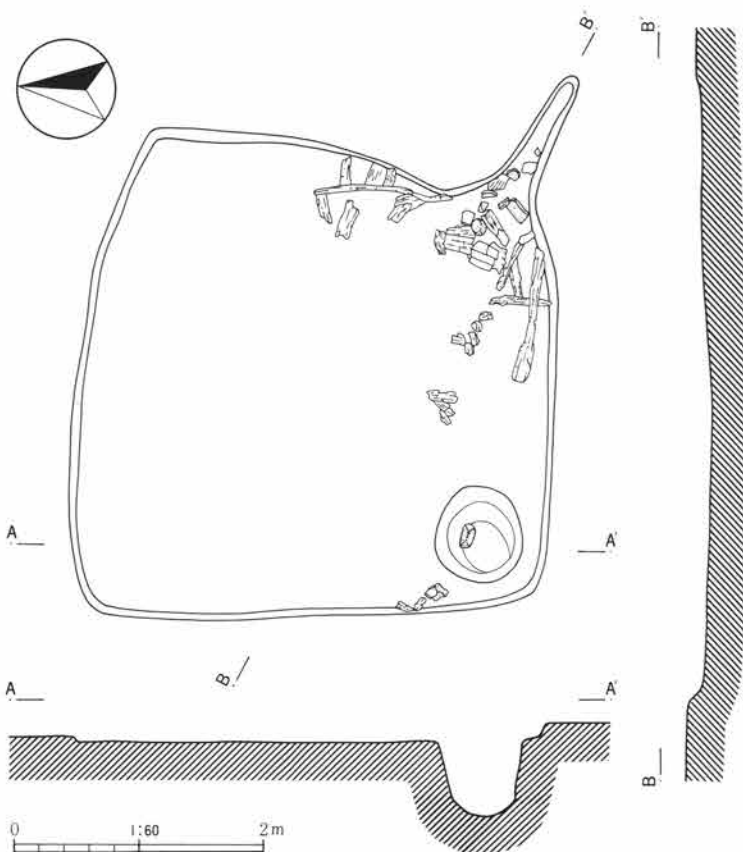
重複遺構は98号住居跡である。



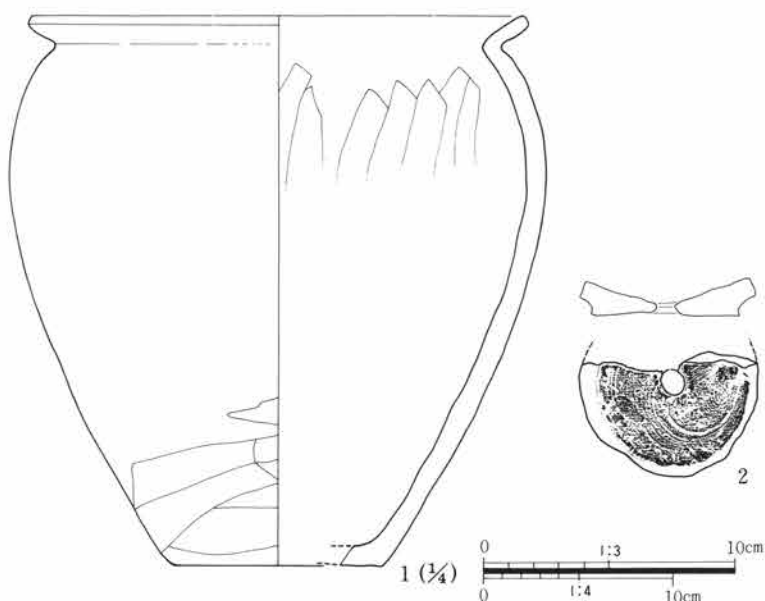
第10図 99号住居跡出土遺物

100号住居跡 (第11図)

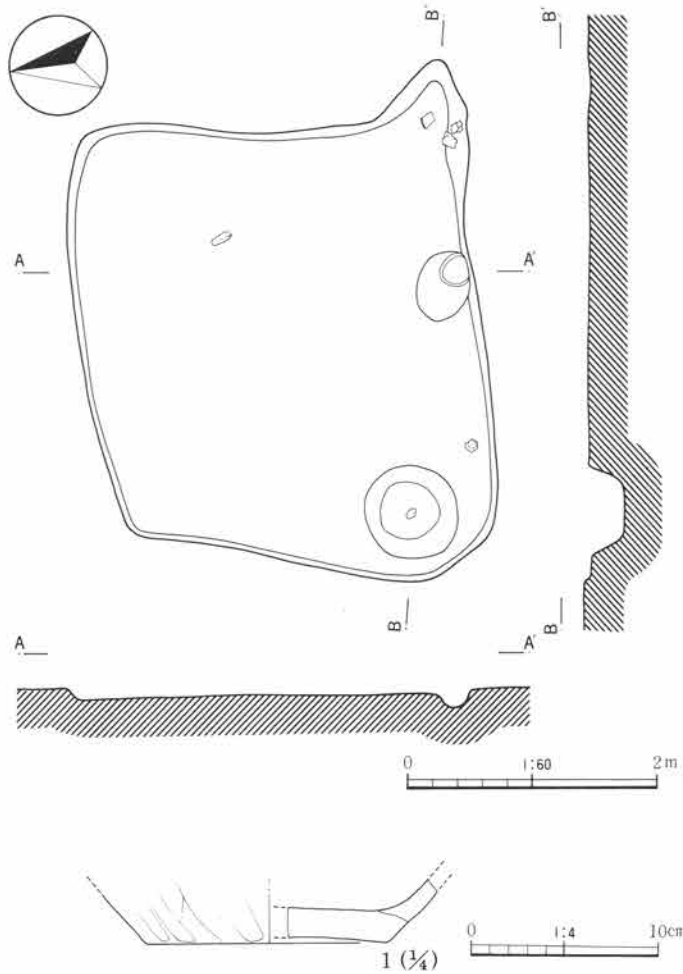
Ⅲ区L-4・5、M-5グリッドに位置し、平面形は南辺の短い歪んだ台形状を呈する。規模は3.78×3.85mで、面積は12.8m²を測る。主軸方向はS-80°-Eである。壁はやや外傾し、確認壁高は15~2cmを測る。床面は凹凸が多く、カマド前面部は周囲より盛り上がっている。カマドは東壁の南隅に構築される。そで部はほとんど検出されなかったが、燃焼部と煙道部は焼土の散布等から明瞭である。推定の燃焼部から煙道端までの長さは148cmを測る。煙道は床面より5cm程高いレベルではほぼ水平にのびている。カマドの軸方向はS-65°-Eである。貯蔵穴は住居の西南隅で検出された。平面形は円形で、規模は径73×70cm、深さ61cmを測る。柱穴、周溝は検出されなかった。



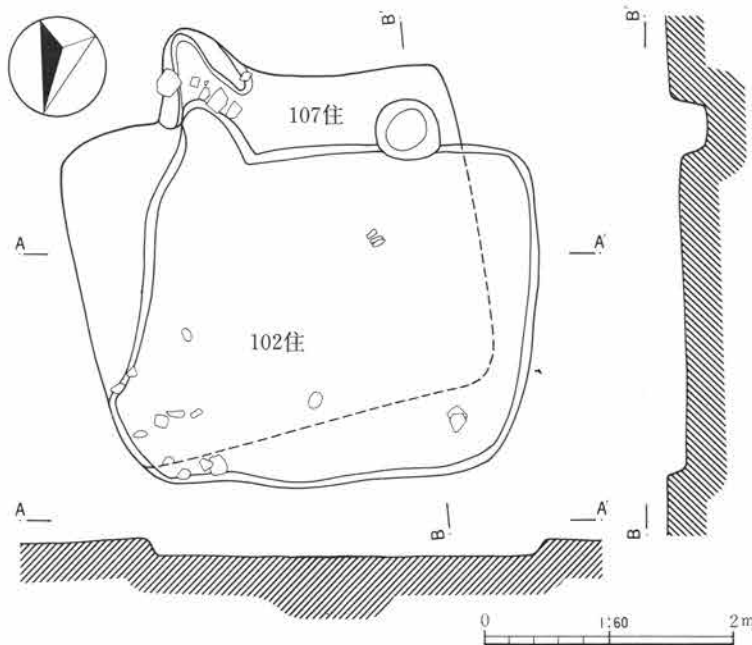
覆土は炭化物を含む灰色砂質土及び黒褐色土が堆積する。遺物は甕、杯、埴輪、紡錘車等がカマド燃焼部と推定される部分から集中して出土した。なおカマド周辺からは上屋材と思われる炭化物が出土している。炭化材の出土方向は壁に平行するものと直行するものが主であり、このうち直行するものはおそらく樺木材か壁保護材と思われる。遺物は器形及び器種構成より11世紀代の可能性が強い。



第11図 100号住居跡及び出土遺物



第12図 101号住居跡及び出土遺物



第13図 102・107号住居跡

101号住居跡 (第12図)

III区K-7・8、L-7・8グリッドに位置し、平面形は南辺の長い歪んだ方形を呈する。規模は3.60×3.25mで、面積は11.38㎡を測る。主軸方向はS-75°-Eである。壁は残存状態が不良で、特に西壁はほとんど残っていない。確認壁高は9~1cmを測る。床面は比較的平坦である。カマドは東壁の南隅に構築される。燃焼部底面のみが残存し、これは壁外へ50cm程張り出している。ピットが南壁際の中央部分に1基検出された。円形で規模は径50×40cm、深さ13.5cmを測る。性格については不明である。又貯蔵穴と思われるピットが西南隅で検出された。平面は円形を呈し、規模は径75cm深さ41.5cmを測る。

カマド内及び覆土中から土師器甕、埴輪片がわずかに出土した。

重複遺構はなく、単独で検出された。

102号住居跡 (第13図、PL.1)

III区I-6グリッドに位置し、平面形は横長方形を呈する。規模は2.68×3.36mで、面積は7.65㎡を測る。主軸方向はS-22°-Eである。壁はほぼ垂直で、確認壁高は16~8cmを測る。床面は凹凸が激しく、基盤は地山の黒褐色粘質土である。カマドは南壁東寄りに構築される。107号住居跡のカマドと重複しており、残存状態はよくない。

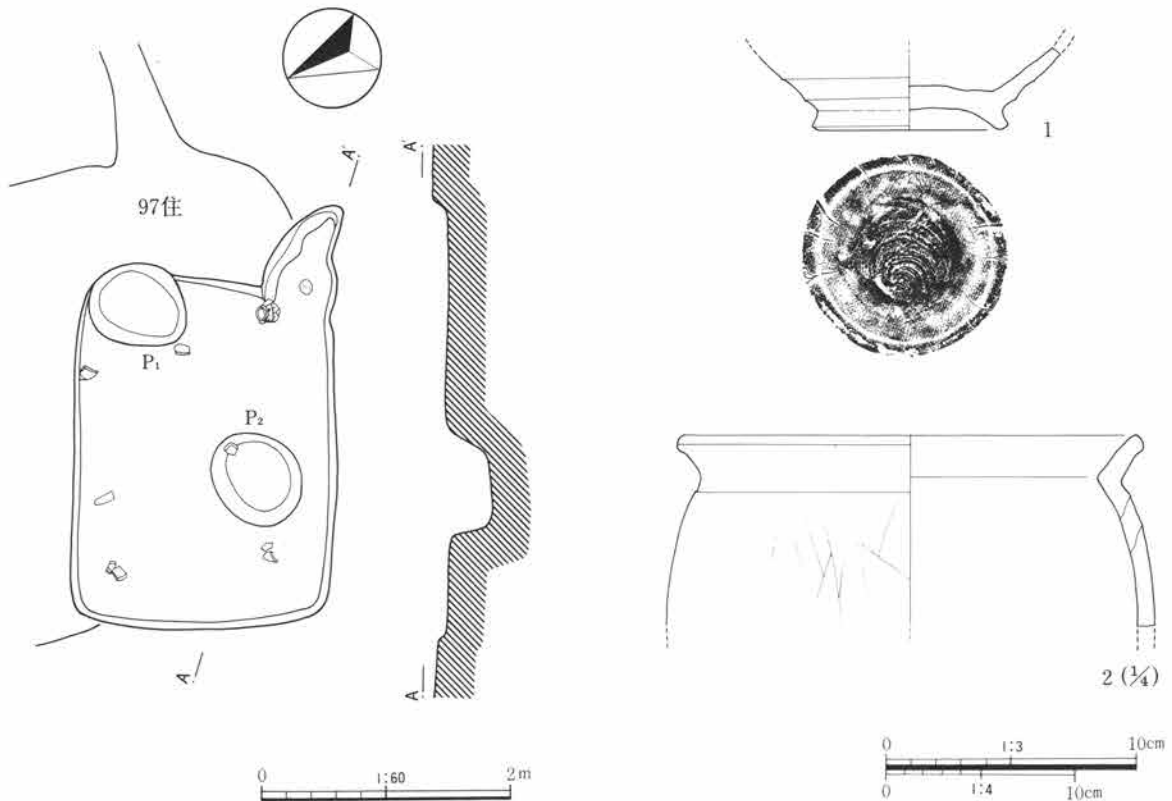
覆土は炭化物を含む黒色土が堆積する。遺物は土師器の杯、甕等の小片が若干出土している。

重複遺構は107号住居跡で、新旧関係は不明であった。

106号住居跡 (第14図)

III区J-4グリッドに位置し、縦長長方形を呈する。規模は2.80×2.10mで、面積は5.94㎡を測る。主軸方向はS-70°-Eを指す。壁の残存状態は不良で確認壁高は8~3cmを測る。床面はほぼ平坦である。カマドは東壁南隅に構築され、規模は長さ100cm、幅60cmを測る。燃焼部は壁外へ張り出す。左そで部には埴輪馬の頭部(第70図-3)を直立させて焚口構造材としている。又燃焼部から礫が直立して出土しており、おそらく支脚として用いられたものと思われる。カマドの軸方向はS-49°-Eを指す。東コーナー部分及び中央部分のやや西寄りに楕円形のピットが2基検出された。P₁は径83×65cm深さ25cm、P₂は径79×67cm深さ37cmを測る。位置や規模から柱穴とは考えにくく、その性格については不明である。

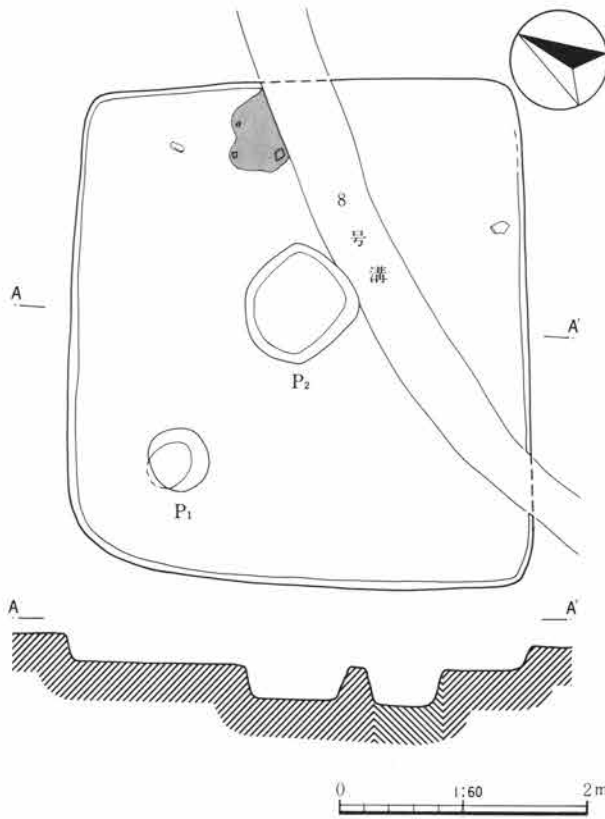
覆土から土師器(杯、甕)、須恵器椀、埴輪、砥石、鉄鏝等が出土している。時期は11世紀代を主体とする。



第14図 106号住居跡及び出土遺物

107号住居跡 (第13図、PL 1)

III区I-6グリッドに位置し、平面形は横長長方形を呈すると思われる。規模は推定で3.2×2.0mである。面積は推定8㎡前後と思われる。主軸方向はS-21°-Eである。壁はほとんど残存せず、確認壁高は2~3cmである。床面は平坦であるが、大部分が102号住居跡と重複しており不明瞭である。カマドは南壁の東寄りに構築され、左そで部と燃焼部が残存している。カマドの構築材には灰色粘土が用いられている。又カマド補強材に用いられたと思われる埴輪片が燃焼部から出土している。カマドの軸方向はS-37°-Eを指す。貯蔵穴と思われる円形ピットが南西隅に検出された。規模は径49×47cm深さ32cmを測る。遺物はカマド内出土の埴輪片の他は土師器杯、甕等の小破片が少数出土した。これら遺物の時期は11世紀代かと思われる。



第15図 109号住居跡

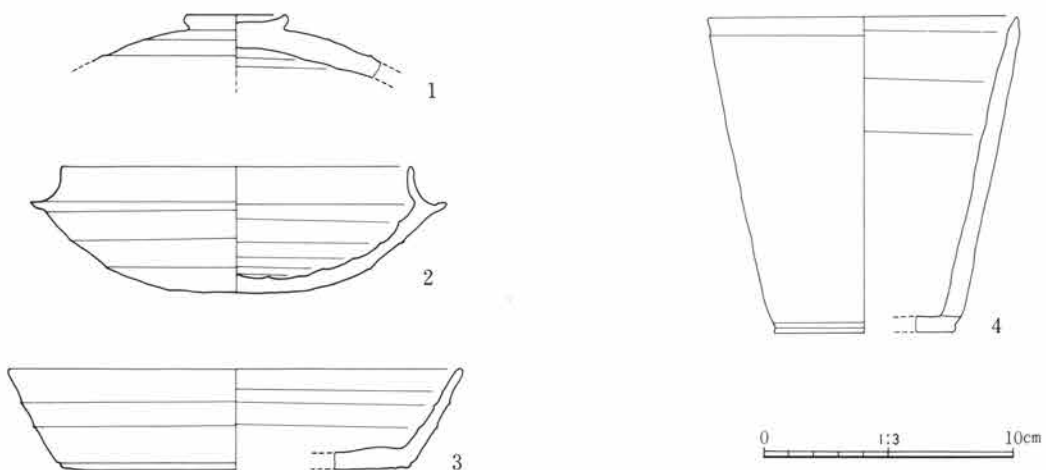
109号住居跡 (第15図、PL.1)

III区M-10・11、N-10・11グリッドに位置し、平面形は隅丸正方形を呈する。規模は4.05×3.75m、面積は14.3m²を測る。主軸方向はN-55°-Eである。壁はほぼ垂直で、確認壁高は21~10cmを測る。床面はほぼ平坦で、地山のローム土を基盤とする。カマドは東壁中央部に構築されたと推定されるが、焼土が残存するだけで、本体の形状、規模等については不明である。ピットは2基検出され、P₁は住居西コーナー部、P₂は中央部に掘り込まれ、規模はP₁径50cm深さ150cm、P₂は径90×80cm深さ28cmを測る。P₁はその位置から柱穴とも推定されるが、他に対応するピットは検出されなかった。P₂は形態、位置から柱穴とも貯蔵穴とも考えにくく、その性格は不明である。

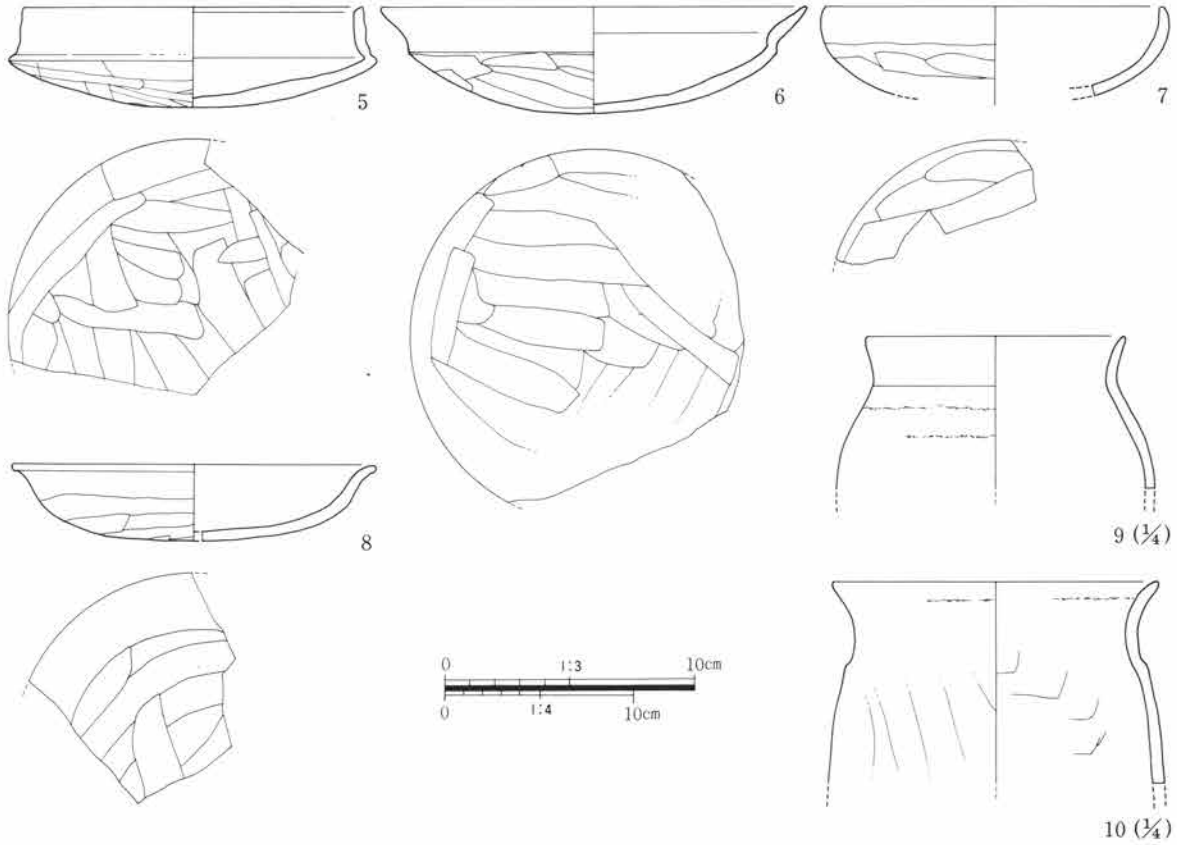
覆土には榛名山二ツ岳噴出火山灰 (FA) を含む黒色土が堆積する。遺物は須恵器 (杯、蓋、鉢、甕)、土師器 (杯、甕、高杯) 等が出土した。時期は古墳時代後期~奈良時代のもので、床面

からは主に鬼高期のもので出土し、奈良時代のもので覆土中から出土する傾向がある。

重複遺構は8号溝で、新旧関係は109号住→8号溝である。8号溝から奈良時代の土器が比較的多く出土しており、又本住居跡の床面上、ピット内出土土器が鬼高期のものである事、又覆土に榛名山噴出の火山灰を含む事等から、本住居跡の時期は古墳時代後期の鬼高期の可能性が高いようである。



第16図 109号住居跡出土遺物(1)



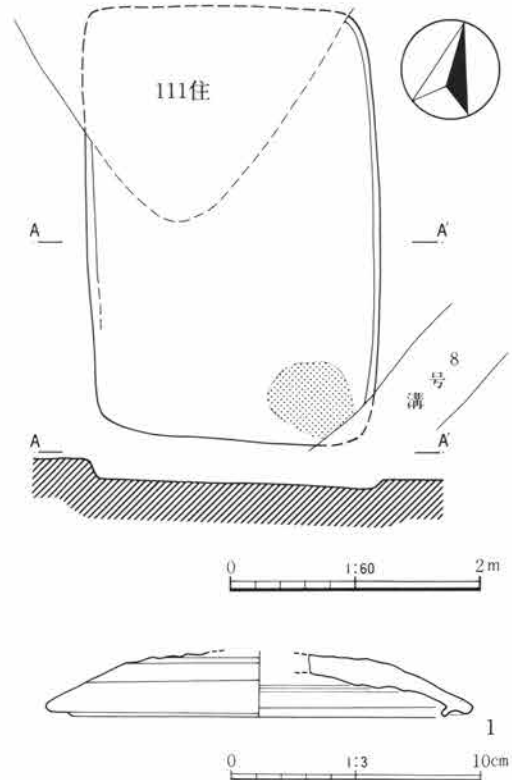
第17図 109号住居跡出土遺物(2)

110号住居跡 (第18図)

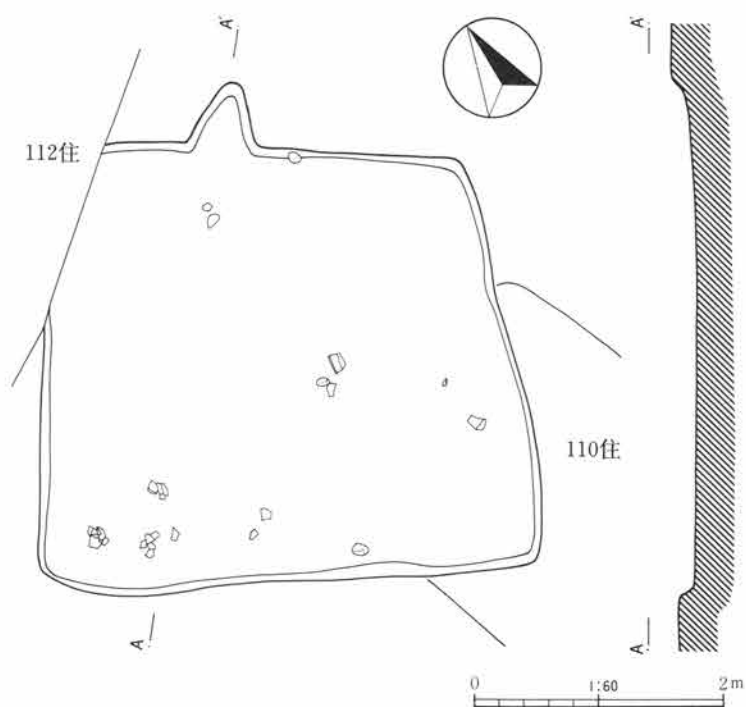
III区N-11・12、O-11・12グリッドに位置し、平面形は横長長方形を呈する。規模は3.44×2.34mで、面積は推定で7.86㎡を測る。主軸方向はN-17°-Wを指す。壁は東西両辺に若干残っており、確認壁高は9～4cmを測る。床面はローム土を基盤とし比較的平坦な面を呈する。カマドは検出されなかったが東西隅に焼土の集中する部分のある事から、おそらく東壁南端に構築されたと考えられる。しかしながら、この部分については8号溝によって切られている事から規模や形状については不明であった。

出土遺物は須恵器(杯、蓋、甕、壺)等であるが、重複する111号住居跡出土遺物との判別が困難なものもある。遺物は古墳時代後期～奈良時代のものを主体とする。

重複遺構は111号住居跡、8号溝で、土層観察等により判明した新旧関係は111号住→110号住→8号溝であった。



第18図 110号住居跡及び出土遺物



第19図 111号住居跡

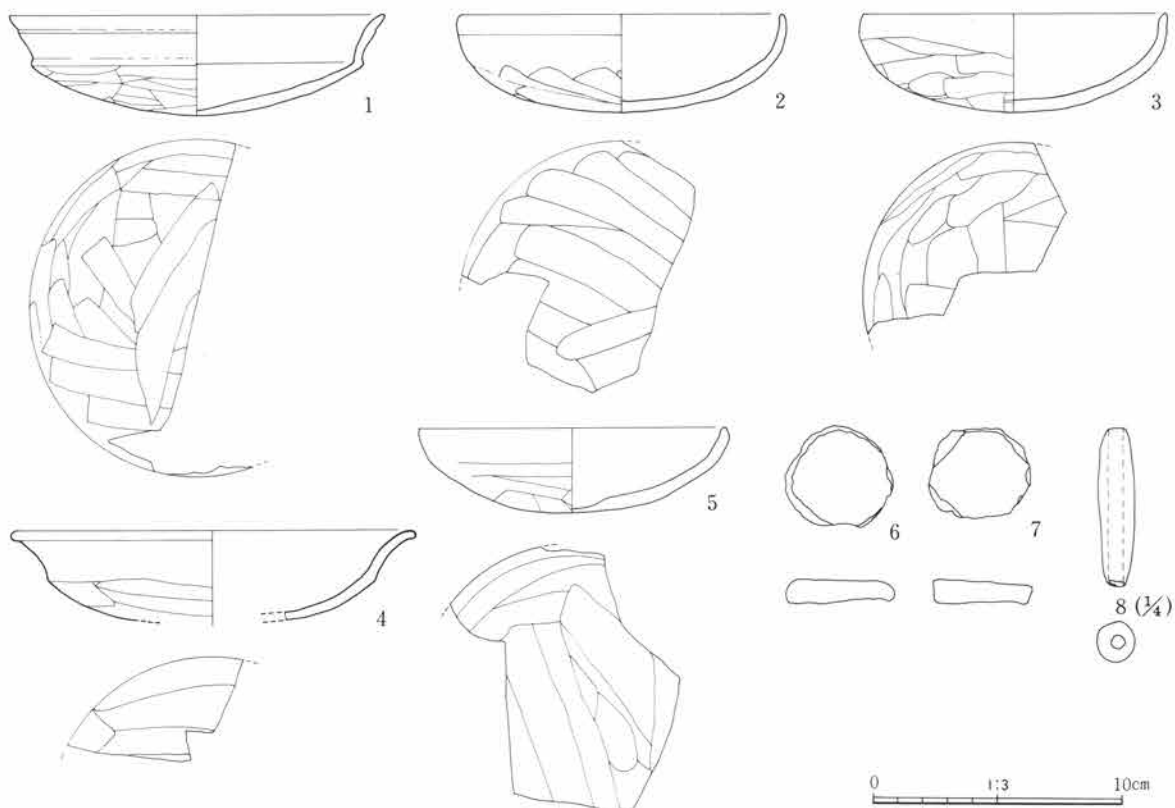
111号住居跡 (第19図)

Ⅲ区N-11・12、O-12グリッドに位置し、平面形は横長長方形を呈する。南辺では60cm程他辺よりも長い。規模は3.60×4.05mで、面積は12.99㎡を測る。主軸方向はN-35°-Eである。壁はやや外傾し、確認壁高は27~8cmを測る。床面は黒色粘質土を基盤とし、ほぼ平坦である。カマドは東壁のやや北寄りに構築され、燃焼部は壁外に張り出す。その部と煙道部は不明である。カマドの軸方向はN-42°-Eを指す。

遺物はほとんどが覆土からの出土で、土師器杯が大部分を占める。その他に土師器の小形壺、鉢、高杯等の小破片及び土錘が出土している。

鬼高期のもも含むが、数量的に奈良時代のものが主体を占める。

重複遺構は110号住居跡、102号住居跡で、判明した新旧関係は111号住→110号住である。



第20図 111号住居跡出土遺物

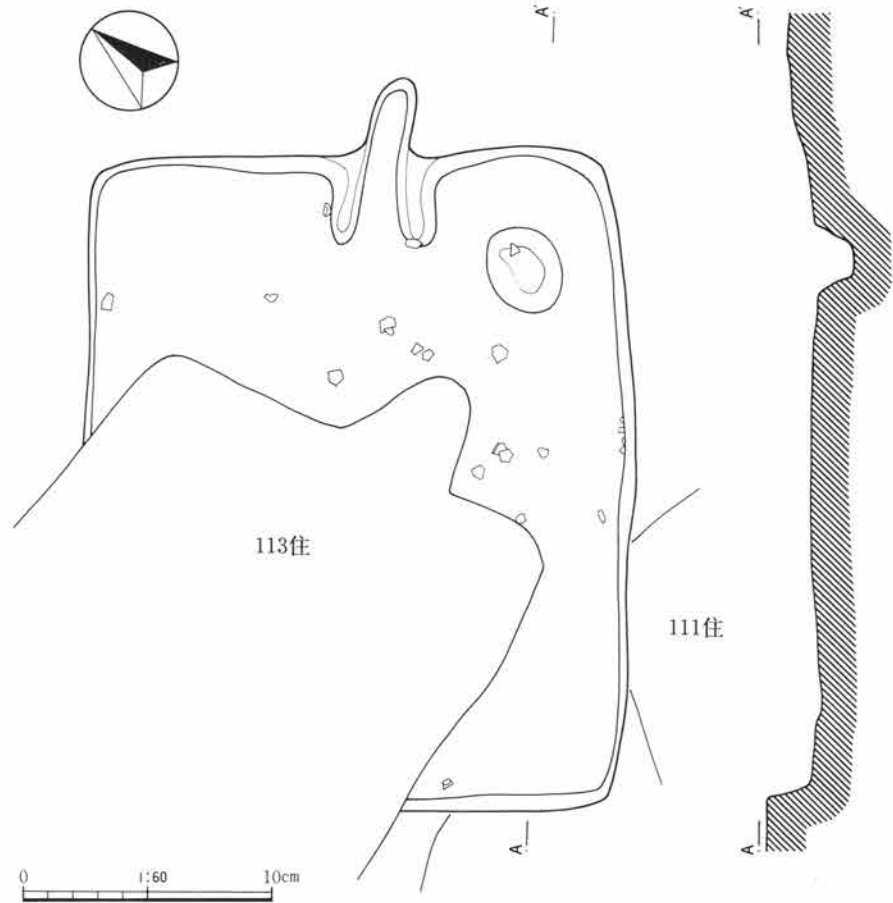
112号住居跡 (第21図)

Ⅲ区N-13・14、O-13・14グリッドに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は5.27×4.30mを測る。主軸方向はN-49°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は30~6cmを測る。床面はローム土を基盤とし、ほぼ平坦である。カマドは北東壁のほぼ中央に構築される。そで部は60cm程壁内に張り出しており、燃烧部も壁内にあったと考えられる。煙道は比較的短く、傾斜角は急である。規模は長さ134cm、幅86cm、壁外の煙道長は64cmである。軸方向はN-61°-Eを指す。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は住居東南隅に壁からやや離れて検出

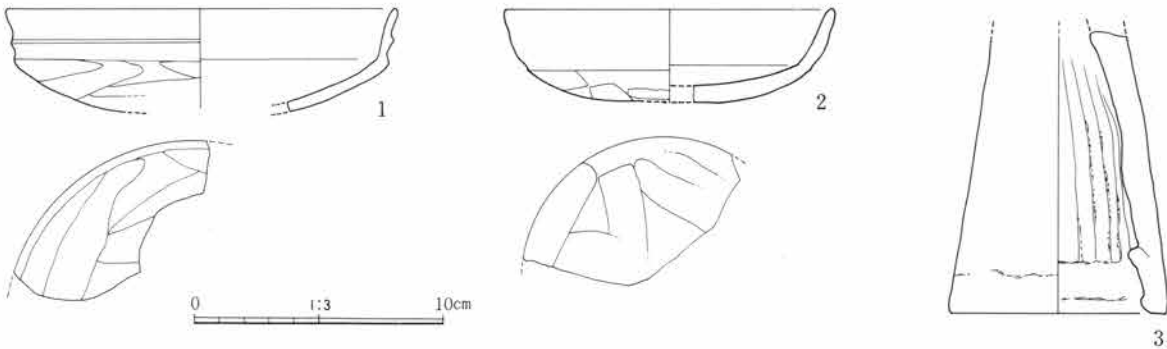
された。平面形は歪んだ楕円形で、規模は径68×56cm、深さ31cmを測る。

遺物はほとんどが覆土からの出土で、土師器杯が多く、他に甕、埴、支脚に用いられたと思われる筒状の土師器がある。時期は古墳時代後期鬼高期のものを主体とする。

重複関係は111号住、113号住、114号住、122号住、123号住で判明した新旧関係は122号住→112号住→113号住である。



第21図 112号住居跡



第22図 112号住居跡出土遺物



第23図 113号住居跡

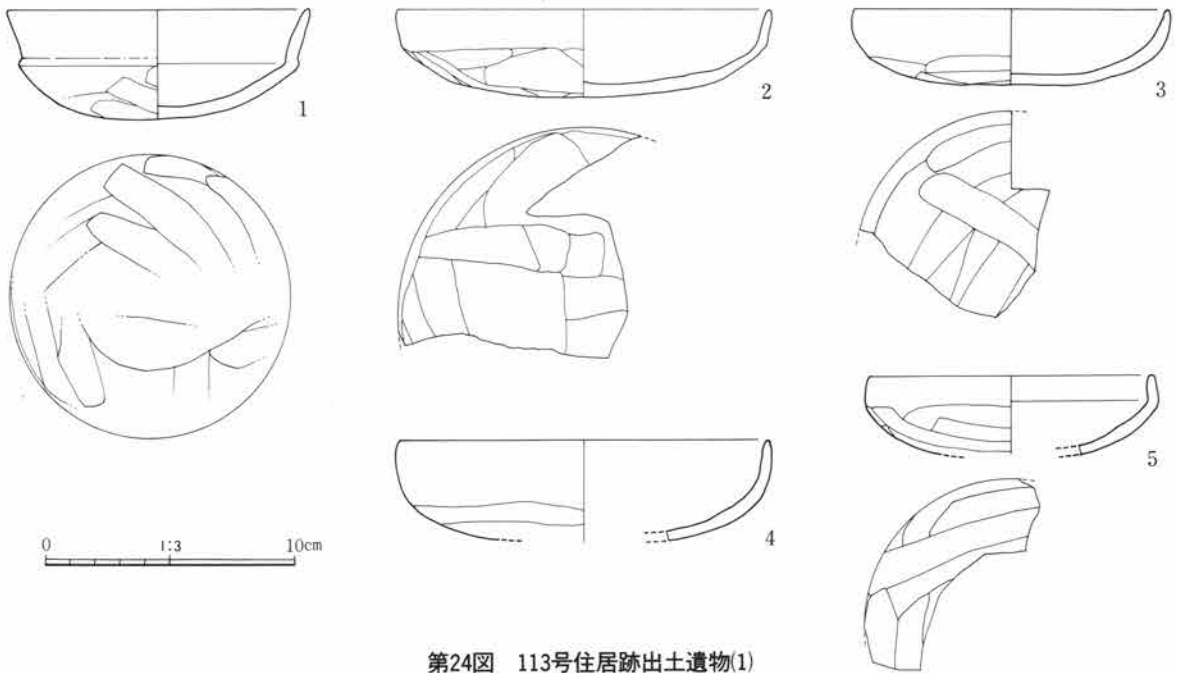
113号住居跡 (第23図、PL 1)

Ⅲ区N-13、O-13グリッドに位置し、平面形は縦長長方形を呈すると思われる。規模は4.60×3.75mで、面積は15.53㎡を測る。主軸方向はN-75°-Eを指す。壁は西辺～南辺にかけて残っており、確認壁高は21cmを測る。床面はロームを基盤としておりやや凹凸が多い。カマドは東壁中央のやや南寄りに構築される。そで部は粘土で構築され、壁内に40cm程張り出す。燃烧部は壁外にも若干張り出すようである。煙道部は急角度で弱い段を形成して立ち上がる。規模は長さ130cm、幅108cmを測り、軸方向はN-87°-Eを指す。南壁際東寄りの部分に貯蔵穴と思われるピットが検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は径95×82cm、深さ15cmを測る。その他に帰属の不明なピットが3基検出された。

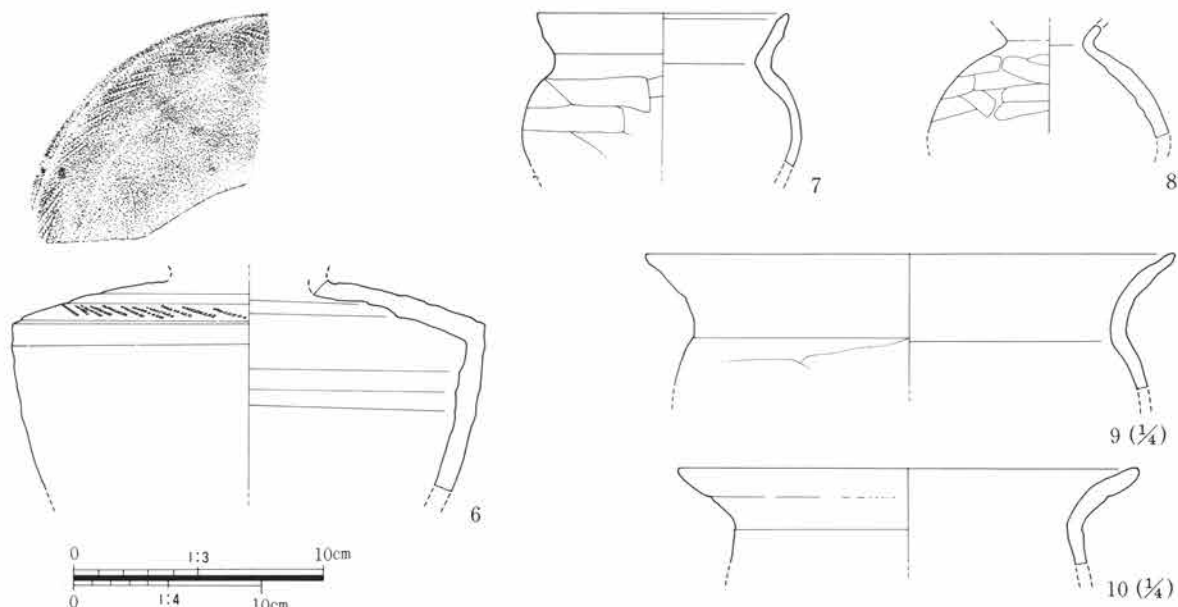
遺物は覆土から出土しており、甕と杯が大部分を占め、土師器(小形壺、埴、甑)、須恵器長頸瓶等がある。時期は古墳時代後期～奈良時代のものである。

重複遺構は112号住居跡、114号住居跡で、新旧関係はカマド残存状況と土層観察より112号住・114号住→

113号住と考えられる。



第24図 113号住居跡出土遺物(1)

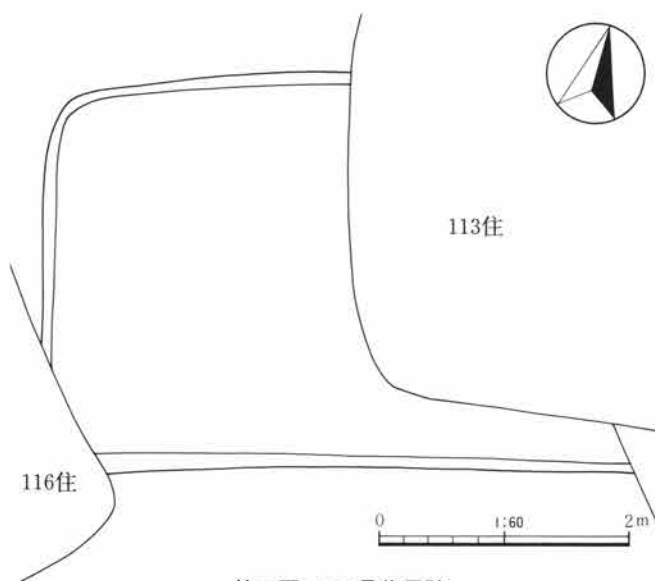


第25図 113号住居跡出土遺物(2)

114号住居跡 (第26図)

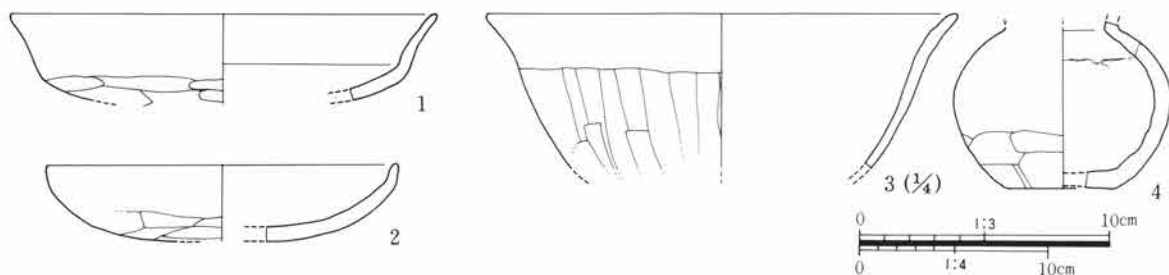
Ⅲ区N-13・14、O-13・14グリッドに位置し、平面形は長方形と思われる。規模は南北辺が2.45mを測る。主軸方向はN-22°-Wを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は21.0~16.5cmを測る。東半部の壁は113号住に切られるため不明である。床面はローム土を基盤としており、ほぼ平坦な面を呈する。カマドは検出されなかったが、おそらく北壁東隅あるいは東壁に構築されたと推定される。

遺物はほとんどが覆土中からの出土で、甕、杯が主体を占め、その他に甗、高杯、鉢、埴等の破片が出土している。古墳時代後期~奈良時代のものである。



第26図 114号住居跡

重複遺構は112号住居跡、113号住居跡、116号住居跡で、判明した新旧関係は114号住→113号住である。



第27図 114号住居跡出土遺物

115号住居跡 (第28図、PL 1)

Ⅲ区N-14・15・16、O-14・15・16グリッドに位置し、平面形は整った正方形を呈する。規模は5.58×5.82mで、面積は27.63㎡を測る。主軸方向はN-53°-Eを指す。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、確認壁高は23cm前後を測る。床面はローム土を基盤としており、比較的硬質で、中央付近がやや高くなっている。カマドや東壁中央からやや南寄りに構築されている。そで部、燃焼部は残存するが、煙道部は他遺構に切られるため不明である。規模は長さ160cm以上、幅85cmを測る。軸方向はN-53°-Eを指す。煙道は比較的短く急傾斜で立ち上がるものと思われる。又そで部にはそれぞれ甕の上半部を倒立させて補強材としている。ピットは5基が検出された。規模はP₁が径30cm深さ49cm、P₂は径16cm深さ15cm、P₃は径30cm深さ34cm、P₄は径36cm深さ35cm、P₅は径50×28cm深さ20cmを測る。このうち、P₁、P₃、P₄は配置や規模等から支柱穴と思われるが、これらに対応する東南コーナー部の柱穴は検出されなかった。柱間距離はP₁-P₂が1.28m、P₂-P₃が1.96m、P₃-P₄が3.36m、P₄-P₅が1.64mを測る。又P₁と東壁、P₂及びP₃と北壁との間に間仕切と思われる溝が検出された。この仕切溝は壁際の周溝と交わり、規模は幅30~10cmで、深さは13~10cmを測る。貯蔵穴は東南隅のカマド右側で検出され、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は70×60cm、深さ34.5cmを測る。周溝はカマド右側と南西隅を除いて廻っており、幅は35~15cm、深さ13~10cmを測る。住居外遺構としては、北西~南西壁にそって、90~50cm外側に小ピット列が廻っている。これはおそらく本住居跡の極木支柱穴あるいは柵等の痕跡かと思われる。

覆土は上層に浅間山噴出軽石(BP)を含む黒褐色土、下層にはロームブロックを含む褐色土が堆積している。遺物は床面か覆土下層から出土しており、甕、杯が多量に出土し、鉢、壺、甑、高杯、埴等がこれに加わる。又カマド左側の壁際に楕円形の礫6個が集中して出土した。これらの遺物は古墳時代中期(和泉式)~奈良時代のもので主体は鬼高式である。

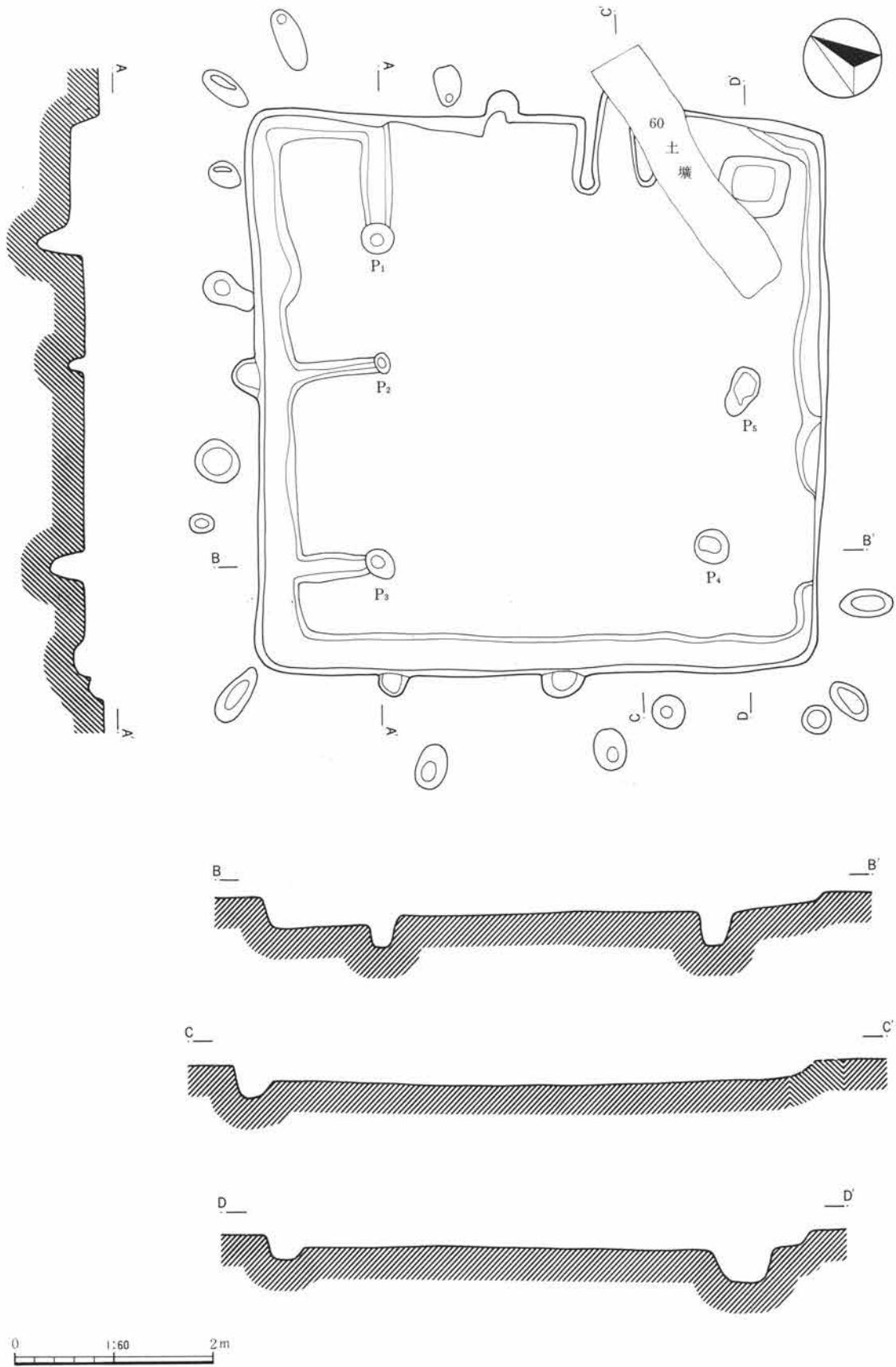
重複遺構は123号住居跡、60号土壌で、新旧関係は123号住→115号住→60号土壌である。

116号住居跡 (第31図)

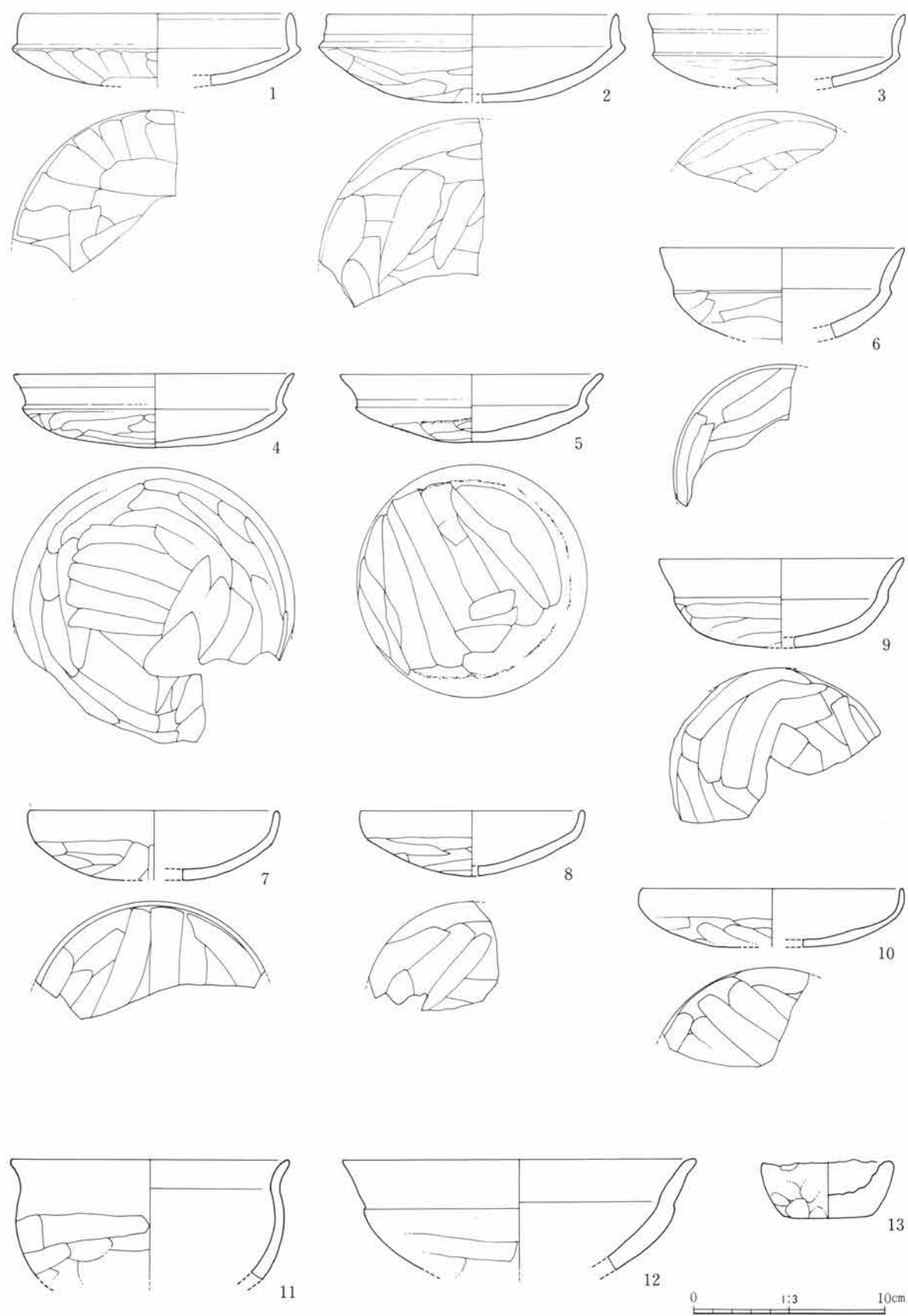
Ⅲ区L-13・14、M-13・14グリッドに位置し、平面形は隅丸正方形を呈する。規模は6.00×5.98mで、面積は35.00㎡を測る。主軸方向はN-45°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は34cm前後を測る。床面はローム土を基盤とし、ほぼ水平である。カマドは東北壁中央に構築されており、残存状態は良好で、煙道天井部が残っている。規模は長さ115cm、幅85cm、煙道長55cmを測る。軸方向はN-55°-Eを指す。又燃焼部中央には土製支脚が設置されていた。ピットは6基検出された。規模はP₁が径33cm深さ40cm、P₂径30cm深さ45cm、P₃径28cm深さ38cm、P₄径38×23cm深さ50cm、P₅径46×33cm深さ19.5cm、P₆径50cm深さ32cmを測る。そのうちP₁~P₄は位置的に支柱穴と思われる。柱間距離はP₁~P₂間3.26m、P₁~P₃間3.20m、P₃~P₄間3.23m、P₂~P₄間3.13mを測る。P₅、P₆については本住居跡に伴うものと思われるが、その性格は不明である。貯蔵穴はカマドの両側及び南隅部に掘り込まれている。1号貯蔵穴は長方形で、規模は74×53cm、深さ20.5cm、2号貯蔵穴は歪んだ正方形で、規模は72×72cm、深さ38.5cm、3号貯蔵穴は楕円形で径90×75cm、深さ47cmを測る。周溝はカマド右脇を除いて全周し、規模は幅50~10cm、深さ10cm前後である。

遺物はカマド周辺及び貯蔵穴付近から破片が多く出土している。器種は杯、甕が主で、高杯、鉢、壺等がこれに加わる。又長さ10cm大の円礫が5個床面上に散在して検出された。これらは古墳時代後期鬼高式を主体とし、これに奈良時代のものを若干含む。

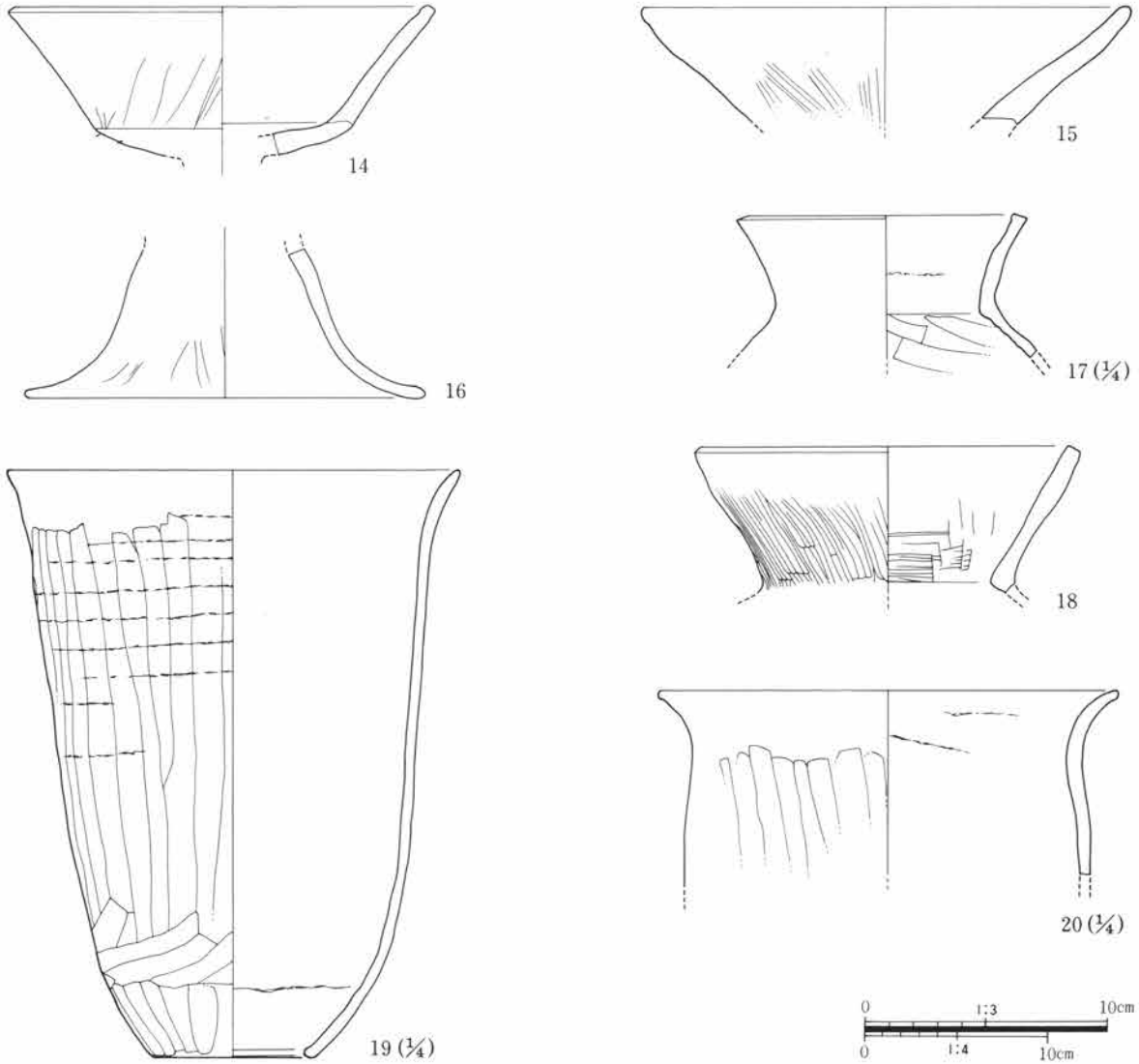
重複遺構は114号住居跡、81号土壌で、新旧関係は不明であった。



第28図 115号住居跡



第29図 115号住居跡出土遺物(1)



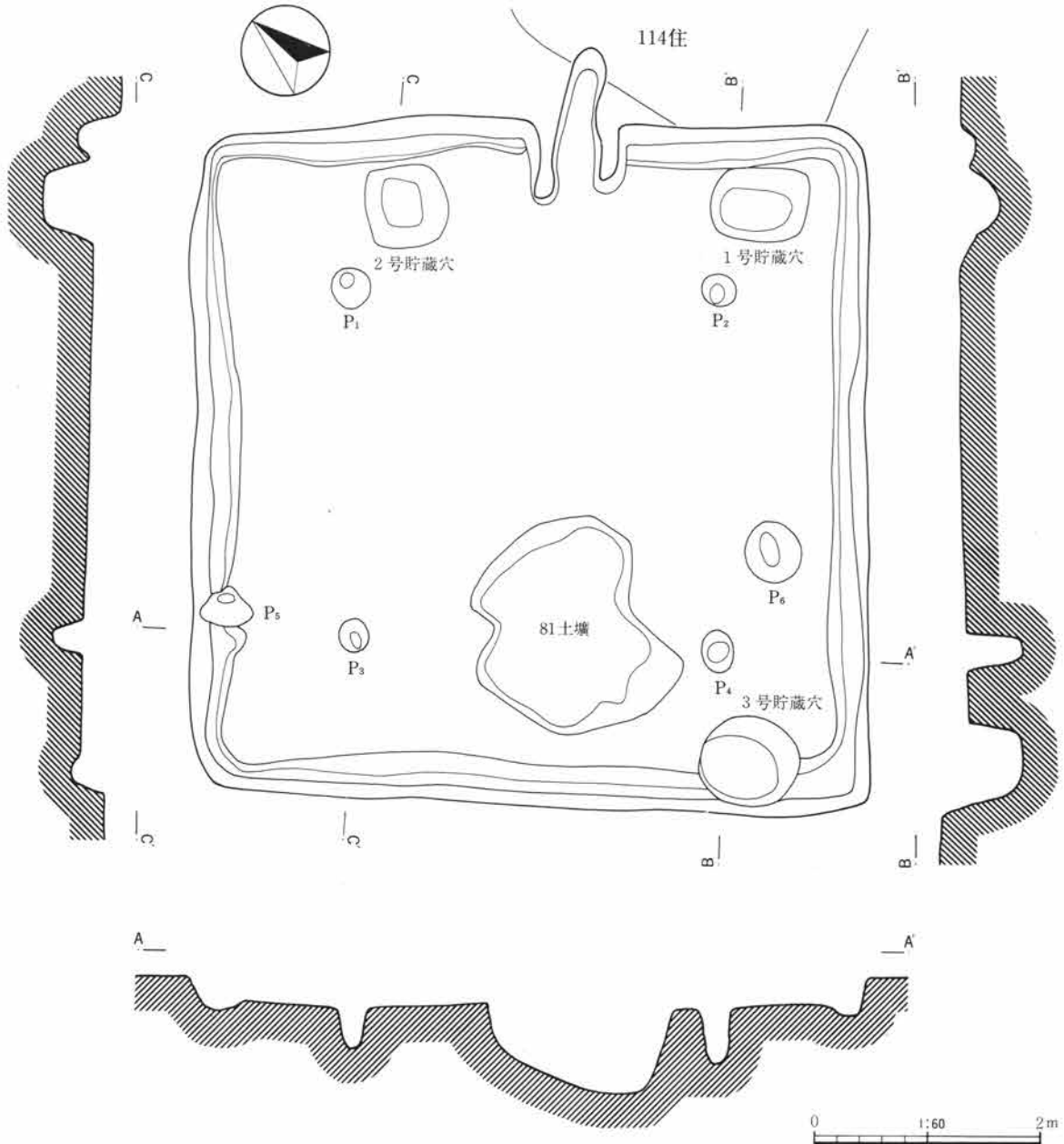
第30図 115号住居跡出土遺物(2)

117号住居跡 (第34図)

Ⅲ区L-12、M-12・13グリッドに位置し、平面形は横長長方形を呈する。規模は3.05×3.75mで、面積は11.07m²を測る。主軸方向はS-70°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は8~2cmである。床面は黒褐色土で、比較的平坦であるが、東から西へ緩く傾斜する。カマドは東壁南隅に構築されており、規模の小さい燃焼部のみ残存する。又右そでの壁は左そでの壁よりも内側に突出している。軸方向はS-67°-Eを指す。ピットは2基検出され、P₁は東北隅、P₂は西北隅に位置する。規模はP₁が径52×42cm深さ7.5cm、P₂が径55×42cm深さ8cmを測る。又P₁-P₂のピット間距離は2.20mを測る。

遺物は平安時代と思われる甕片が数点出土したのみである。

重複遺構は118号住居跡で新旧関係は118号住→117号住である。又西壁の一部は柵列のピットと重複しているが新旧関係は不明であった。



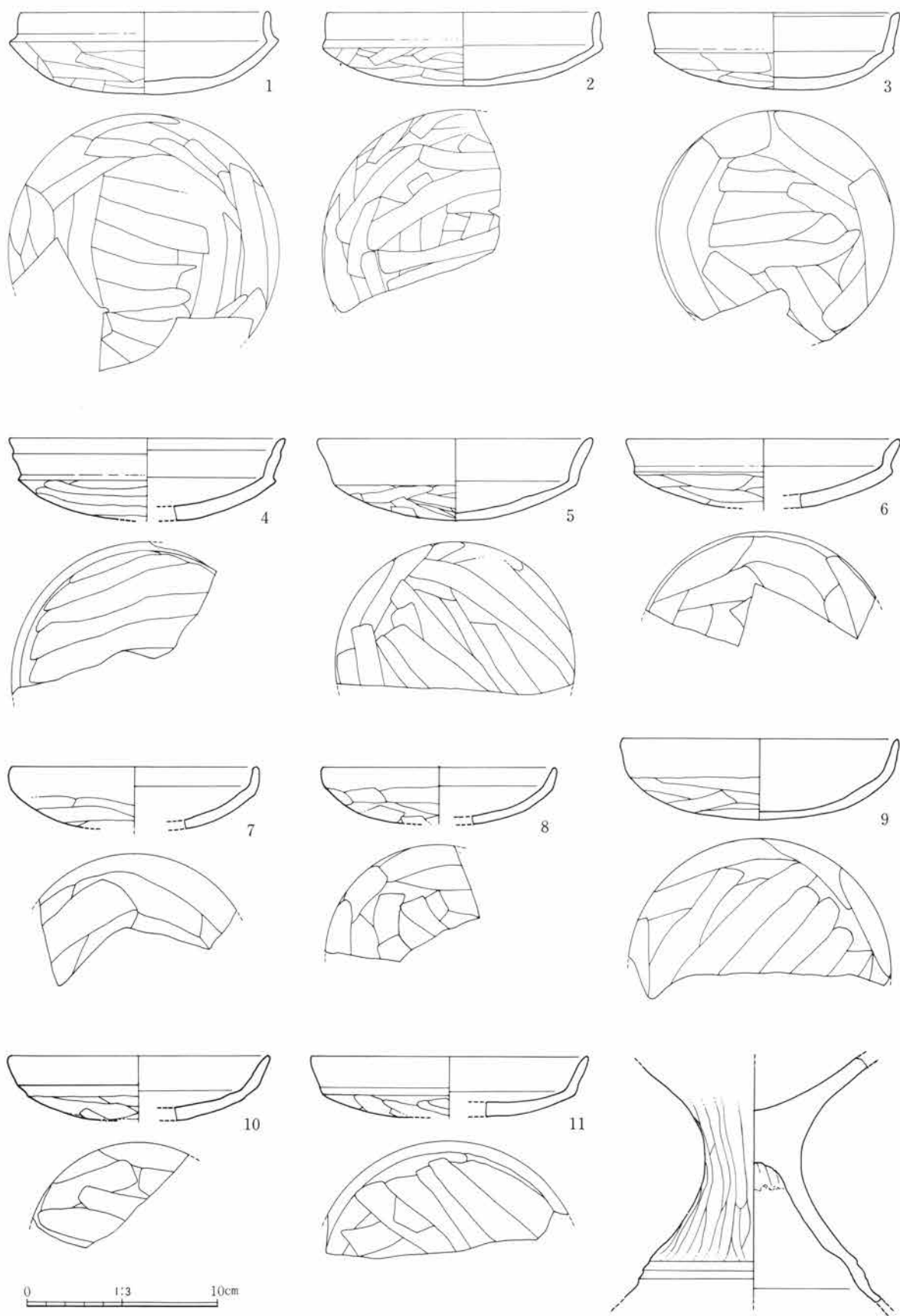
第31図 116号住居跡

118号住居跡 (第34図)

L-11・12、M-12グリッドに位置する。西南隅が方形状に張り出すやや歪んだ正方形で、規模は3.45×3.15mを測る。面積は10.62㎡を測る。主軸方向はN-29°-Eを指す。壁はやや外傾気味で、確認壁高は29～5cmを測る。床面はローム土を基盤としており、中央部分がやや高くなっている。カマドは若干の粘土の存在から北壁中央部と思われるが、その形態、規模等については不明である。

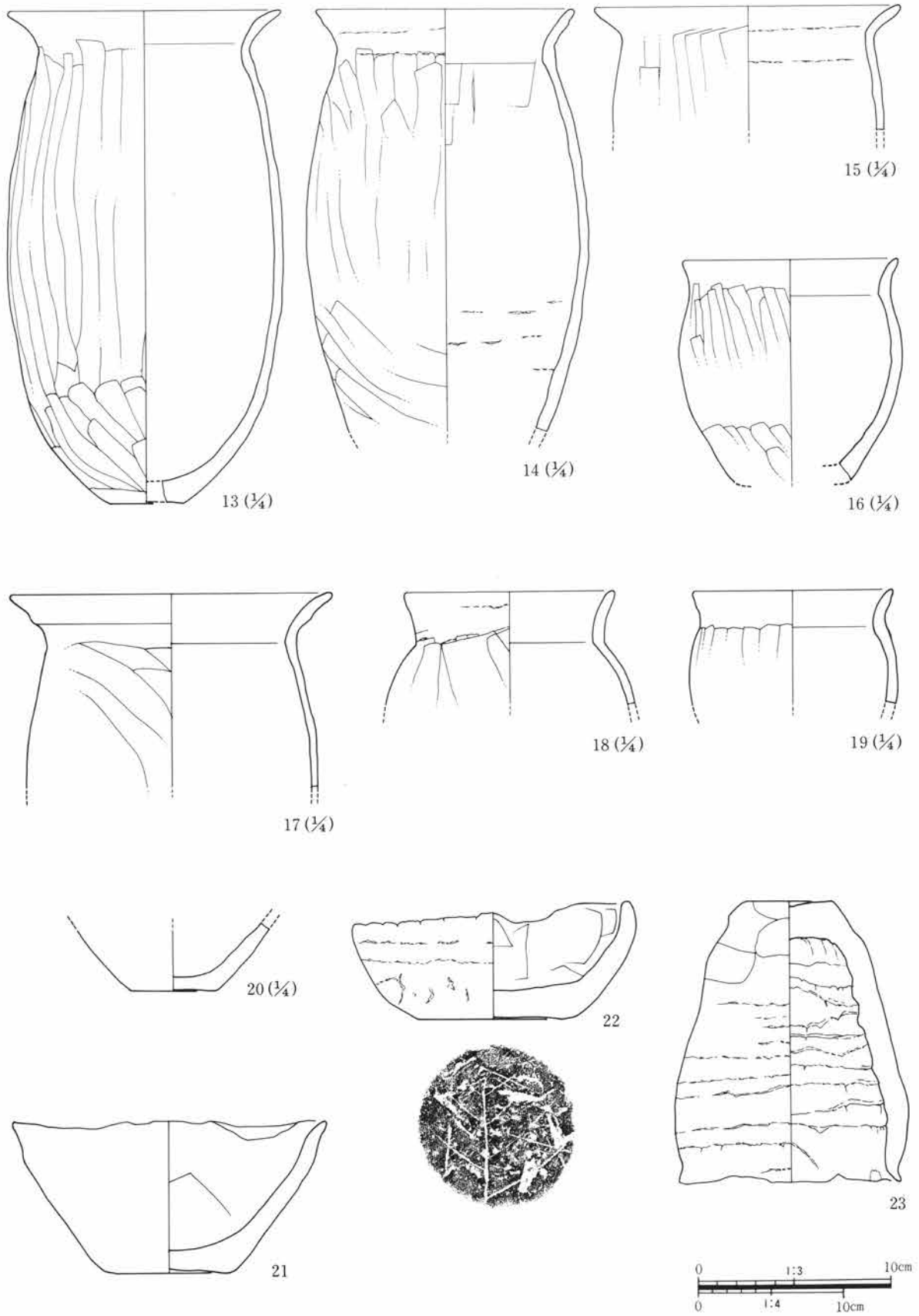
遺物はほとんどが床面から15～5cm程の高さで出土している。器種は土師器の杯、壺、甕、鉢、甑、高杯等がある。又砥石も1点出土している。時期は奈良時代後半のものと捉えられる。

重複遺構は117号住、58号土壇、59号土壇で、判明した新旧関係は118号住→117号住である。

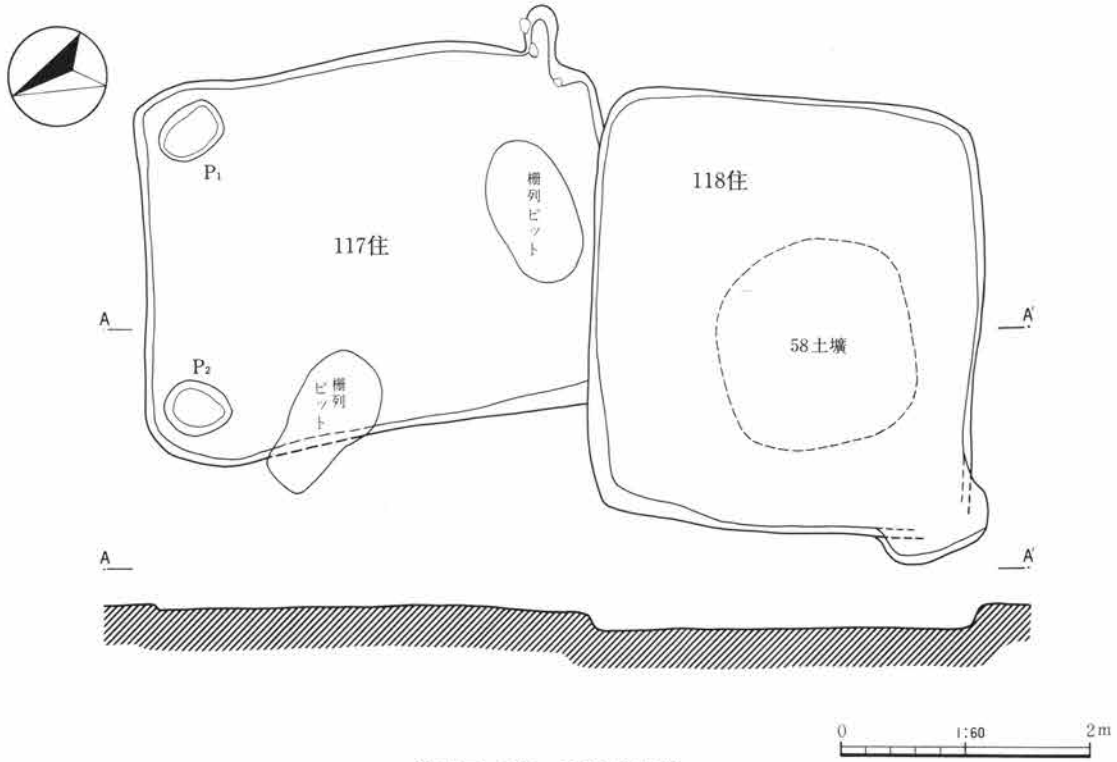


第32図 116号住居跡出土遺物(1)

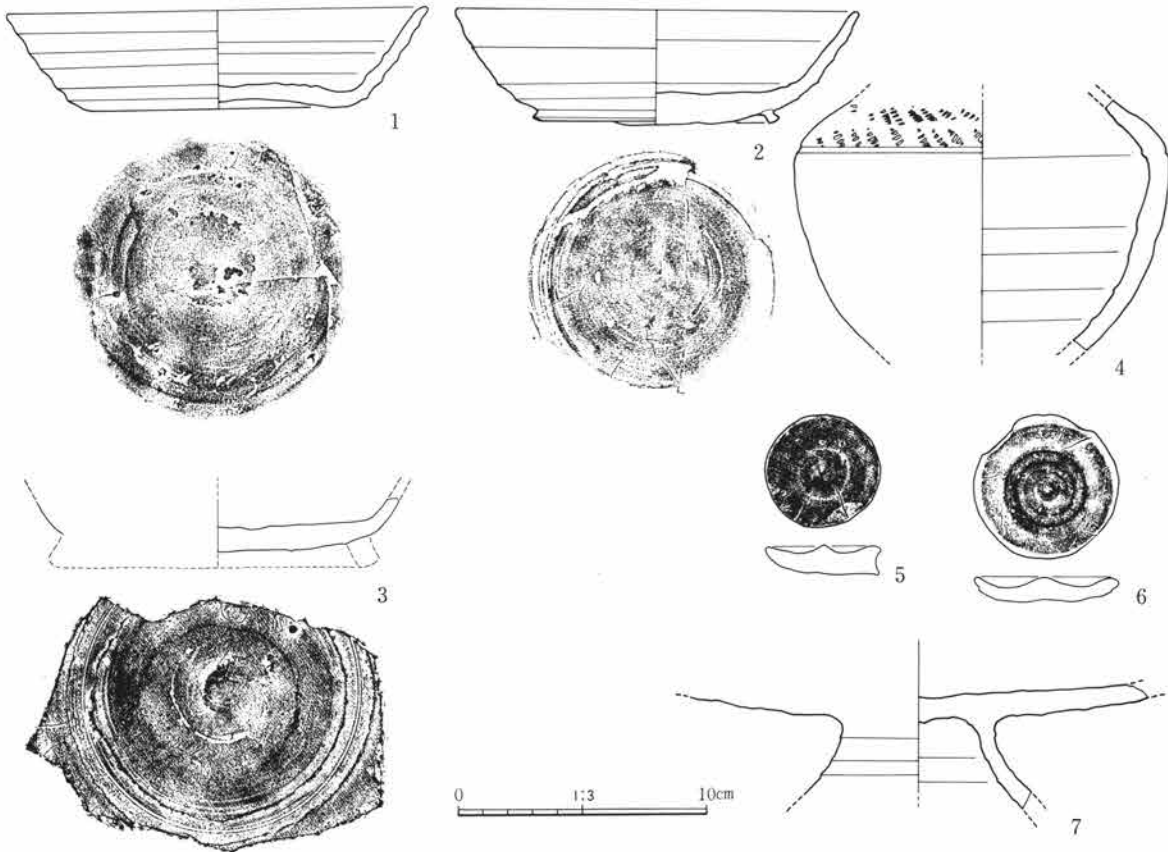
12



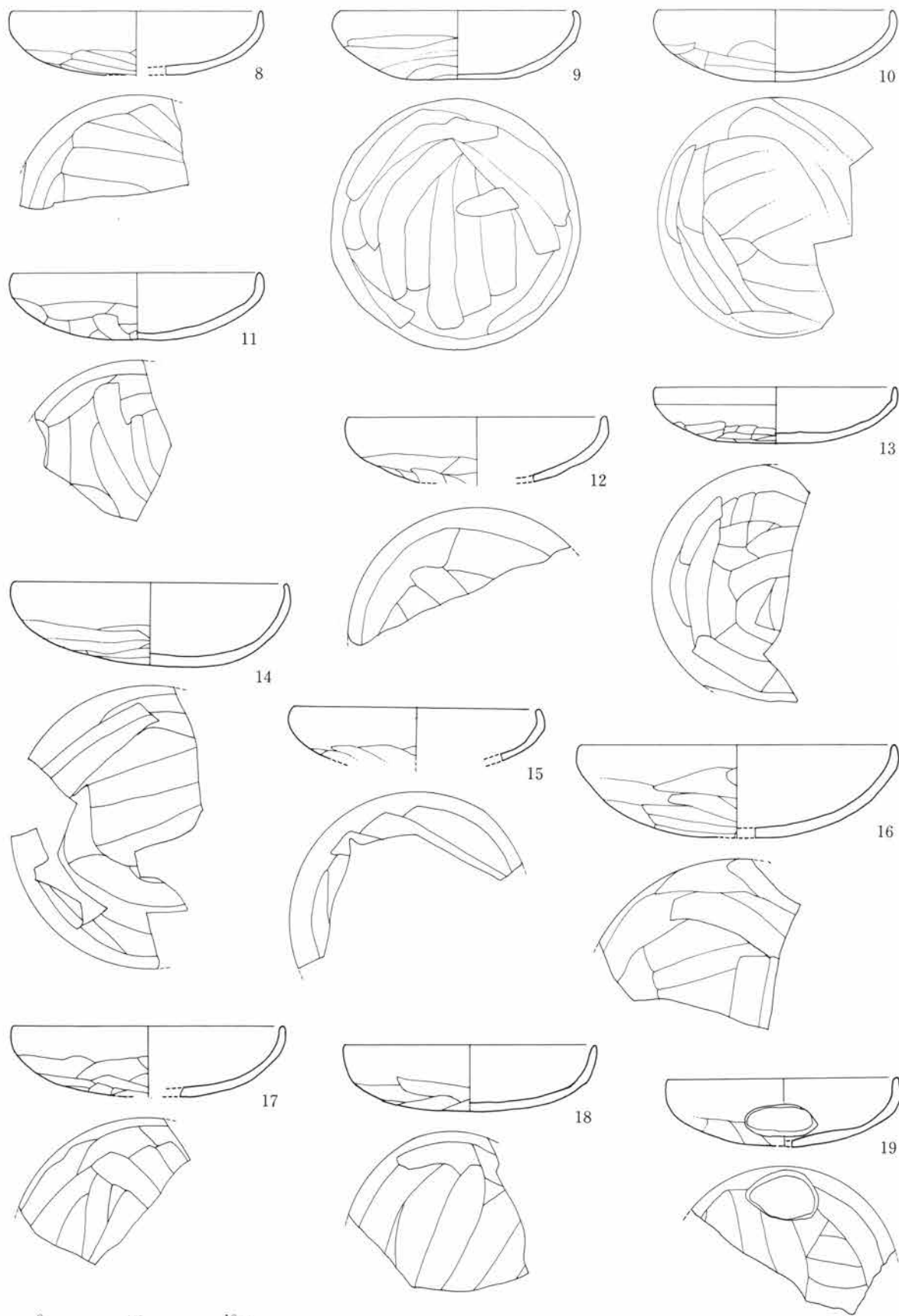
第33図 116号住居跡出土遺物(2)



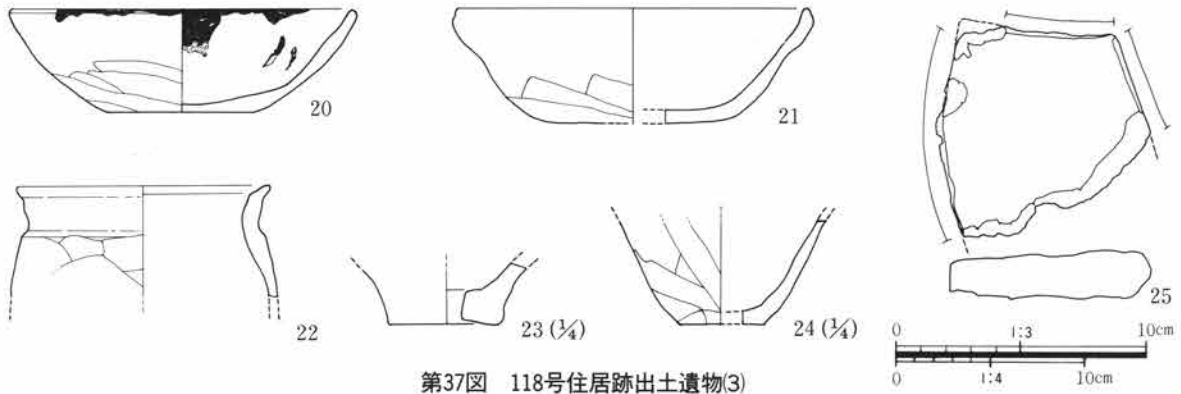
第34図 117・118号住居跡



第35図 118号住居跡出土遺物(1)



第36図 118号住居跡出土遺物(2)

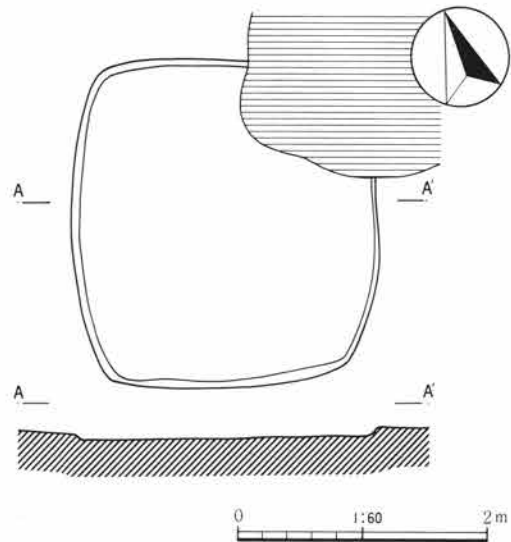


第37図 118号住居跡出土遺物(3)

119号住居跡 (第38図)

Ⅲ区K-12、L-12グリッドに位置する。平面形は隅丸正方形と思われるが、北東部分は攪乱層と重複するため、不明である。規模は2.62×2.41mで、面積は推定で5㎡前後を測る。主軸方向はN-20°-Eを指す。壁はほぼ垂直と思われるが、崩落部分が多い。確認壁高は6~2cmである。床面は中央部が周囲よりやや高く盛り上がっており、全体に凹凸が激しい。カマドは位置、形状とも不明であるが、北東の壁から粘土が検出されており、この部分に構築された可能性が考えられるが検出はできなかった。

出土遺物はなし。



第38図 119号住居跡

122号住居跡 (第39図)

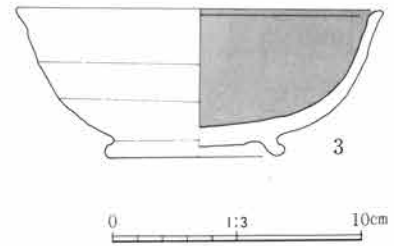
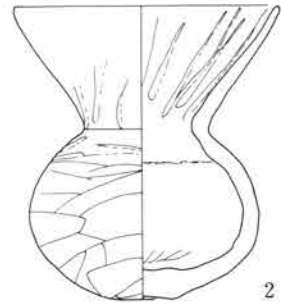
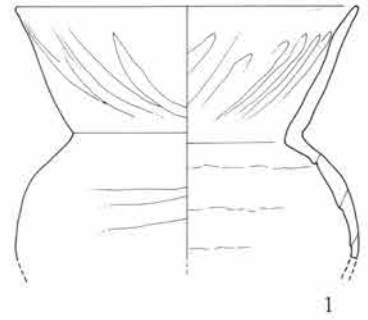
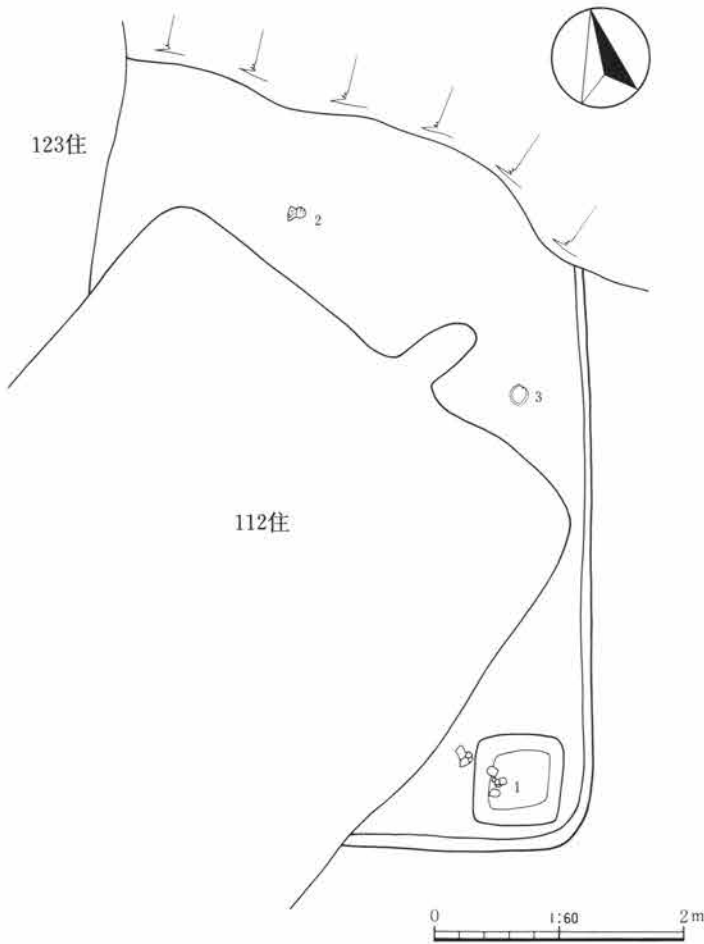
Ⅲ区O-13・14、P-13グリッドに位置する。平面形は方形と思われるが、北半及び西半については不明である。規模は不明である。主軸方向はN-15°-Eである。壁はやや外傾する。残存部が少なく確認壁高は14cm前後である。床面は凹凸が多く残存状態は不良である。カマド、柱穴、周溝は認められなかった。貯蔵穴は南東コーナー部分で検出された。平面形は方形を呈し、規模は70×70cmで、深さは42cmを測る。

遺物は埴と高台椀が出土している。埴は貯蔵穴と床面上より出土しており、高台椀は時期の全く異なるものであるが東壁際の床面付近より出土する。遺構重複等によるまぎれ込みと考えたい。

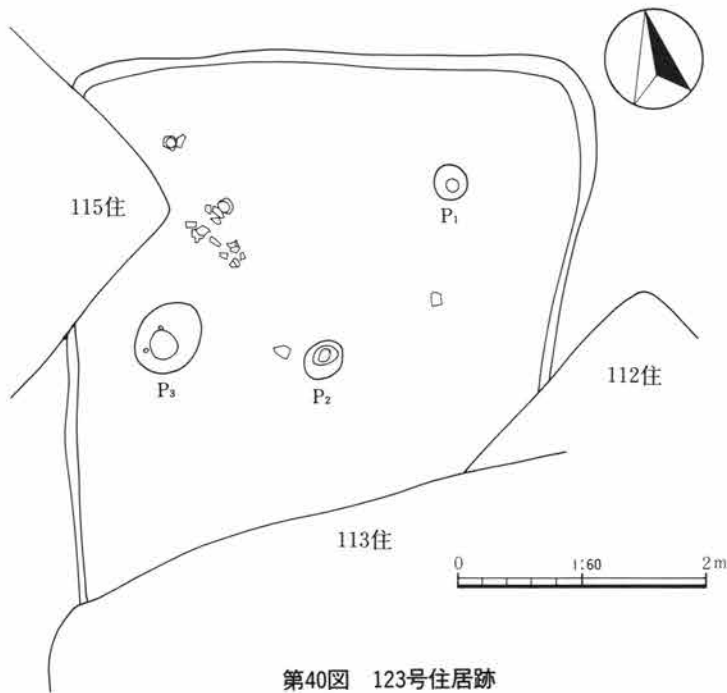
重複遺構は112号住居跡、123号住居跡で、新旧関係はカマド残存状況より122号住→112号住である。又北側は早川の崖により切られている。

123号住居跡 (第40図、PL 2)

Ⅲ区N-14、O-14・15グリッドに位置する。平面形はおそらく長方形と思われる。規模は不明である。主軸方向はN-10°-W付近を指すと思われる。壁はほぼ直立気味に立ち上がり、確認壁高は24~15cmを測る。床面は平坦で、ローム土を基盤としている。ピットは3基が検出された。P₁は北東コーナー付近、P₂はほぼ



第39図 122号住居跡及び出土遺物

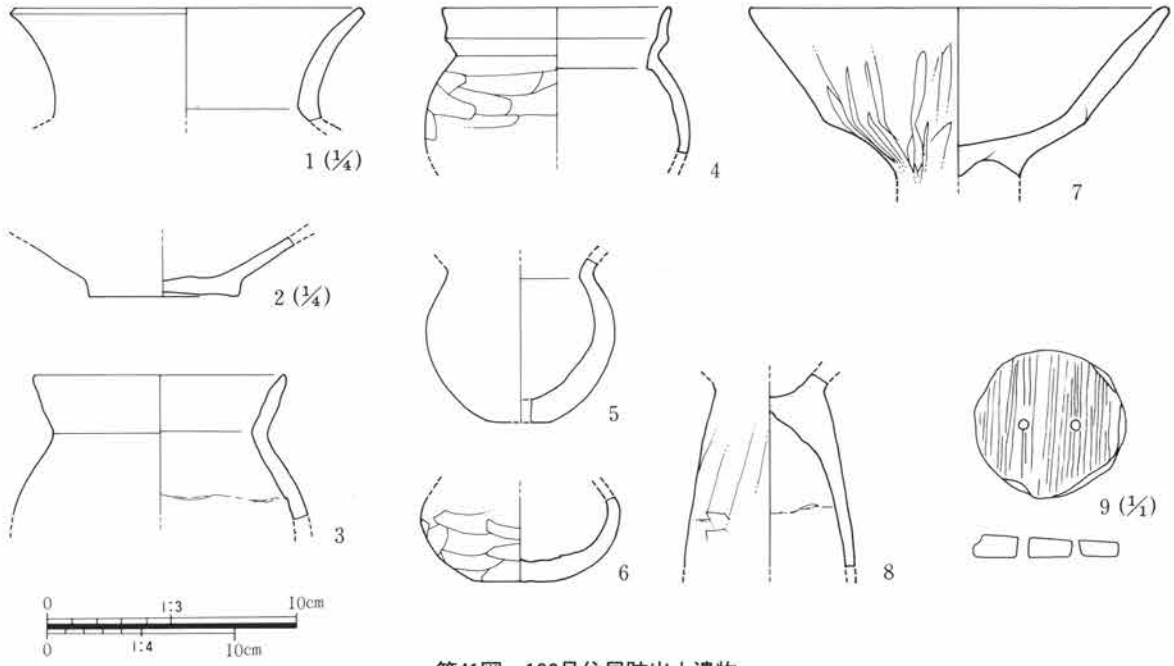


第40図 123号住居跡

中央部、P₃は西壁際中央付近にある。規模はP₁が径28cm深さ8cm、P₂は径30cm深さ21cm、P₃は径60×48cm深さ25cmである。なおP₂の中央より碟が出土している。

遺物は高杯、壺、甕、埴及び石製模造品が覆土から出土している。これらの遺物は古墳時代中葉の和泉式の新段階かあるいは鬼高式の古段階に該当するものと思われる。

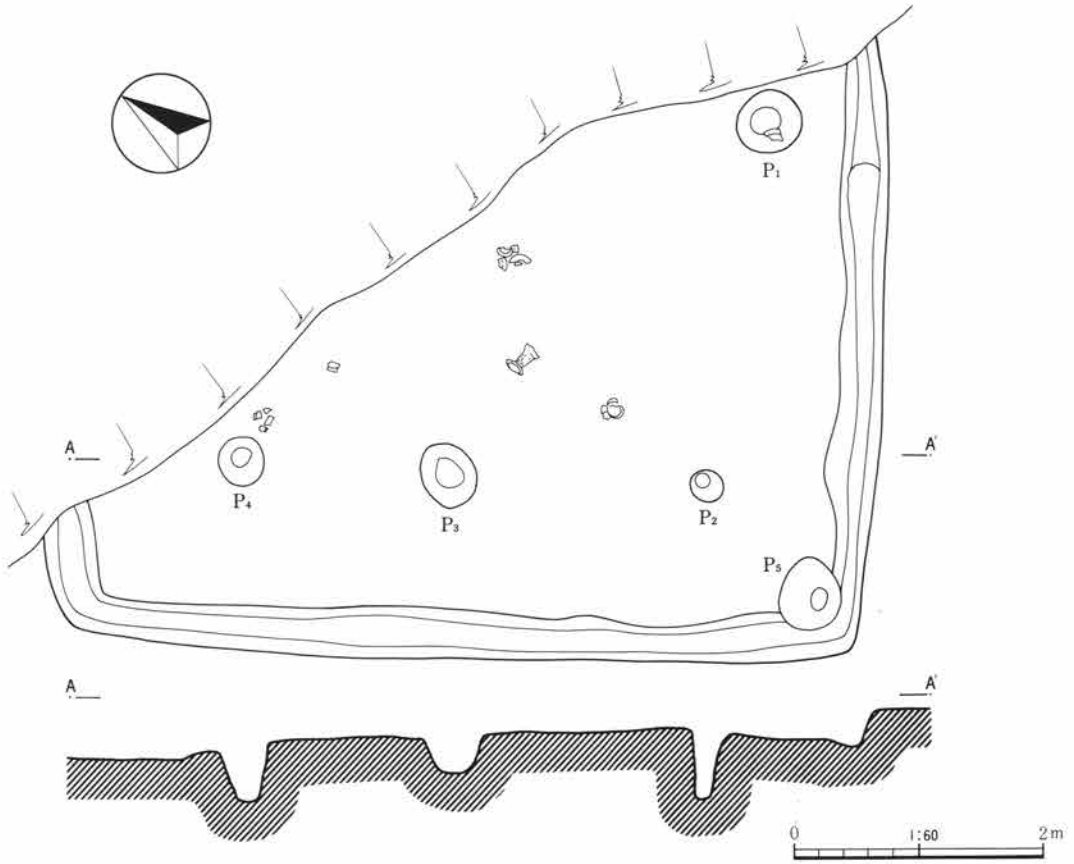
重複遺構は112号住居跡、113号住居跡、115号住居跡で、新旧関係は土層観察より123号住→112号住・113号住・115号住と思われる。



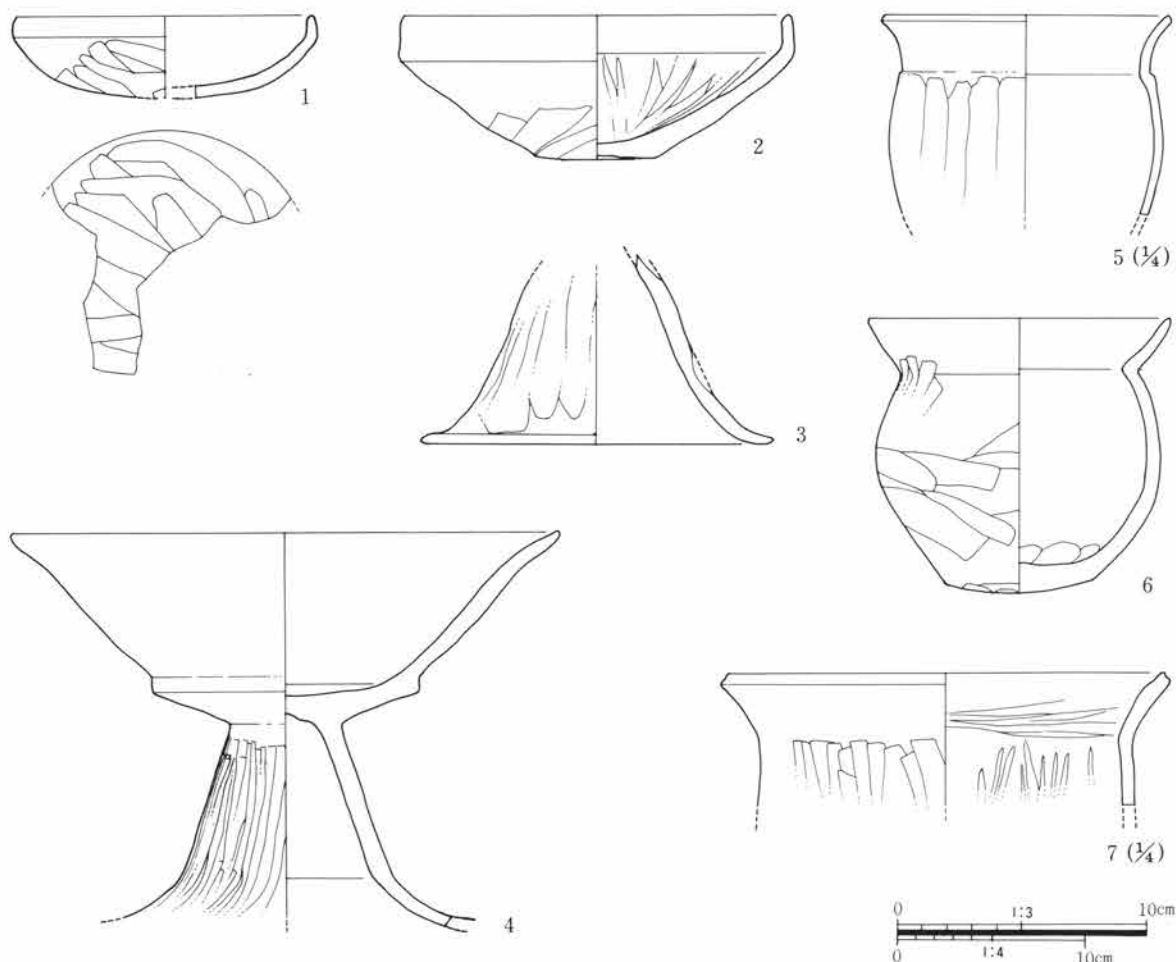
第41図 123号住居跡出土遺物

124号住居跡 (第42図)

Ⅲ区N-16・17、O-16・17グリッドに位置する。平面形は方形と思われ、規模は6.6m×(4.85以上)m



第42図 124号住居跡



第43図 124号住居跡出土遺物

で、主軸方向はN-55°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は34~16cmを測る。床面は中央部がやや高くなっている。基盤はローム土である。カマドは確認できなかった。ピットは5基が検出され、規模はP₁が径50cm深さ42cm、P₂は径26cm深さ56cm、P₃は径52cm深さ30cm、P₄は径36cm深さ48cm、P₅は径55cm深さ42cmを測る。位置的にはP₁~P₄が柱穴になると思われる。柱間距離はP₁-P₂が2.90m、P₂-P₃は2.05m、P₃-P₄は1.70mを測る。周溝は全周すると思われる、幅40~25cm、深さ15cmを測る。

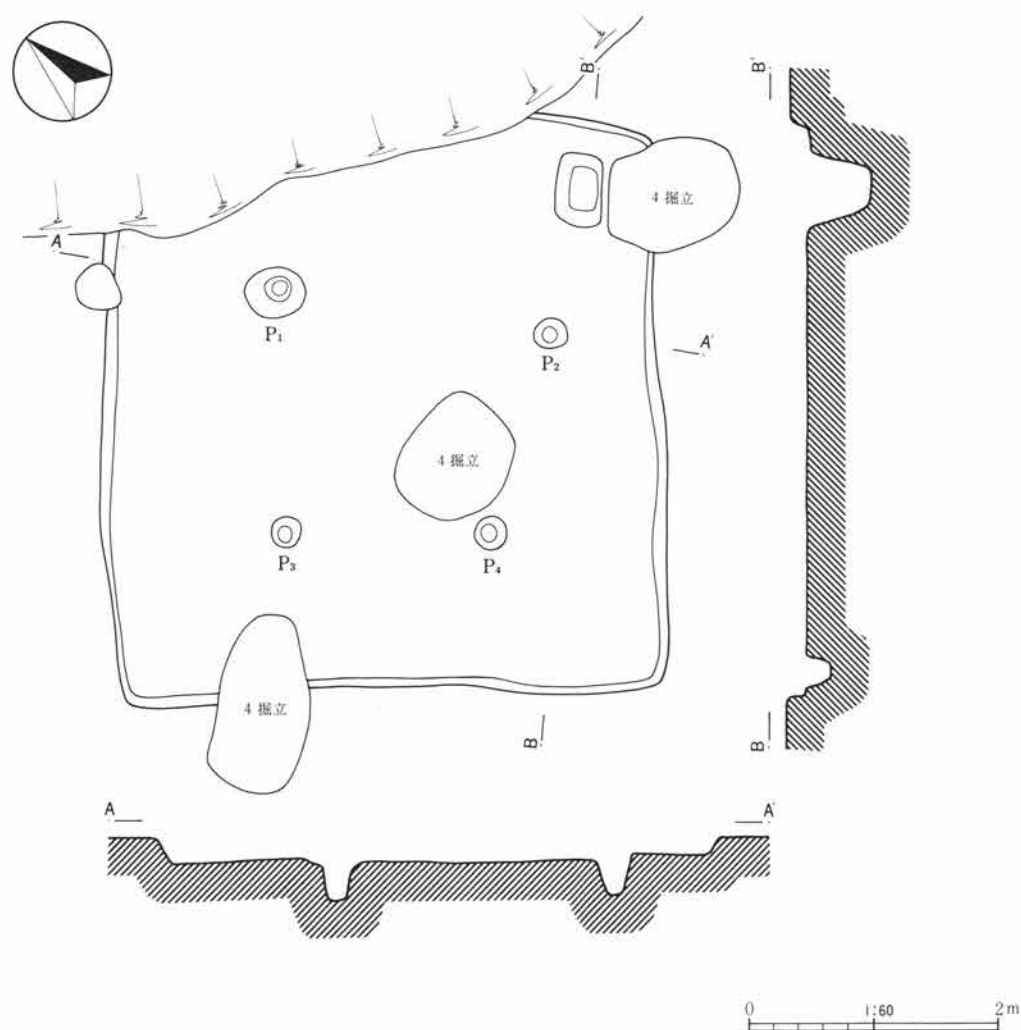
覆土は浅間B軽石を多量に含む黒褐色土がレンズ状に厚く堆積する。

遺物は床面及び床面より若干浮き、全体に散乱した状態で出土している。器種は土師器（高杯、壺、甕、埴）等があり、覆土上層からは須恵器（甕、杯）等が出土している。床面上及び付近から出土した土器はほとんどが古墳時代後期初頭（鬼高式段階）のものに限られるようである。

重複遺構はなく単独の検出であるが、北半を早川の崖で切られる。

125号住居跡（第44図、PL 2）

Ⅲ区L-19・20、M-19・20グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈し、規模は4.55×4.55mで、面積は19.20m²を測る。主軸方向はN-49°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、推定壁高は19~5cmを測る。床面は中央部がやや高いが全体的にはほぼ平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは4基が検出され、規模



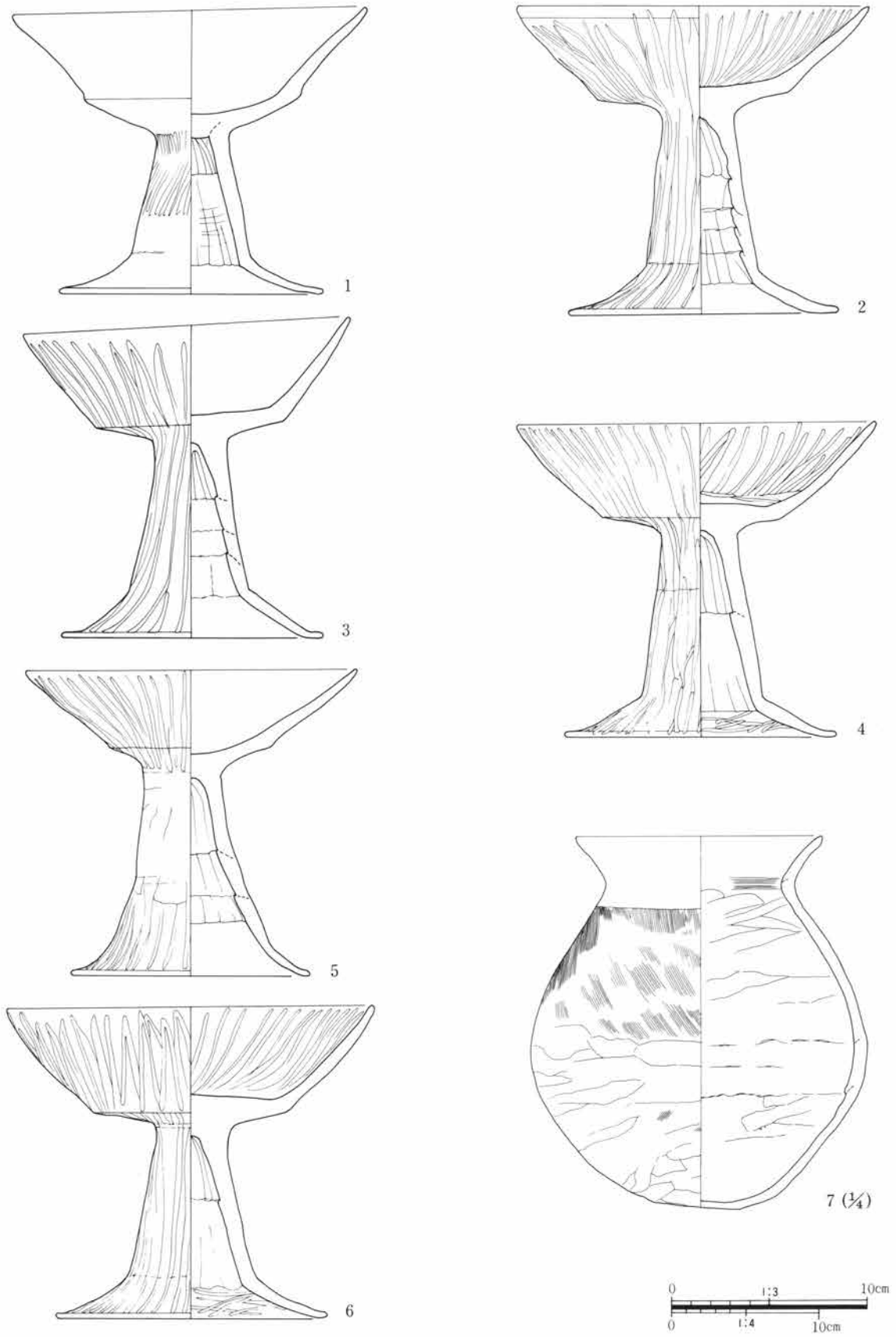
第44図 125号住居跡

はP₁が径50×40cm深さ37cm、P₂が径27cm深さ28cm、P₃が径25cm深さ46.5cm、P₄が径27cm深さ42cmを測る。これらはP₂の位置がややずれるが、形態や規模からみて支柱穴と考えられよう。柱間距離はP₁－P₂が2.30m、P₁－P₃は1.85m、P₃－P₄は1.60m、P₂－P₄は1.63cmを測る。貯蔵穴は南東コーナー部分で検出された。平面は長方形を呈し、規模は58×37cm、深さ46.5cmを測る。

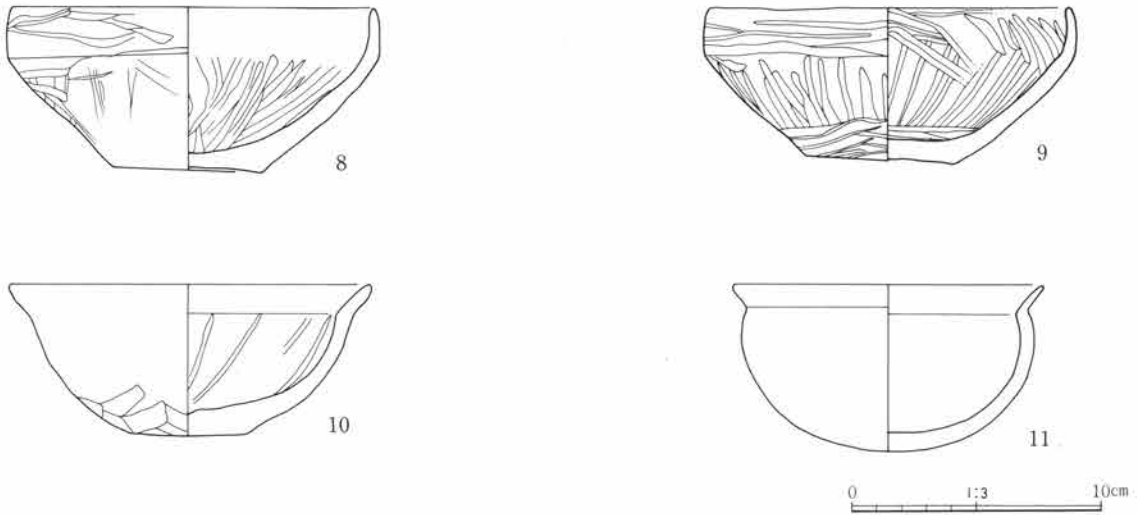
覆土は有機物とロームブロックを含む黒色砂質土が厚くレンズ状に堆積している。軽石等の火山噴出物はほとんど見られない。

遺物は住居跡全体から、ほとんどが床面密着の状態出土した。貯蔵穴からは高杯と鉢が落ち込んだ状態で、又甕が貯蔵穴の脇に据えられた状態で出土している。これらは器形の特徴、又器種構成から古墳時代中葉（和泉式）のものと思われる。

重複遺構は4号掘立柱建築遺構で、中央部と南東及び南西コーナー部分はその柱穴によって切られる。又北側部分は早川の崖により切り崩されている。



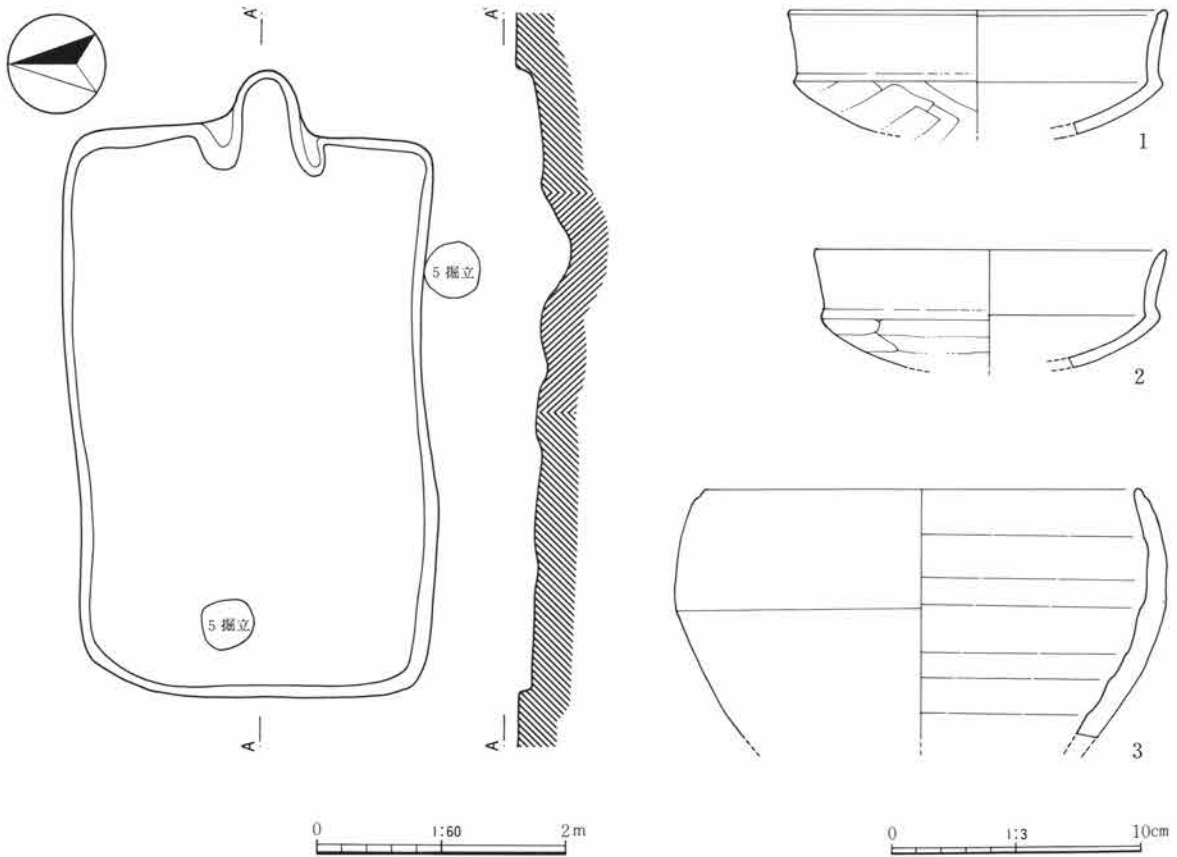
第45図 125号住居跡出土遺物(1)



第46図 125号住居跡出土遺物(2)

126号住居跡 (第47図)

III区J-20・21、K-20・21グリッドに位置する。平面形は縦長長方形で、規模は4.55×2.95m、面積は11.03㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁は残存状態不良で、やや外傾する部分が多い。確認壁高は20~5cmである。床面は凹凸が非常に激しい。カマドは東壁中央部分で検出された。規模は長さ80cm、幅100



第47図 126号住居跡及び出土遺物

cmを測り軸方向はN-88°-Eを指す。そで部は粘土で構築されており、燃焼部は壁外へ張り出している。煙道部は不明であった。

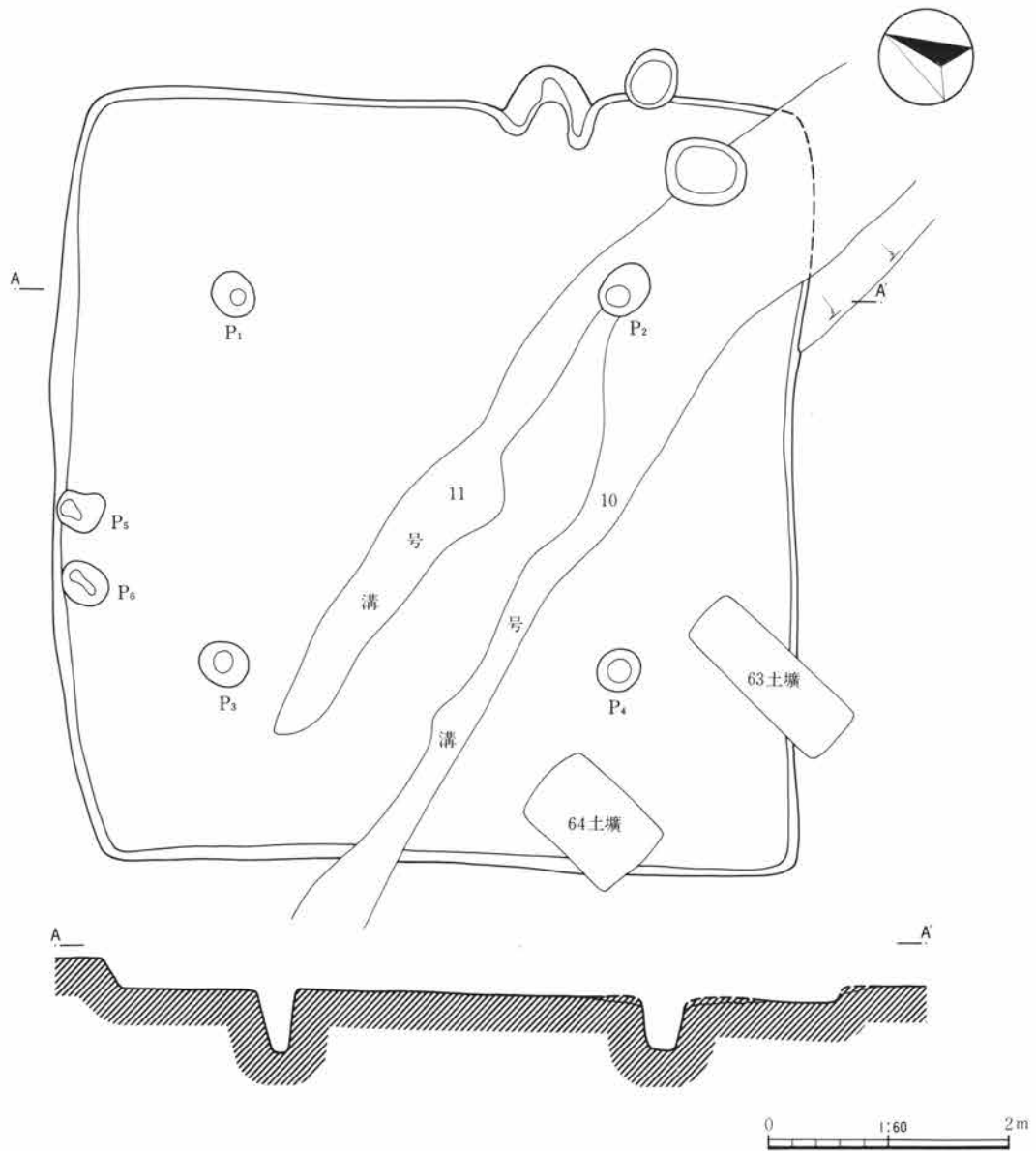
覆土は上層に浅間B軽石を含む黒褐色土、下層にローム土粒を多量に含む黒色土が堆積する。

遺物は土師器（杯、甕、壺）の破片、須恵器鉢等が出土している。

重複遺構は5号掘立柱建築遺構で、新旧関係は126号住→5号掘立である。又中央部分に掘り形と思われるピットが検出されている。

127号住居跡（第48図）

III区J-23・24・25、K-22・23・24グリッドに位置する。平面形は正方形を呈し、規模は6.35×6.20m、面積は38.20m²を測る。主軸方向はN-60°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は29～2cmを測る。床



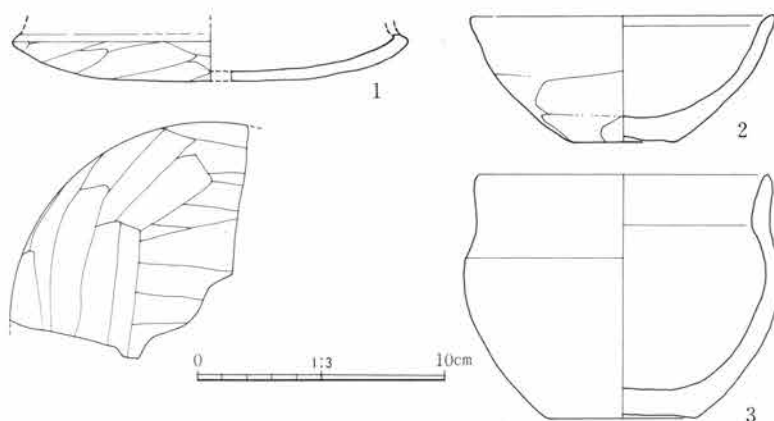
第48図 127号住居跡

面は地山のロームを基盤としており、中央部がやや高く硬質である。カマドは東壁中央からやや南寄りで検出された。長さ65cm、幅80cmで、軸方向はN-61°-Eを指す。規模は比較的小さく、煙道は検出されなかった。燃焼部奥壁は住居掘り形時の壁をそのまま利用する。貯蔵穴は東南隅で検出された。平面は楕円形を呈し、規模は径55×52cmで、深さは30cmを測る。ピットは6基が検出されており、規模はP₁が径30cm深さ54cm、P₂が径48cm深さ38cm、P₃は径40cm深さ52.5cm、P₄は径30cm深さ46cm、P₅は径38cm深さ21.5cm、P₆は径39cm深さ16cmを測る。位置と規模からP₁~P₄は柱穴、P₅とP₆は入口施設に伴うピットかと思われる。柱間距離はP₁-P₂は3.16m、P₃-P₄は3.30m、

P₁-P₃は3.00m、P₂-P₄は3.06m、P₅-P₆は0.55mを測る。

遺物は土師器（杯、鉢、小形壺、高杯）等が覆土中より出土している。いずれも古墳時代後期鬼高式に該当する。

重複遺構は9~11号溝、63号・64号土塋でいずれも本住居跡より新しい。



第49図 127号住居跡出土遺物

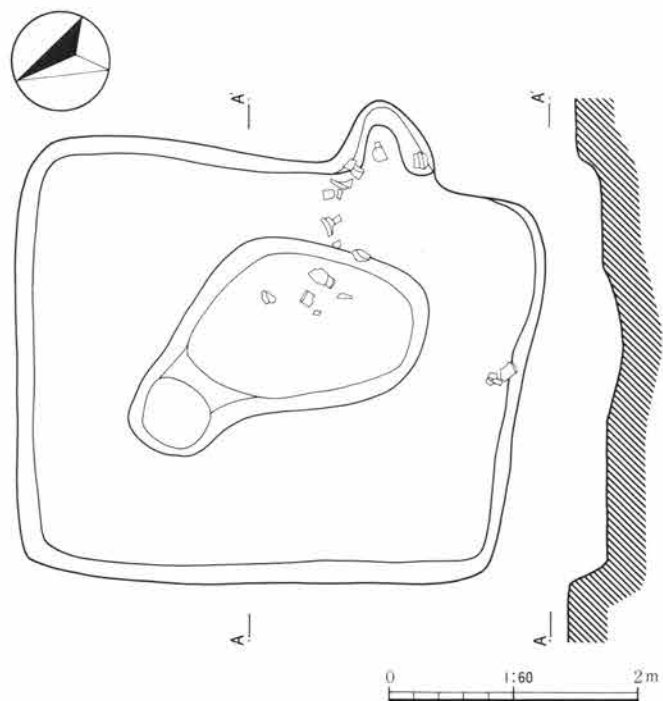
128号住居跡（第50図、PL 2）

III区I-24、J-25グリッド、IV区I-1、J-1グリッドに位置する。平面形は横長長方形を呈し、規模は3.48×4.25mで、面積は12.67㎡を測る。主軸方向はS-75°-Eを指す。壁はやや外傾気味に掘り込まれる。確認壁高は22cm前後である。床面は地山のローム土を基盤としており、中央部分がやや高くなっている。カマドは東壁の中央から南寄りの部分で検出された。そで部は確認されず、燃焼部は壁外に張り出す。煙道部は不明。規模は長さ58cm、幅84cmを測り、軸方向はS-70°-Eを指す。

覆土は上層に浅間B軽石を含む褐色土、下層にはローム土粒を含む黒色土が堆積する。

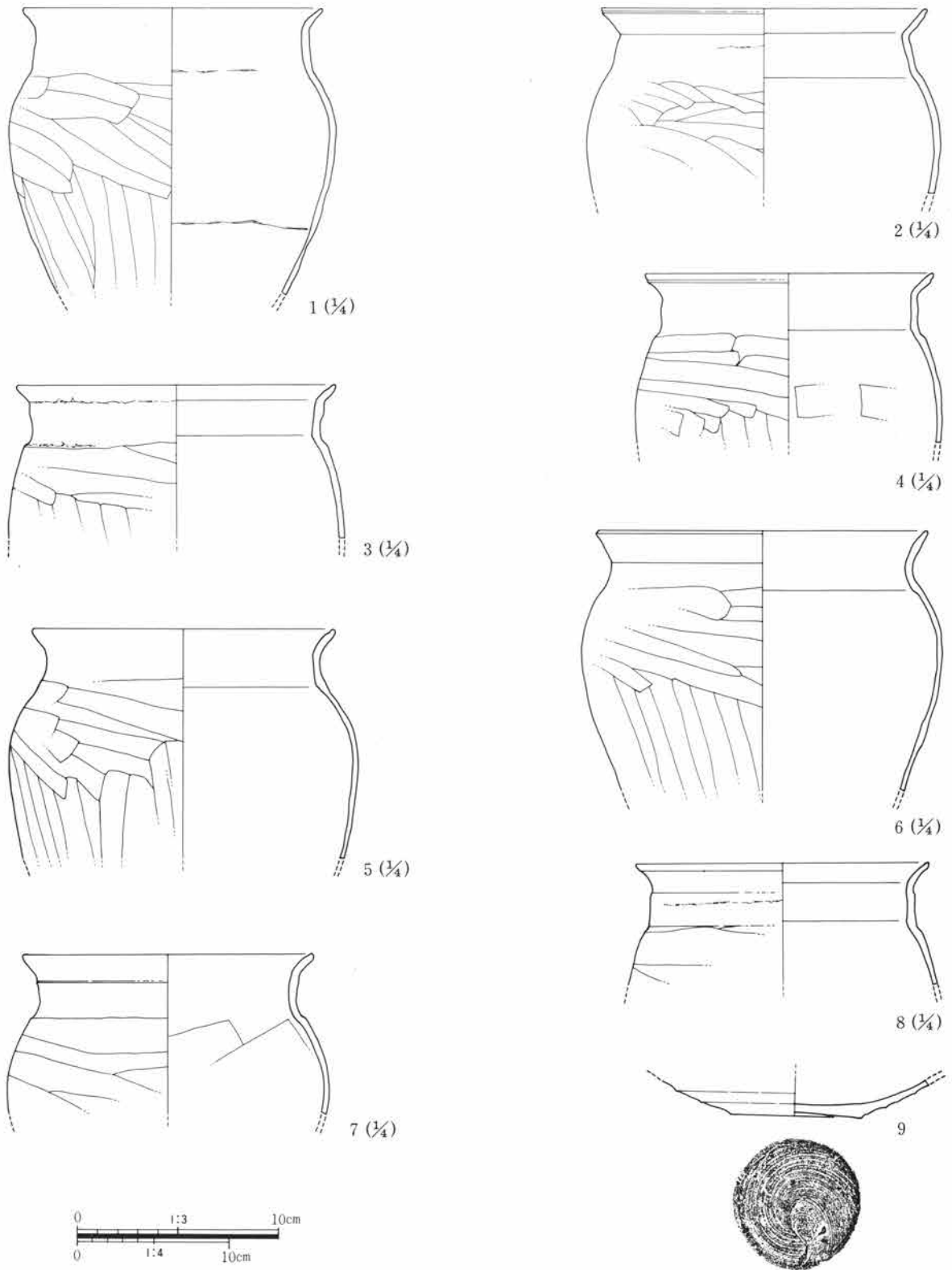
遺物は甕片が主体で、土師器（壺、杯）等の小破片が少量出土している。遺物はカマド周辺の覆土下位に集中した状態で出土した。

重複遺構は11号溝で、南側コーナー部分において本住居跡を切っている。なお床面中央部分に規模が2.6×



第50図 128号住居跡

1.4m程度、深さ25cmの掘り込みがあり、これは住居下層の覆土と同質の土が堆積しており、更にこの掘り込みから出土した土器片がカマド周辺出土の土器片と接合関係にある事から本住居跡に伴う可能性が高いが、その性格については不明である。



第51図 128号住居跡出土遺物

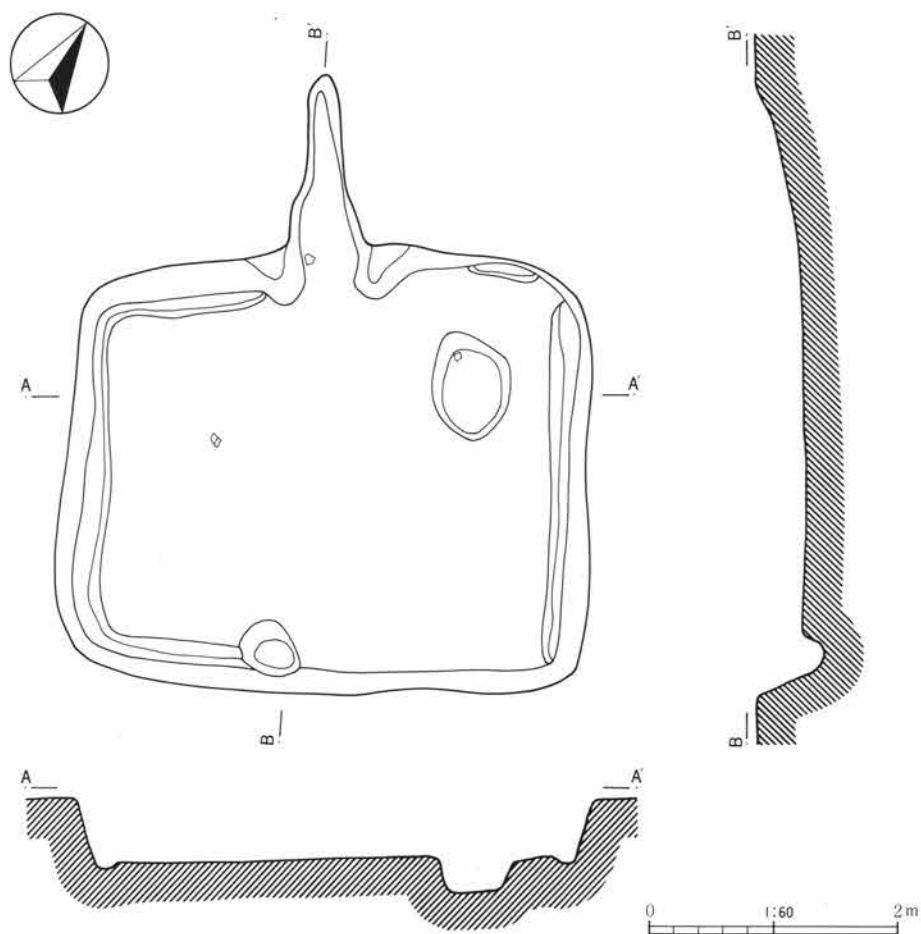
133号住居跡 (第52図)

IV区 I-6.7、J-6.7グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.54×4.30mで、面積は12.33㎡を測る。主軸方向はN-35°-Wを指す。壁は残存状態良好で、確認壁高は53~29cmを測る。床面は地山のローム土を基盤としており、全体に平坦で硬質である。カマドは北壁中央に構築される。残存状態は良好である。そで部は粘土で構築され壁内に張り出す。燃焼部と煙道部は壁外へ張り出す。長さ1.82mで、そのうち燃焼部長は60cm前後、煙道長は90cm前後を測る。軸方向はN-36°-Wを指す。全体幅は1.30mで、燃焼部幅は45cmを測る。煙道は燃焼部底面から緩い傾斜をもって立ち上がる。貯蔵穴と思われるピットが北東隅に検出された。楕円形のプランを呈し、規模は87×59cm、深さ23cmを測る。又南壁際の中央からやや西寄りに1基のピットが検出されており、径53×43cm、深さ15cmの規模をもつもので、その位置や他のピットが確認されない事から柱穴とは考えにくい。周溝は南壁際のピットより東側部分を除いて廻っている。幅は25~15cmで深さは5~3cmを測る。

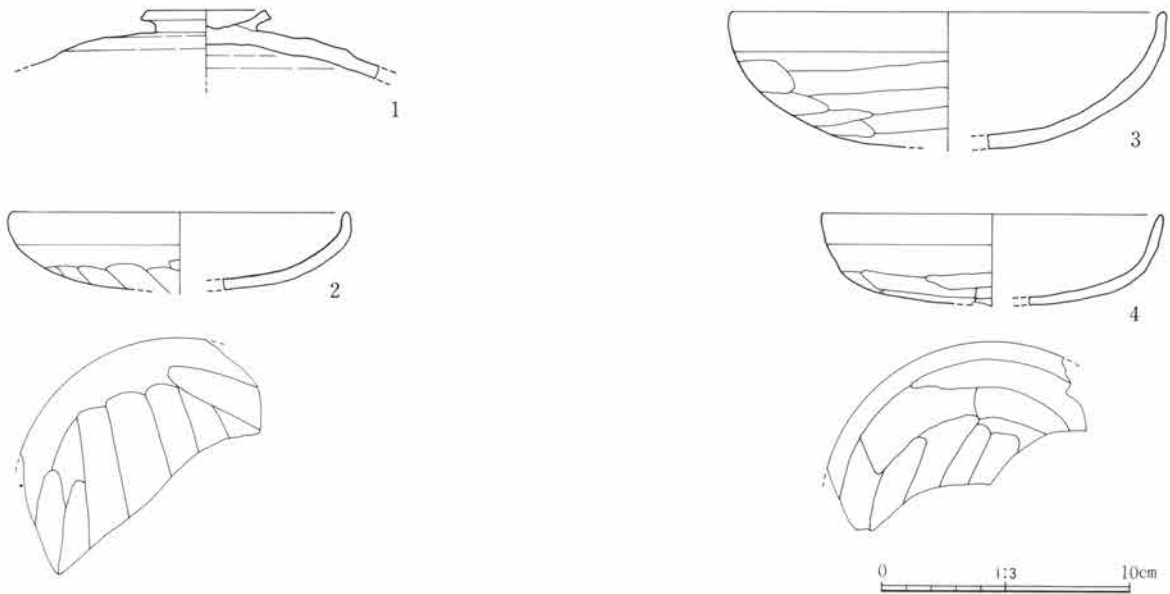
覆土は上層に浅間B軽石を多く含む褐色土が堆積し、下層にはロームブロックを多量に含む黒褐色土が堆積する。

遺物は土師器(杯、甕)が主体で、その他須恵器(蓋、高台付杯)等が床面密着及び覆土下層から出土している。これらは奈良時代に属するものと思われる。

重複遺構は135号住居跡で、北側コーナー部分において重複するが、新旧関係については確認できなかった。



第52図 133号住居跡



第53図 133号住居跡出土遺物

135号住居跡 (第54図)

IV区J-6・7、K-6・7グリッドに位置する。平面はおそらく横長長方形と思われる。主軸方向の長さは2.83mで、その直行軸方向の長さは不明。壁は外傾する。床面は凹凸が激しく、軟質な部分が多い。カマドは東壁に構築され、位置的には135号住居跡のカマドの南側に隣接する。そで部、燃焼部は残存し、煙道部は不明である。軸方向はN-73°-Eを指す。貯蔵穴、ピット、周溝等は検出されなかった。

覆土は浅間B軽石及び炭化物粒、ローム粒の混入する黒褐色土が堆積する。

遺物は土師器甕及び須恵器杯が出土している。時期は奈良時代のものと思われる。

重複遺構は133号住居跡、136号住居跡で、判明した新旧関係は135号住→136号住である。

136号住居跡 (第54図)

IV区J-6・7、K-6・7グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は3.48×2.86m、面積は9.47㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁は残存状態不良でやや外傾する。確認壁高は26~15cm。床面は地山ローム土の上に貼床をする。カマドは東壁の中央よりやや南寄りで検出された。そで部と燃焼部が残存し、煙道部は不明である。規模は長さ76cm、幅70cm、軸方向はN-84°-Eを指す。南壁にそった西側コーナー寄りに長方形ピットが検出された。規模は1.20×0.67mで、深さ32cmを測る。

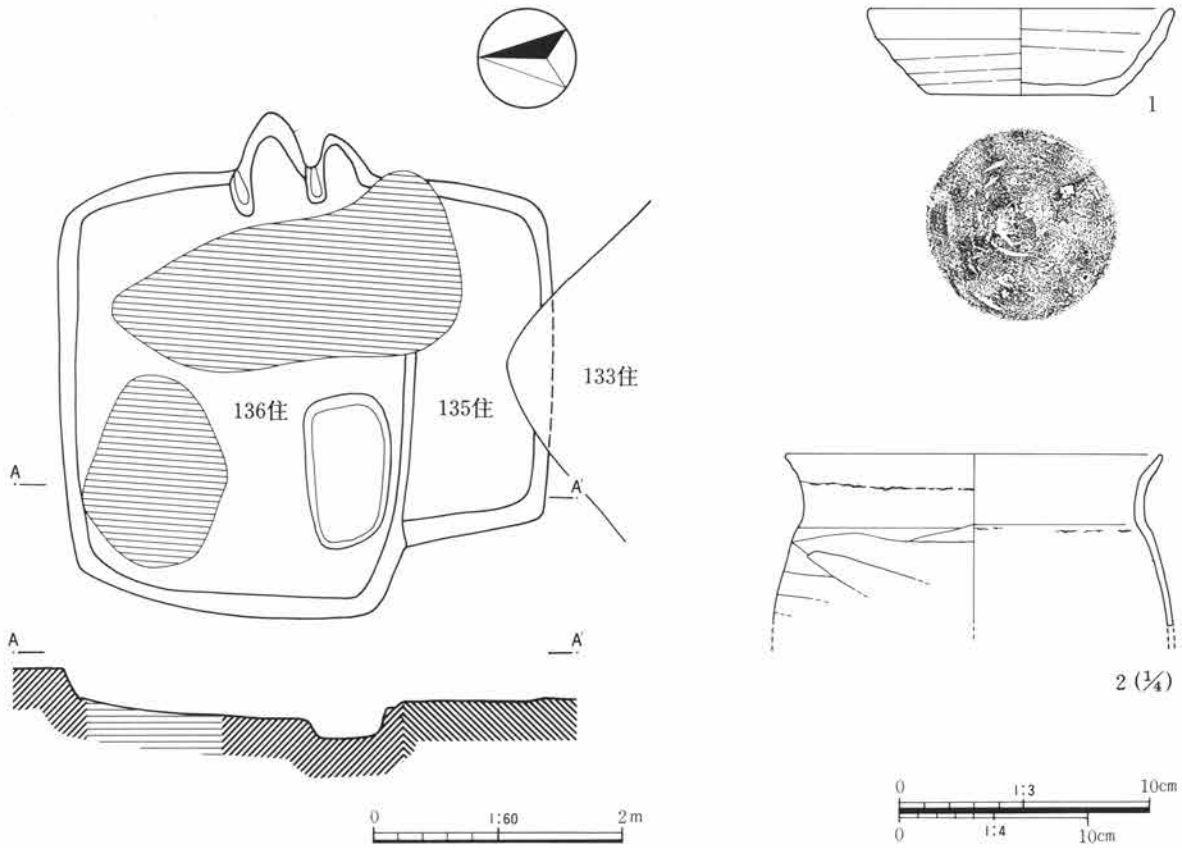
覆土は黒色砂質土が堆積している。

遺物は出土していない。

重複遺構は135号住居跡で、カマドそで部の残存状態及び土層断面の観察から、新旧関係は135号住→136号住と思われる。なおカマド前面の大部分と北西コーナー部分が攪乱層によって切られる。

137号住居跡 (第55図、PL 2)

IV区L-16・17、M-16・17グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.43×3.95m、面積は推定で18.60㎡前後を測る。主軸方向はN-58°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は19~4cmを測



第54図 135・136号住居跡及び135号住居跡出土遺物

る。床面は地山のローム土を基盤とし、比較的平坦で硬質である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。そで部が壁内に大きく張り出し、燃烧部の奥壁は住居掘り形時の壁をそのまま利用する。煙道部は確認できなかった。規模は長さ138cm、幅は85cmを測り、軸方向はN-55°-Eを指す。又カマド両脇の壁際はテラス状に地山を残し、左脇には甕、右脇からは楕円形の礫10数個が出土している。住居床面の中央部分に長方形を呈する土壙が検出された。規模は1.65×1.25mで深さは11cmを測る。更にその土壙の東半は階段状に掘り込まれており、住居床面からの深さは65cmを測る。この土壙内覆土は住居内覆土とほぼ同一であり、重複関係は不明瞭である。ピットは5基が検出された。P₁は径50×25cm深さ7.5cm、P₂は径38cm深さ16cm、P₃は径25cm深さ27cm、P₄は径45×35cm深さ15cm、P₅は径53cm深さ50.5cmを測る。P₁~P₄は位置関係や規模から支柱穴と推定される。なおP₁は「瓢」形を呈するが、2基のピットであった可能性も考えられる。その場合、円形で1基の規模は直径が25cm前後のピットであろうと思われる。柱間距離はP₁-P₂が1.70m、P₁-P₃は1.90m、P₃-P₄は1.55m、P₂-P₄は1.70mを測る。又P₅については規模やカマドとの配置関係から貯蔵穴の可能性も考えられるが、支柱穴と思われるP₂に隣接する事、カマド右脇の壁から1.2mも離れている事から多少の疑問が残る。

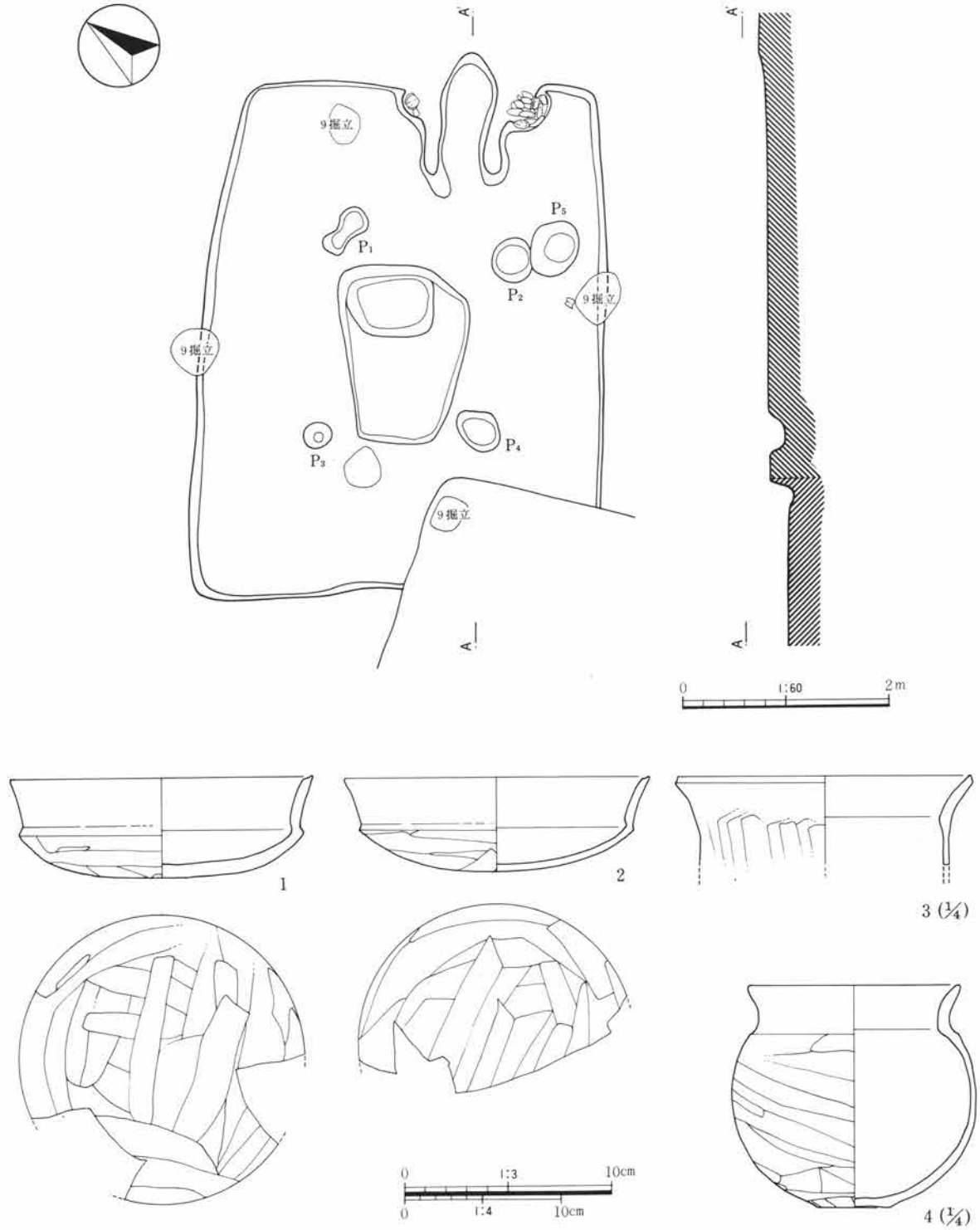
覆土にはロームブロックを含む黒褐色土層が堆積する。

遺物は土師器の甕、杯が主体で、他に碗、須恵器(杯、鉢)が出土している。これらは古墳時代後期鬼高式を主体としている。

重複遺構は138号住居跡と9号掘立柱建築遺構で、138号住居跡との新旧関係は不明である。9号掘立柱建

築遺構の柱穴覆土との切り合い関係から、新旧関係は137号住→9号掘立と思われる。

なお住居跡中央で検出された土壌は前述の通り重複関係不明であったが、これが本住居跡に伴うものであった場合、その位置が、住居内の主要活動域にあるため、一般的な住居跡とは異なる性格をもつ可能性が考えられよう。



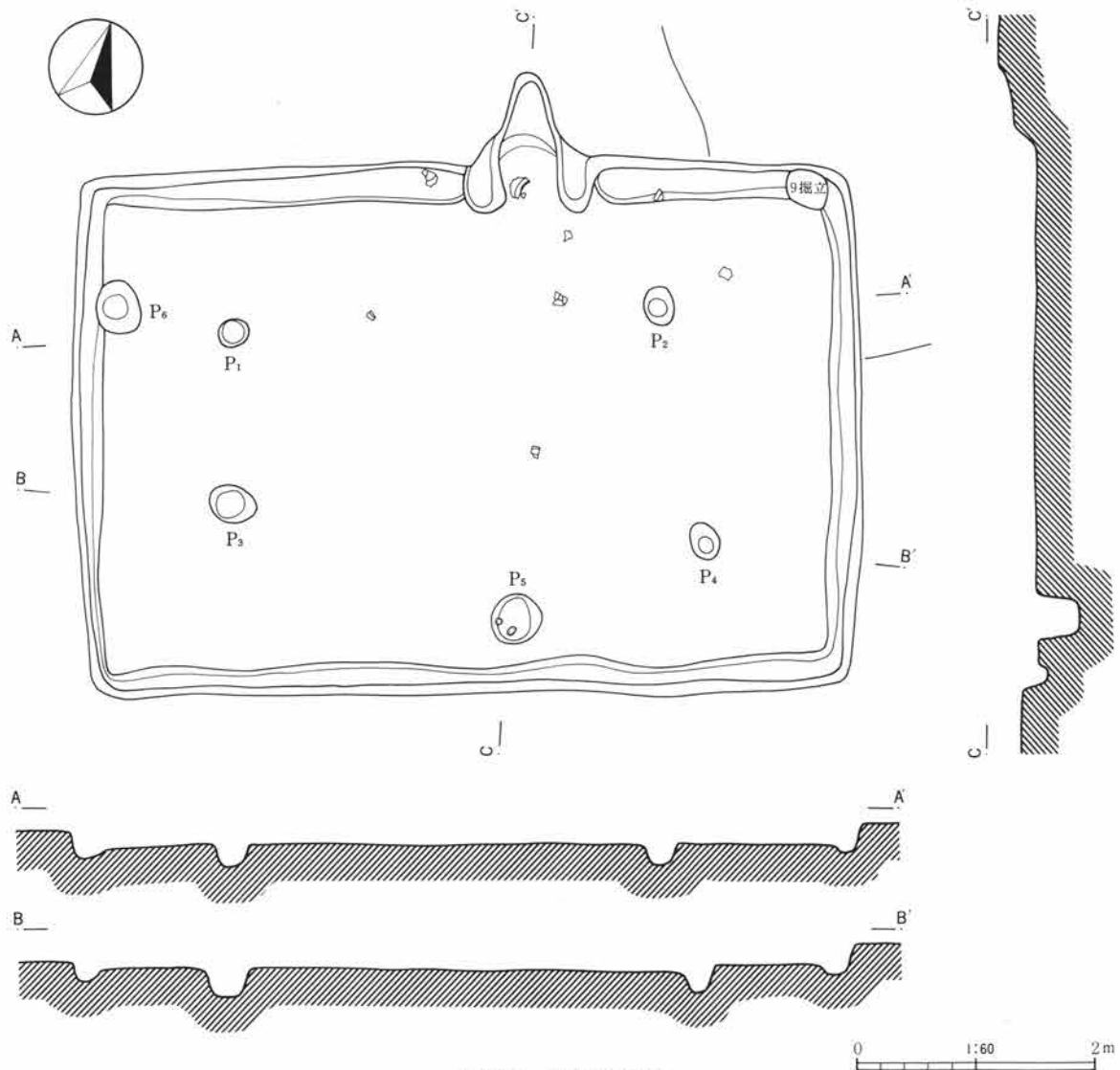
第55図 137号住居跡出土遺物

138号住居跡 (第56図、PL 2)

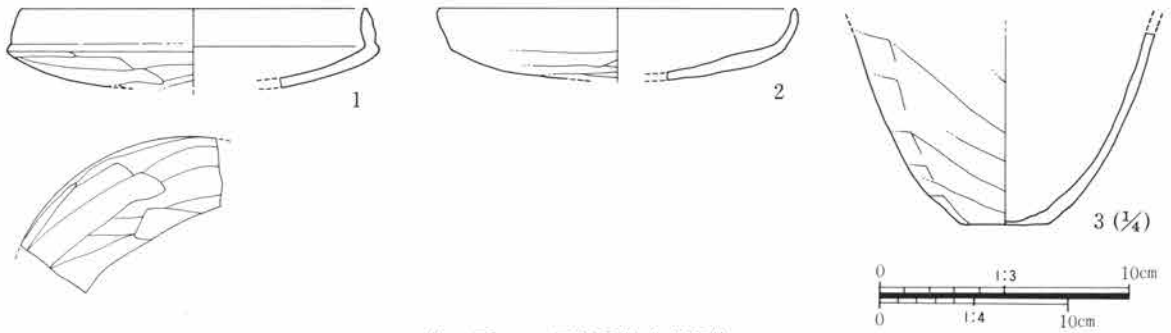
Ⅲ区J-16、K-15・16グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は4.40×6.60mで、面積は27.26㎡を測る。主軸方向はN-19°-Wを指す。壁はほぼ垂直で比較的残存状態は良好である。確認壁高は21~10cmを測る。床面は地山のローム土を基盤とし、ほぼ平坦である。カマドは北壁中央のやや東寄り部分で検出された。そで部、燃烧部、煙道部とも残存状態は良好である。そで部は粘土で構築され、壁内にやや張り出す。燃烧部平面は楕円形を呈し、その奥壁は住居壁より若干外側に掘り込まれている。煙道部は燃烧部奥壁の中位から段を形成して立ち上がる。規模は長さ116cm、幅108cmを測る。煙道長は50cmを測る。軸方向はN-22°-Wを指す。周溝は全周し、幅33~9cm、深さ10~5cmを測る。ピットは6基が検出された。P₁は径27cm深さ13cm、P₂は径32×25cm深さ19cm、P₃は径36cm深さ20cm、P₄は径32×20cm深さ21cm、P₅は径40cm深さ33.5cm、P₆は径40cm深さ19.5cmを測る。P₁~P₄は支柱穴と思われる。

遺物は土師器(杯、甕、高杯、埴)、須恵器杯等の破片が床面及びそれよりやや浮いた状態で出土している。これらは古墳時代後期鬼高式を主体とし、奈良時代のものも若干みられる。

重複遺構は137号住居跡、9号掘立柱建築遺構で、判明した新旧関係は138号住→9号掘立である。



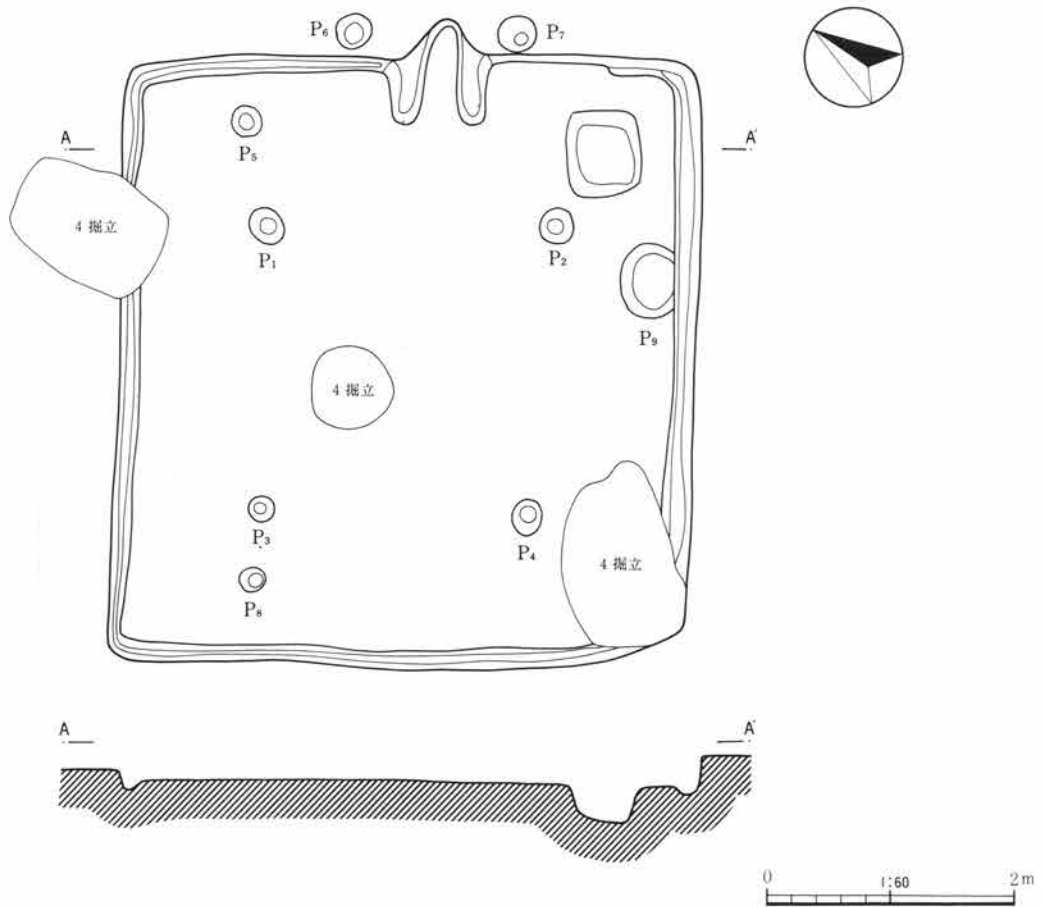
第56図 138号住居跡



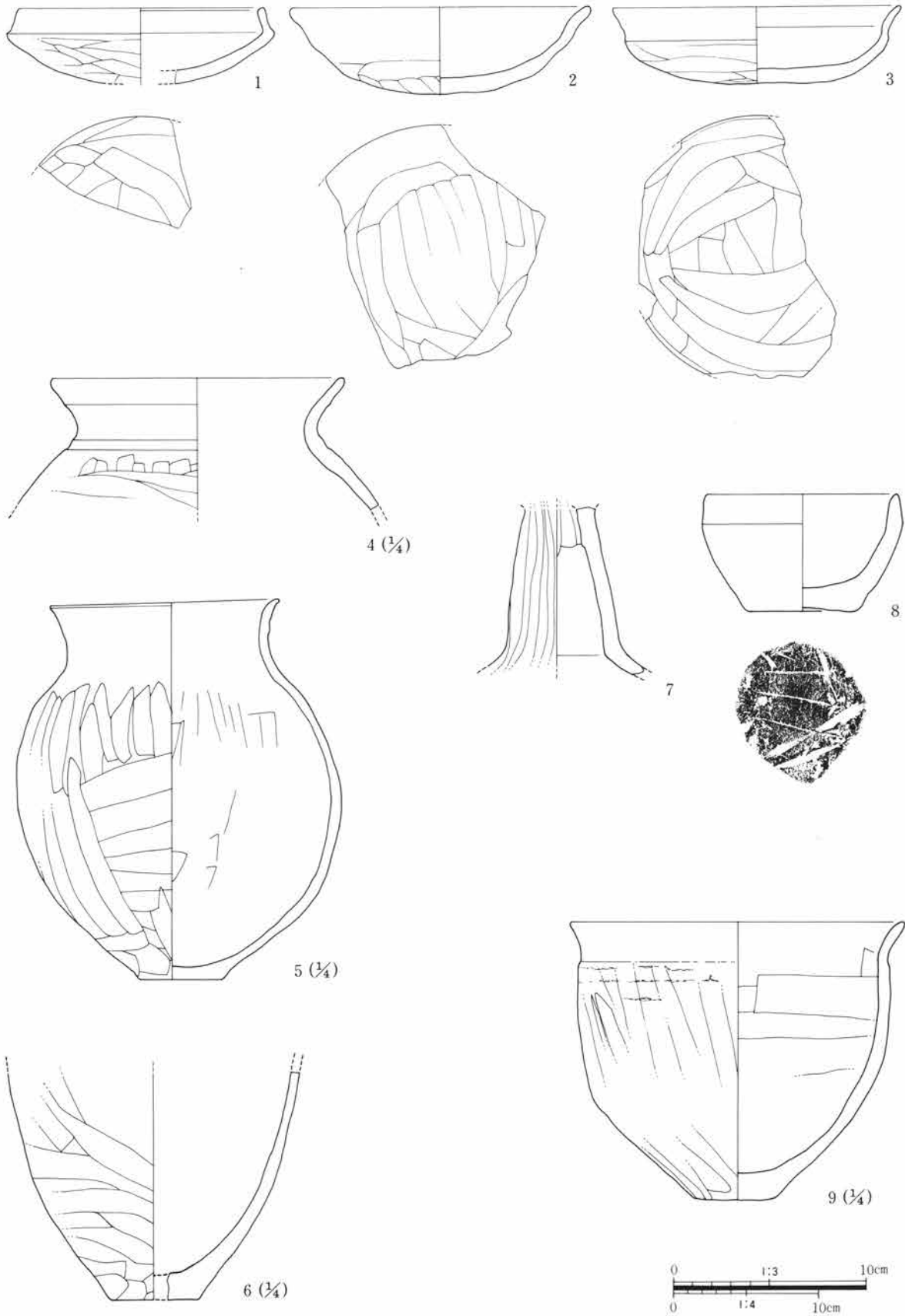
第57図 138号住居跡出土遺物

139号住居跡 (第58図、PL 2)

III区L-17・18、M-17・18グリッドに位置する。平面は正方形を呈する。規模は4.87×4.65m、面積22.24㎡を測る。主軸方向はN-64°-Eを指す。壁はほぼ垂直で確認壁高は22~13cmを測る。床面はローム土を基盤とし、カマド前面はやや盛り上がる。カマドは東壁中央で検出された。そで部は壁内に75cm程張り出す。煙道は比較的急角度で立ち上がる。規模は長さ82cm、幅78cmで、軸方向はN-59°-Eを指す。燃烧部中央に支脚用の礫が出土した。貯蔵穴はカマド右脇で検出された。平面は長方形で、規模は64×57cm、深さ31.5cmを測る。ピットは壁外を含め9基が検出された。P₁径29cm深さ24cm、P₂径26cm深さ不明、P₃径24cm深さ32cm、



第58図 139号住居跡



第59図 139号住居跡出土遺物

P₄径26cm深さ11cm、P₅径25cm深さ32cm、P₆径27cm深さ8cm、P₇径30cm深さ不明、P₈径22cm深さ9.5cm、P₉径61×42cm深さ16cmを測る。P₁-P₂は2.33m、P₃-P₄2.15m、P₁-P₃2.24m、P₂-P₄2.32m、P₆-P₇1.37mを測る。P₁-P₄は主柱穴、P₆・P₇はカマドに伴う上屋構造と関係するピットと思われる。P₅・P₈は不明であるがP₁-P₃の軸上にはば位置する事から梁あるいは桁を支持する柱穴であった可能性もある。周溝はカマド右脇を除いて廻っており、幅23~8cm、深さ8.5~1cmを測る。

遺物は土師器（杯、甕、壺、高杯、甑、鉢）須恵器杯等が出土しており、分布はカマド及び貯蔵穴周辺に集中する。これらはほとんどが古墳時代後期鬼高式に属するものと思われる。

重複遺構は4号掘立柱建築遺構で、新旧関係は139号住→4号掘立である。

147号住居跡（第60図）

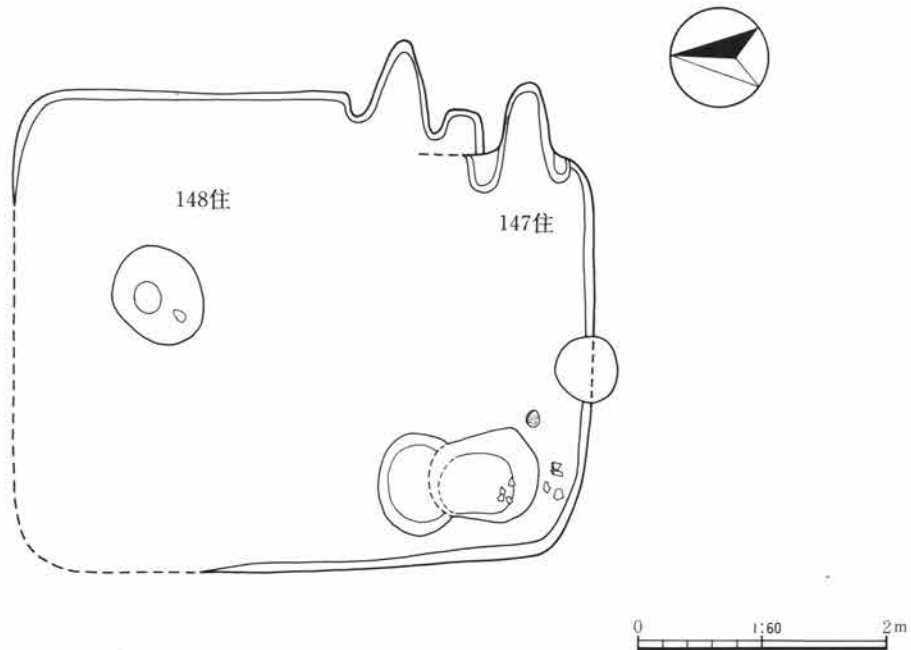
Ⅲ区Ⅰ-17・18、Ⅱ-18グリッドに位置する。横長長方形を呈すると推定されるが、北半については不明である。主軸方向の長さは3.25mを測る。残存する南辺の方向はN-88°-Eを指す。壁の残存状態は不良で確認壁高16~3cmを測る。床面は比較的平坦。カマドは東壁南隅で検出された。そで部は粘土で構築され、壁内に張り出す。燃烧部は壁外に50cm程張り出している。煙道部は不明。規模は長さ90cm、幅77cmで、軸方向はN-90°-Eを指す。貯蔵穴は西南隅で検出され、楕円形を呈し、規模は96×75cm、深さ58cmを測る。

遺物は甕片が貯蔵穴周辺から出土している。小破片であるが時期は平安時代のものであると思われる。

重複遺構は148号住居跡で、北方に1m程平行移動した状態で重複する。カマドの残存状態や貯蔵穴の切り合い関係から新旧関係は148号住→147号住と考えられる。

148号住居跡（第10図）

Ⅲ区Ⅰ-18・19、Ⅱ-18・19グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.81×3.75m、面積は

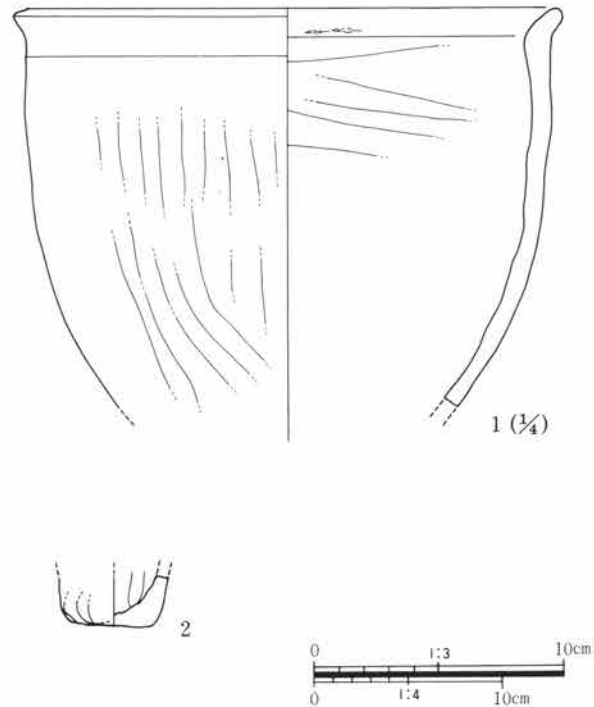


第60図 147・148号住居跡

14.4㎡を測る。主軸方向はN-88°-Eを指す。壁の残存状態は不良で、確認壁高13~8cmを測る。床面は地山のローム土を基盤とし、凹凸が激しい。カマドは東壁南隅で検出された。小規模なそで部と燃焼部が残存する。そで部は20cm程壁内に張り出し、燃焼部は40cm程壁外へ張り出す。煙道部は不明である。規模は長さ75cm、幅80cm、軸方向N-90°-Eを測る。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。楕円形を呈し規模は径78cm前後、深さ50cmを測る。又本住居跡に伴うと思われるピットが北半中央部で検出された。楕円形を呈し、規模は77×65cm、深さ20cmを測る。

遺物は甕、手捏ね土器等が出土している。なおピット中より礫が1ヶ出土する。出土土器はいずれも平安時代のものである。

重複遺構は147号住居跡で、新旧関係は148号住→147号住である。又本住居跡を切ってピットが6基検出されたが、その性格については不明である。



第61図 148号住居跡出土遺物

2 掘立柱建築遺構

4号掘立柱建築遺構 (第62図、PL 2)

Ⅲ区K-18・19、L-18・19、M-18・19グリッドに位置する。南北棟3間(7.40m・7.55m)×2間・3間(5.05m・5.35m)の梁間が非対称な建物である。主軸方向はN-7°-Eを指す。柱間寸法は、梁行P₁-P₂2.45m、P₂-P₃2.60m、P₆-P₇1.70m、P₇-P₈1.75m、P₈-P₉1.90m、桁行はP₃-P₄2.45m、P₄-P₅2.40m、P₅-P₆2.55m、P₉-P₁₀2.55m、P₁₀-P₁₁2.50m、P₁₁-P₁₂2.50mを測る。北辺の梁行と東西の桁行の柱間は8.5尺等間、南辺の梁行が不揃いではあるが6尺等間で造営されたと思われる。柱穴の掘り形は長さ100cm、幅80cm前後の方形を呈し、建物の内側よりに直径20cm前後、深さ10~5cmの柱痕跡が検出された。なお柱穴は桁と梁の方向に長軸方向をあわせて掘り込まれており、コーナー部の柱穴はこれらに対し長軸を斜方向にしているのが特徴である。又コーナー部の柱痕跡の中心を直線で結んだ場合、P₄、P₅、P₇、P₈、P₁₀、P₁₁はそれぞれその直線より内側に位置している。

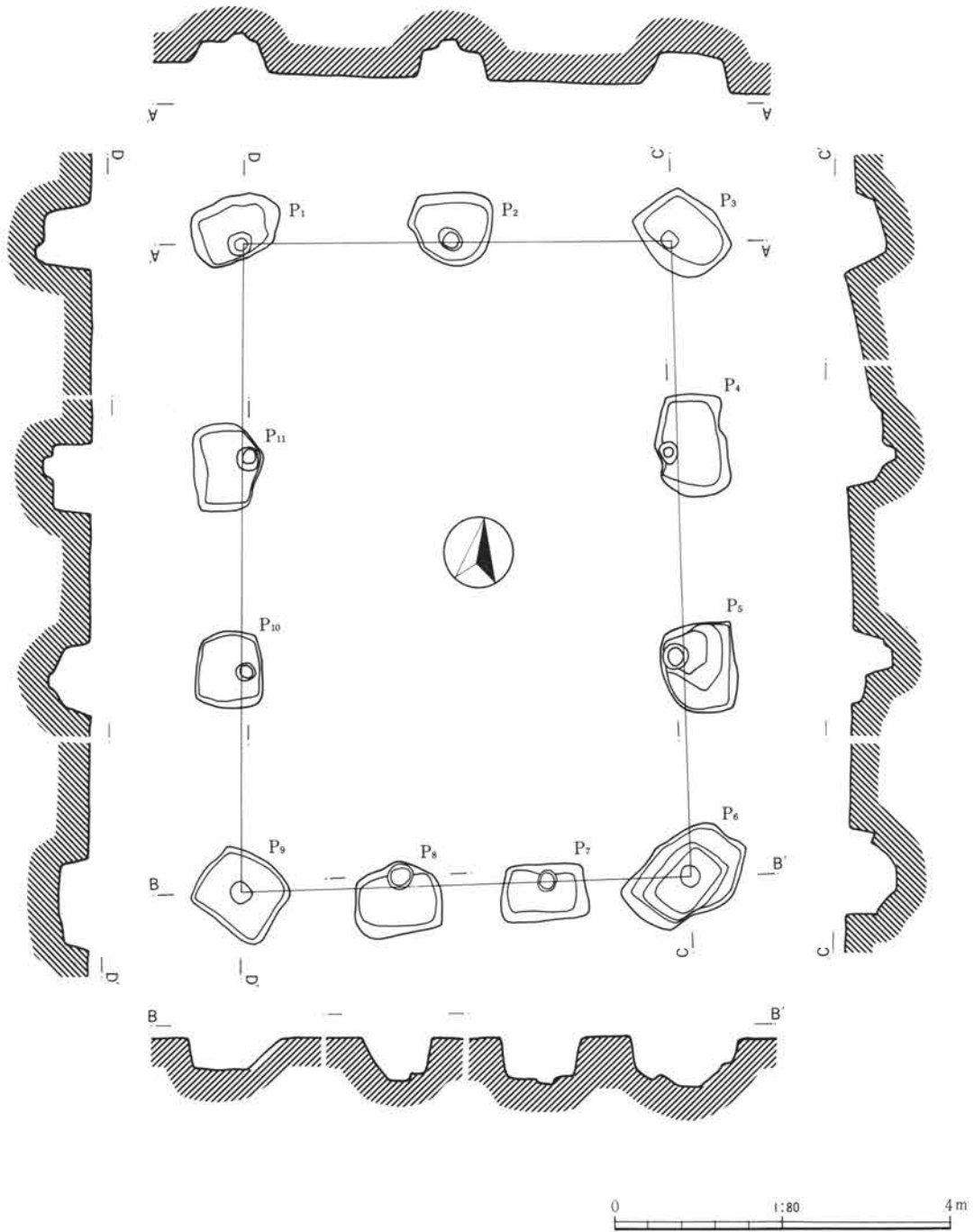
本遺構からは遺物は出土していない。

重複遺構は125号住居跡、139号住居跡で、新旧関係は125号住・139号住→4号掘立である。

以上より本遺構の時期は古墳時代後期より新しいものと考えられる。

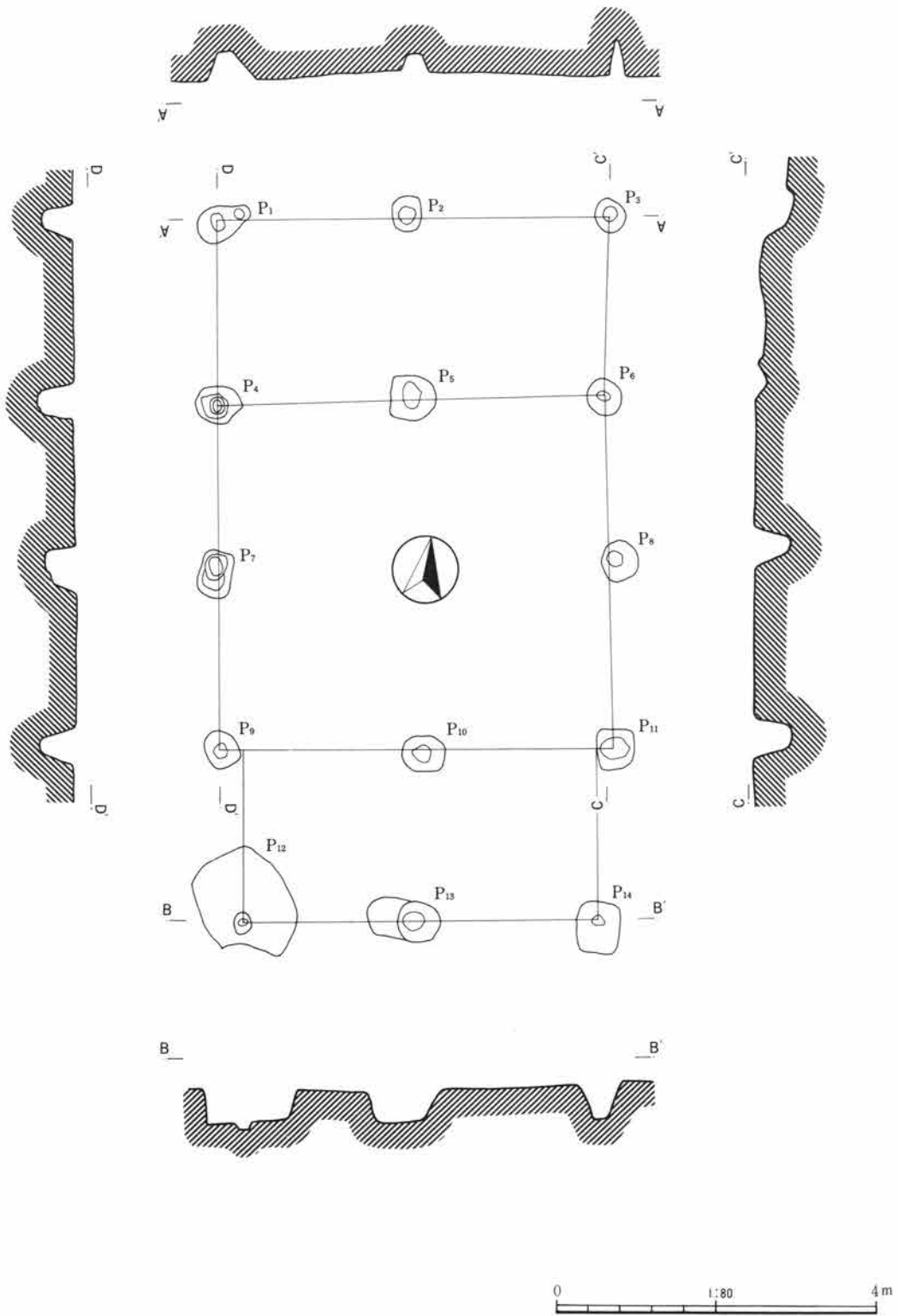
5号掘立柱建築遺構 (第63図、PL 2)

Ⅲ区のI-19、J-19・20・21、K-19・20グリッドに位置する。東西棟2間(4.35m・4.30m)×4間



第62図 4号掘立柱建築遺構

(8.65m)の南北廂付建物と思われる。主軸方向は $N-80^{\circ}-E$ を指す。柱間寸法は、 P_1-P_2 2.35m、 P_2-P_3 2.55m、 P_4-P_5 2.40m、 P_5-P_6 2.35m、 P_9-P_{10} 2.50m、 $P_{10}-P_{11}$ 2.30m、 $P_{12}-P_{13}$ 2.15m、 $P_{13}-P_{14}$ 2.30m、 P_6-P_8 2.00m、 P_8-P_{11} 2.35m、 P_4-P_7 2.00m、 P_7-P_9 2.30mを測る。桁行は8尺等間、梁行は P_6-P_8 と P_4-P_7 が6.5尺、 P_8-P_{11} と P_7-P_9 が8尺で造営されたと思われる。又身舎と廂の柱間寸法は北廂が7.5尺、南廂が



第63図 5号掘立柱建築遺構

7尺である。柱穴は直径50cm前後、深さ40cm前後を測るもので身舎、廂ともに規模はほとんど同じである。柱間寸法から本遺構は東西対称を意図して造営されたようであり、4号掘立柱建築遺構と並列する配置で南北棟であった可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

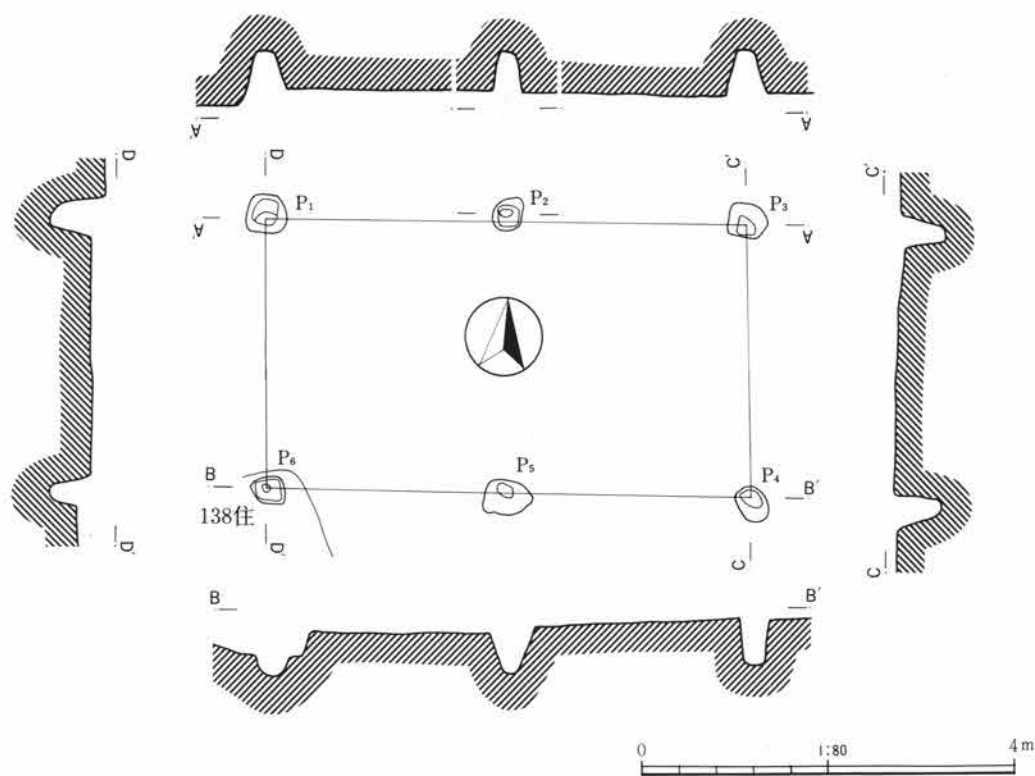
重複遺構は126号住居跡、148号住居跡で、本遺構は126号住を切っているが、148号住との関係は不明である。

9号掘立柱建築遺構 (第64図)

III区L-16・17、M-16グリッドに位置する。東西棟2間(5.10m)×1間(2.85m)の建物である。主軸方向はN-88°-Eを指す。柱間寸法は、P₁-P₂2.60m、P₂-P₃2.50m、P₄-P₅2.50m、P₅-P₆2.60mを測る。桁行は8.5尺等間、梁行は9.5尺で造営されたと思われる。柱穴は直径40cm前後、深さ50~40cm前後のもので、柱痕跡は明確でなかった。

遺物は出土していない。

重複遺構は137号住居跡、138号住居跡で、新旧関係は137号住・138号住→9号掘立と思われる。



第64図 9号掘立柱建築遺構

3 土 壙

57号土壙 (第65図)

Ⅲ区Ⅰ-6グリッドに位置する。円形を呈し、規模は直径85×80cm、深さ18cmを測る。底面はやや中央部が窪むが、全体に平坦である。遺物は出土していない。重複遺構はない。性格は不明である。

58号土壙 (第65図)

Ⅲ区Ⅱ-12グリッドに位置し、118号住居跡の中央部で重複する。平面は円形を呈し、規模は直径180cm、深さ45cmを測る。底面形状は長方形を呈し、平坦である。遺物は、土師器杯の完形品及び甕片等が出土しており、118号住居出土のものとはほぼ同時期のものと考えられる。土層では確認できなかったが、これら遺物の比較より118号住居の施設であった可能性がある。

59号土壙 (第65図)

Ⅲ区Ⅱ-11グリッドに位置し、118号住居跡の南側に接する。平面は卵形を呈し、規模は75×60cm、深さは30cmを測る。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。時期や性格については不明である。

60号土壙 (第65図)

Ⅲ区Ⅲ-15グリッドに位置する。平面は長方形を呈する。規模は、最大長2.75m、最大幅0.55m、深さは45～28cmを測る。主軸方向はN-20°-Eを指す。底面は平坦である。遺物は出土していない。時期や性格については不明である。115号住居跡と重複し、これを切っている。

61号土壙 (第65図)

Ⅲ区Ⅳ-17、Ⅱ-17グリッドにまたがって位置する。平面は長方形を呈する。規模は、最大長2.40m、最大幅0.65m、深さ40～30cmを測る。主軸方向はN-8°-Wを指す。底面は平坦である。遺物は出土していない。時期や性格については不明である。

62号土壙 (第65図)

Ⅲ区Ⅳ-18グリッドに位置する。平面は円形を呈し、規模は直径90cm、深さ8cm前後を測る。底面は凹凸が激しい。遺物は出土していない。時期や性格については不明である。

63号土壙 (第65図)

Ⅲ区Ⅳ-23グリッドに位置する。平面は長方形を呈する。規模は最大長1.3m、最大幅0.58m、深さ25cmを測る。底面は平坦である。遺物は出土していない。時期や性格については不明である。127号住居跡と重複しており、これを切っている。

64号土壙 (第65図)

Ⅲ区Ⅳ-24グリッドに位置する。平面はやや歪んだ長方形を呈する。規模は、最大長1.05m、最大幅0.70

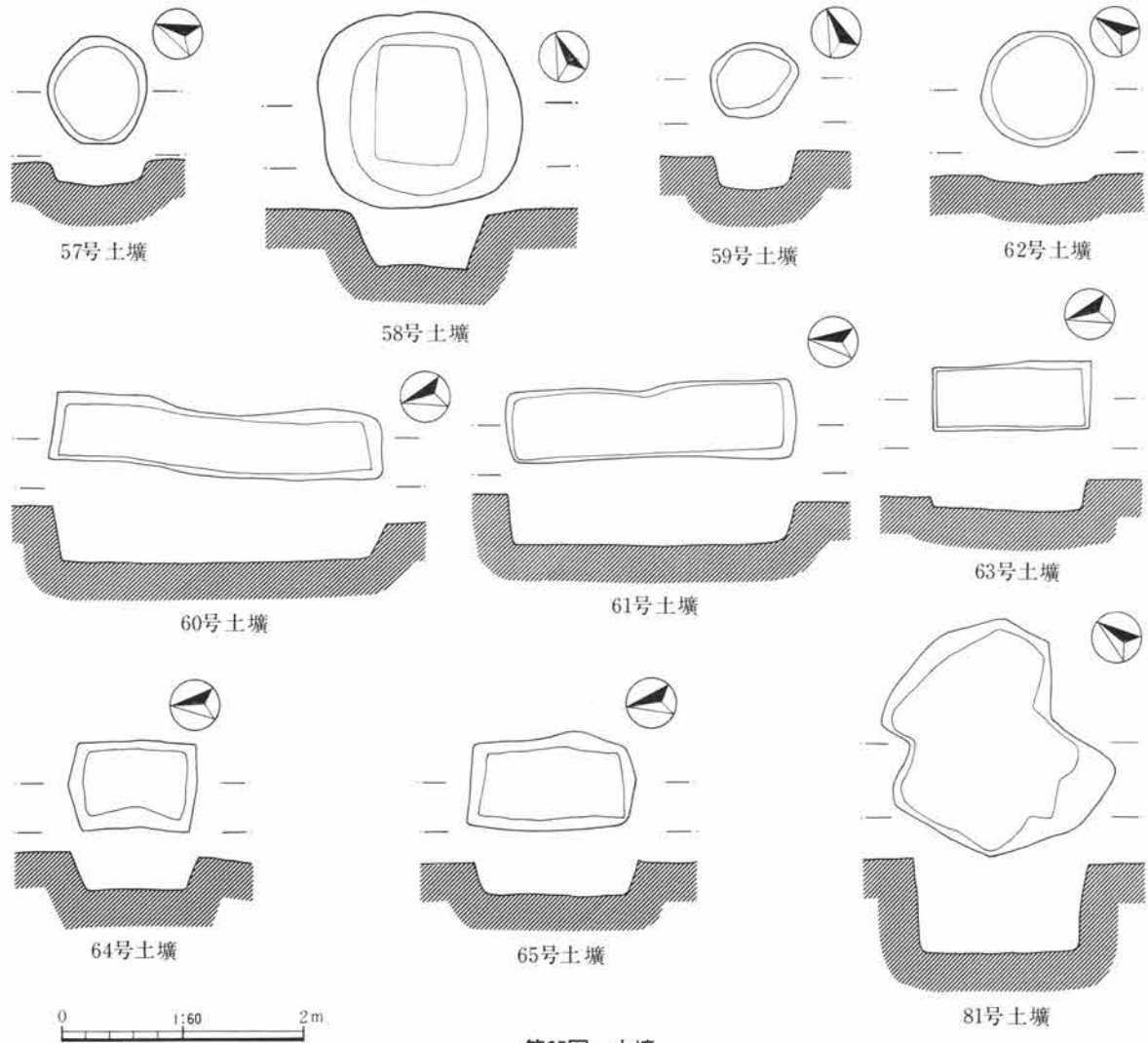
m、深さ33~28cmを測る。主軸方向はN-13°-Eを指す。底面はやや凹凸がある。遺物は出土していない。性格については不明である。127号住居跡、9号溝と重複してこれらを切っており、又土層の特徴から近世以降の可能性はある。

65号土壌 (第65図)

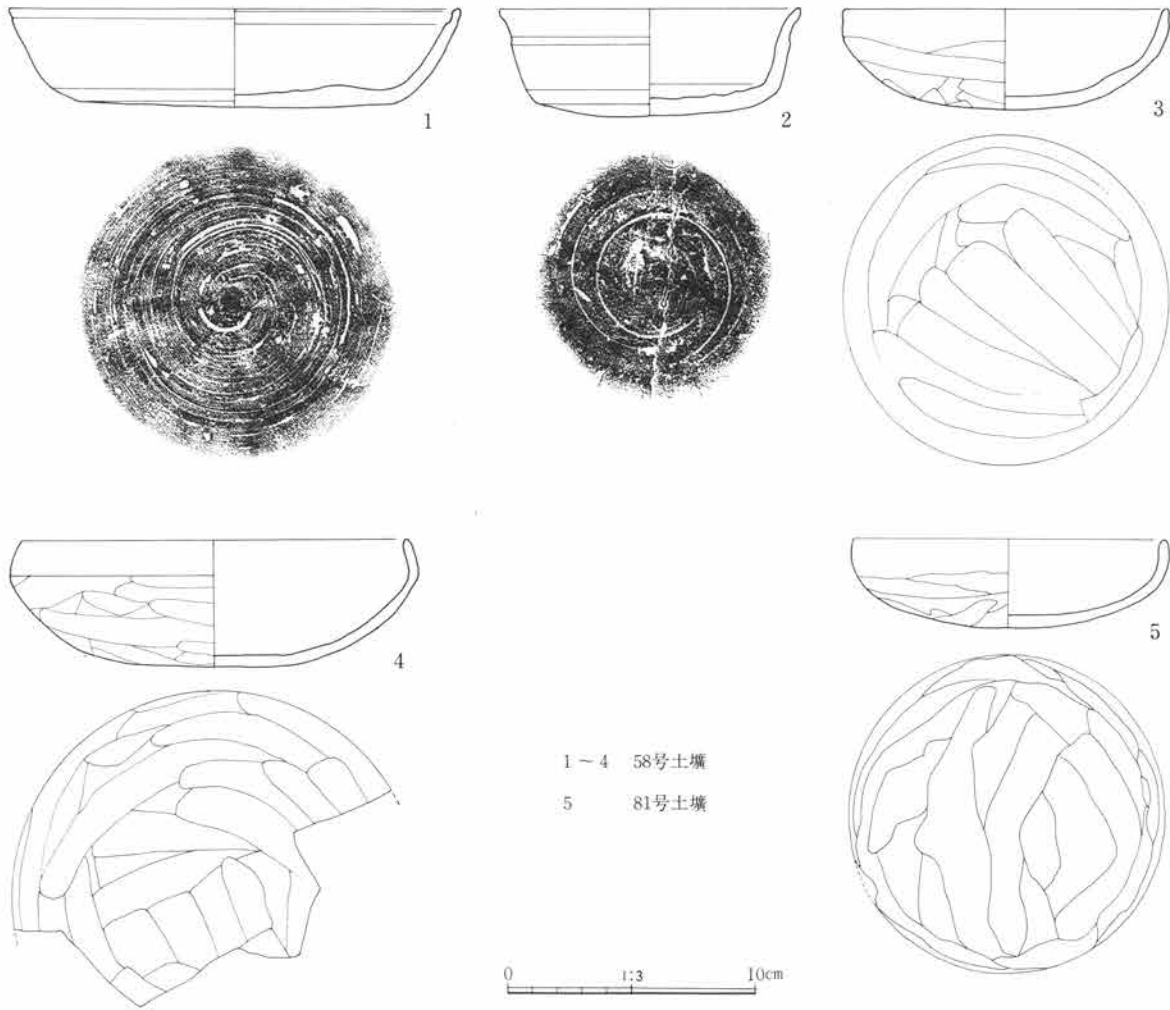
Ⅲ区I-24グリッドに位置する。平面は歪んだ長方形を呈する。規模は、最大長1.35m、最大幅0.80m、深さ28cmを測る。主軸方向はN-13°-Eを指す。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。時期や性格については不明である。

81号土壌 (第65図)

Ⅲ区L-14グリッドに位置する。平面は不定形を呈し、規模は最大長1.90m、最大幅1.80m、深さ75cmを測る。不整な平面形に比べ、底面は平坦であり、又壁もほぼ垂直に掘り込まれている。遺物は奈良時代前半期のもと思われる杯、甕が出土している。これらは重複する116号住居跡出土遺物とほぼ同時期である事から当該住居跡に伴う遺構の可能性はある。



第65図 土壌



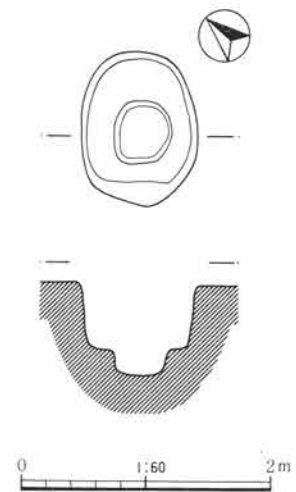
第66図 土壙出土遺物

4 井戸跡

4号井戸跡 (第67図)

III区K-13グリッドに位置する。平面は小判形を呈しており、規模は径1.85×1.40mを測り、プラン確認面より深さ80cm程で段をなし、そこから更に直径70cm程、深さ30cm程に掘り込まれる。従って確認面から底面までは110mm程の深さを測る。この地点は地山が泥炭質土で地下水位も高いと予想される事から、ある程度の地下水は得られたと思われるが、本遺跡で検出された井戸跡(『三ツ木遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1985.3所収)に比べて著しく浅い事から、これが本来的に井戸として掘り込まれ、又機能していたのかは疑わしい。

遺物は出土しておらず、重複遺構も無い事から時期は不明である。



第67図 4号井戸跡

5 溝

8号溝 (第68図)

III区L-10、M-10・11、N-11、O-11グリッドに位置する。O-11グリッドで消滅し、L-10グリッド

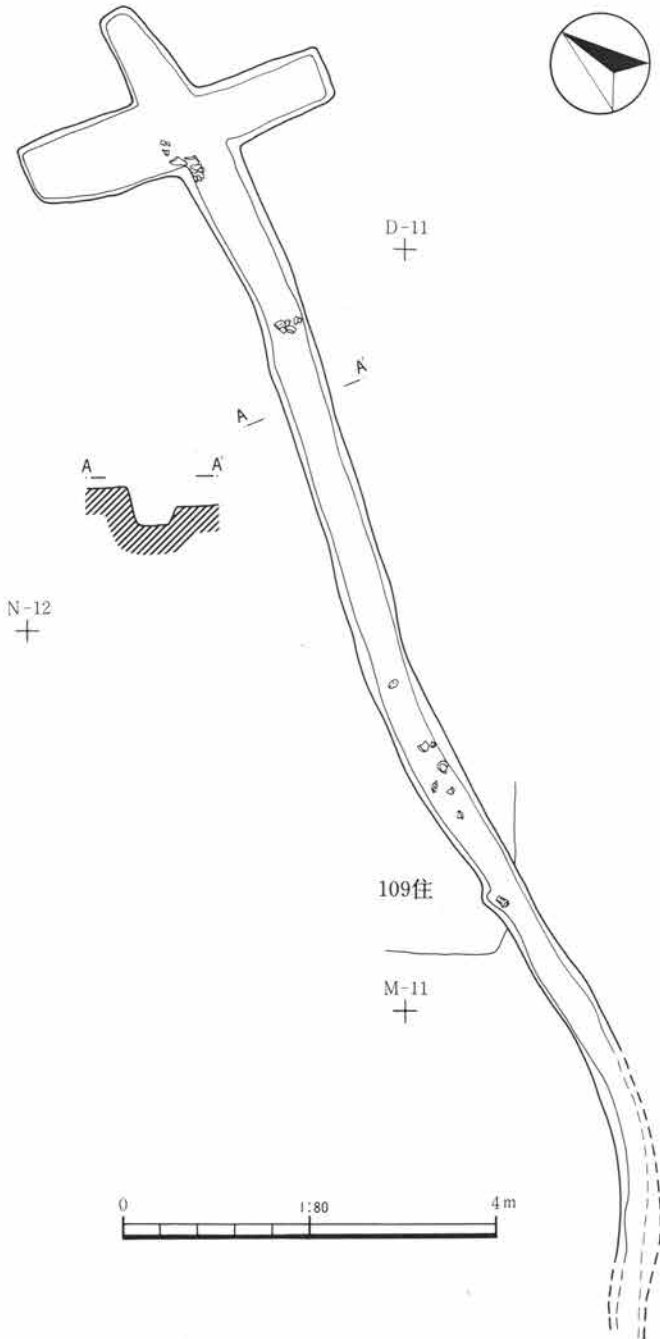
は浅くなるため、削平されており、それ以南については不明である。走向は弱く蛇行し、N-23°~35°-Eを指す。O-11グリッドで、長さ2.5m程の溝状遺構と「+」字状に交差するが、これが本溝に伴うものであるかどうかは判明できなかった。プラン確認面における本溝の幅は40~25cmで、深さは最深部28cmを測る。断面は「箱薬研」状で、底面は全体に平坦である。

遺物は土器を主体として約200点前後が出土している。出土位置はM-10・11グリッド付近に集中する傾向が見られる。これらは奈良時代に属するものが数量的に主体を占め、他に古墳時代後期(鬼高式)と思われるものが加わる。

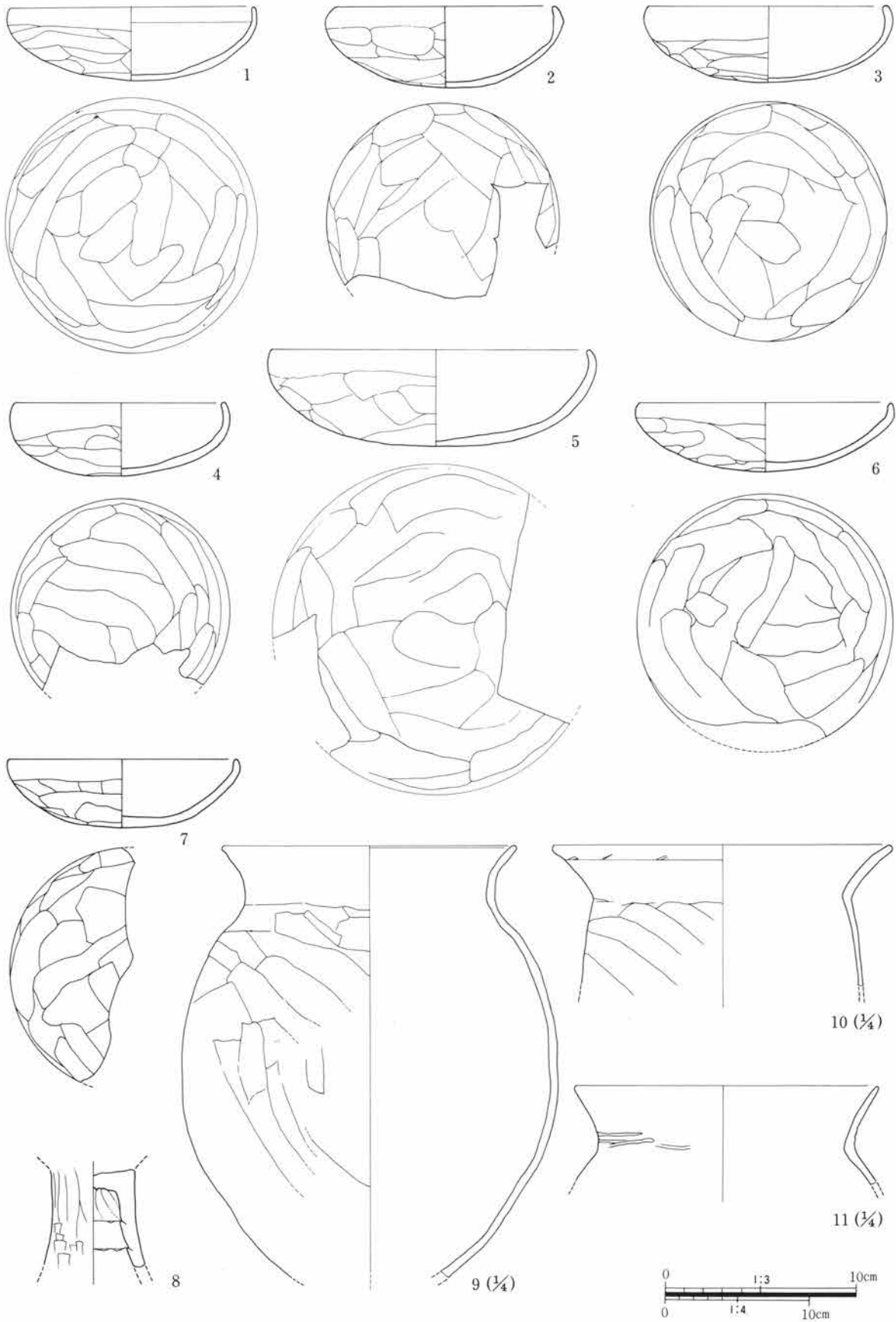
遺物の集中する場所は109号住居跡と重複する部分であり、本溝はこれを切って掘り込まれている事から、出土遺物は109号住居からの流れ込みの可能性も考えられる。しかし本溝出土土器のうち完形品及び残存の良好なものはほとんどが奈良時代のものであり、一方109号住居は古墳時代後期のものである可能性が高い事から、本溝の時期は奈良時代と考えたい。従って重複遺構である109号住居跡・110号住居跡出土遺物の中で奈良時代に属するものは、本溝に伴う可能性も考えられる。

9号・10号・11号溝 (第71図)

本遺跡の上武国道地域調査分に主体があり、詳細については『三ッ木遺跡』(勸群馬県埋蔵文化財調査事業団1984)を参照されたい。



第68図 8号溝



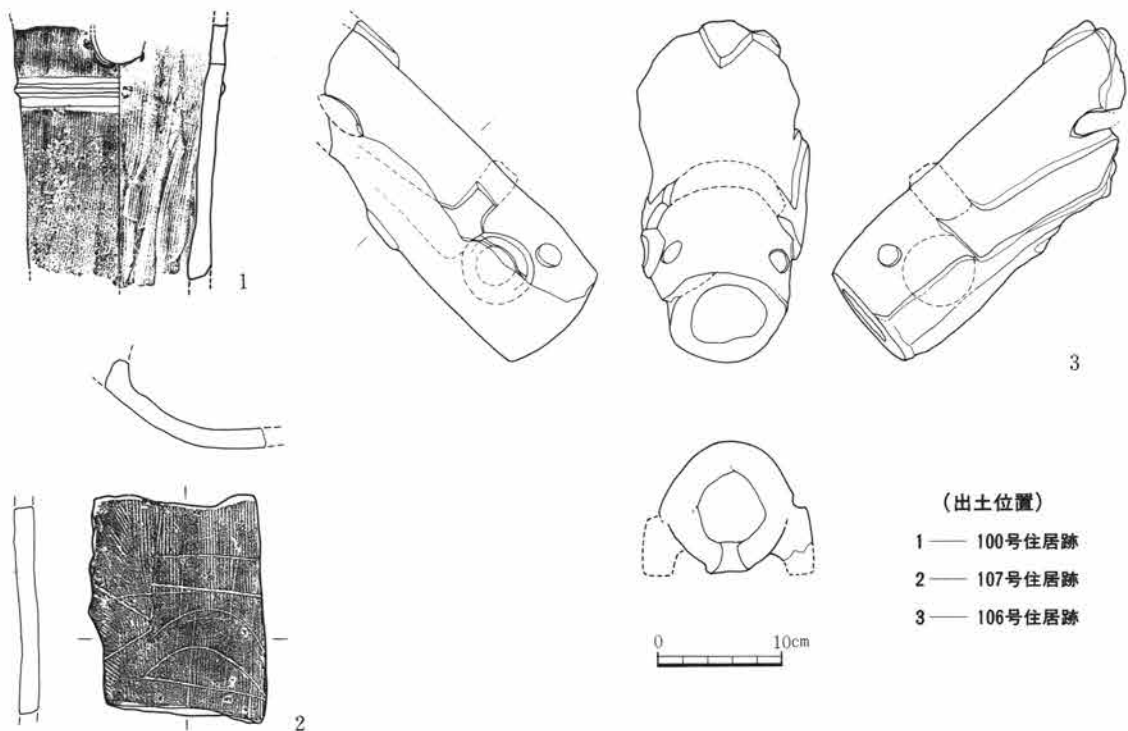
第69図 8号溝出土遺物

6 埴輪

円筒埴輪（第70図-1） 底部を欠く円筒埴輪で第1凸帯と透し孔を残す。残存高は約20cm、凸帯部周辺の復元径は16cmを測る。胎土は砂粒を多量に含み、その他赤褐色粘土粒も目立つ。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。外面と内面の調整には同一の刷毛目が使用されたと考えられ、2cm幅に8～10本の木目が残る。残存する底部から凸帯までは16cmを測り、凸帯幅は1cm、突出高さは5mmと低い感じを与える。透し孔は円形又は天の部分水平に切った半円形と考えられる。どちらにしても径は4cm程であろう。全体として内面の刷毛目などに調整の粗さは目立つが、外面調整の刷毛目は丁寧で凸帯の貼りつけも確かである。また、凸帯と透し孔の位置関係が狭く、場合によっては形象埴輪の基部と考えてもよいと思う。

盾（第70図-2） 皮盾の形象埴輪である。通有の皮盾の埴輪の上辺は円弧を描きその両端は鋭角的に張り出し、側辺は外反しながら底辺に到る。底辺は直角的に終る。この皮盾に描かれる文様は皮革の接ぎ方を表現したものと考えられる。文様の基本形は、外形の1/2程度の相似形の沈線の内区と外側に鋸歯文がめぐる外区から成る。盾は、天地7cm、左右8cmの破片である。盾の天井部分正面左隅と考えられる。胎土に角閃石安山岩と赤褐色粘土粒を含み、焼成は良好で色調はにぶい赤褐色を呈する。重量は140gである。成形は粘土紐の横方向積み上げを残し、前面は刷毛目調整、裏面はユビナデを残す。文様は相似形の内区と外区の鋸歯文、周縁の皮の縫い目を残す。

馬（第70図-3） 重量2.56kgと重量感あふれる頭部の鼻面である。内面ユビナデが粗く残る巻き上げの円筒の外面に馬装具の頭絡を粘土帯で飾る。胎土に角閃石安山岩粒、赤褐色粘土粒を含み、焼成は良好でにぶい橙色を呈する。輪状の鏡板が残り頭部から三角形の飾りが下がる。鼻孔は丸く目は上下に切られて紡錘形を呈する。



第70図 埴輪

第Ⅲ章 出土遺物一覧表

95号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第3図-1 PL.3	土師 皿	カマド	口9.8 高1.9 底6.0 完形	①細砂を含む ②にぶい赤褐 ③普通	右回転ロクロ整形 回転糸切り 内面 見込み部分の中央に指頭によるナデツ ケ様跡が残る	器面に酸化鉄が付 着

96号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第5図-1 PL.3	須恵 蓋	覆土	天井部約1/3破片	①長石粒を含む ②灰 ③還元、硬質	紐積み上げ後ロクロ整形 天井部右回 転ヘラケズリ整形	
第5図-2	須恵 高台杯	覆土	体下半～底部1/6 破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底部左回転ヘラケズリ後付高台後周辺 部ナデ	
第5図-3	土師 杯	覆土	口縁部約1/4破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部上位無調整	
第5図-4	土師 杯	覆土	約1/4破片	①砂粒を多量に含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部上位無調整	
第5図-5	須恵 鉢	覆土	口縁～体部1/3破 片	①白色鉱物多い ②灰 ③還元、硬質	右回転整形	摺鉢の可能性あり
第5図-6 PL.13-3	羽口	覆土	約1/4破片	①白色粒を多量に含む ②灰～明褐 ③軟質	指頭によるナデ 胴の張る截頭円錐状 を呈し、先端が還元されており、錐が 溶着する	

97号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第7図-1	土師 甌	壁際	底部約1/2破片	①砂粒を多量に含む ②黒褐 ③酸化、普通	ドーナツ状の粘土板を体下半に接合す る。下面ヘラケズリ、上面ナデ	器面に煤付着
第7図-2	土師 皿	覆土	口(10.0) 高2.2 口縁1/3欠	①細砂やや多い ②橙 ③酸化、軟質	右回転整形 底部回転糸切り	器面は剥離が激し い
第7図-3 PL.13-1	砥石	覆土	幅4.0 厚3.0～2.4		直方体状を呈し、中央部が使用により細くなる。上部は製作 時の打割痕を残す。黒灰色を呈する目の細かい凝灰質の石を 利用している。表裏両側面に縦方向の多数の擦痕がみられる。	

98号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第8図-1	土 師 支脚土器	カマド	約1/5破片	①細砂を含む ②にぶい橙 ③不良	紐積み上げ成形後内外面とも粗いナデ	外面積み上げ痕

99号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第10図-1 PL.3	(須恵) 高台碗	床 面	口10.0 高3.2 底5.0 完形	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ整形 内面に丁寧な横位へラミ ガキ	内面黒色処理 土師質

100号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第11図-1 PL.4	土 師 甕	カマド	口(26.0) 高29.0 1/2	①大砂粒を多く含む ②橙 ③良好 堅緻	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 肩部は横、内面は縦ナデ	体下半部に二次的 加熱痕
第11図-2	杯	覆 土	底部1/2破片	①小砂を含む ②淡橙 ③酸化、良好	右回転ロクロ整形 底部回転糸切り 周辺を人工的に欠き、中央を穿孔する	紡錘車として再利 用したのか

101号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第12図-1	土 師 甕	覆 土	底部1/2破片	①大砂粒を多く含む ②明赤褐 ③酸化	体外面縦へラケズリ 内面ナデ	二次的加熱痕

106号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第14図-1	須 恵 高台碗	覆 土	底7.5 下半部破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、普通	右回転ロクロ整形 回転糸切り後付高 台後周辺部ナデ	
第14図-2	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/5 破片	①大砂粒多く含む ②明灰褐 ③酸化	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ	一部に黒斑あり

109号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第16図-1	須 惠 蓋	覆 土	天井部1/4破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 天井部回転ヘラケズリ後つまみをつける	積み上げ痕
第16図-2 PL. 3	須 惠 杯	覆 土	口14.0 高5.0 口縁約1/2欠	①石英、長石が多い ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底部回転ヘラケズリ 口唇は丸く受け部は外上方にのびる	
第16図-3 PL. 3	須 惠 杯	覆 土	高3.7 約1/5破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ整形 体部と底部の境に低いケズリ高台	8号溝に伴う可能性あり
第16図-4 PL. 3	須 惠 鉢	覆 土	高12.5 約1/4破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底面無調整 ロクロに固定するための粘土塊の付着	積み上げ痕 外面に自然釉
第17図-5 PL. 3	土 師 杯	床 面	高3.7 約1/4破片	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	内面に煤付着
第17図-6 PL. 3	土 師 杯	覆 土	高4.2 口縁2/3欠	①黒色鉱物目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ	
第17図-7	土 師 杯	覆 土	口縁約1/4破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第17図-8	土 師 杯	覆 土	高(3.0) 1/4破片	①細砂を含む ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部上位は無調整	
第17図-9	土 師 甕	覆 土	口縁～肩部1/3	①粗砂多く含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ その他の調整痕不明	器面剥離が激しい
第17図-10 PL. 3	土 師 甕	覆 土	口縁肩部1/3	①粗砂多く含む ②橙 ③普通 堅緻	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面上半は横ヘラナデ、下半は縦ナデ	

110号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第18図-1 PL. 3	須 惠 蓋	覆 土	天井部約1/3破片	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 天井上面回転ヘラケズリ かえりは短く鋭い	

111号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第20図-1 PL. 4	土 師 杯	覆 土	口15.1 高3.9 約1/2破片	①酸化鉄粒含む ②灰褐 ③酸化	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第20図-2 PL. 4	土 師 杯	覆 土	高3.9 1/4破片	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部上位は無調整	

第III章 出土遺物一覧表

第20図-3	土師杯	覆土	約1/4破片	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部上位は無調整	
第20図-4	土師杯	覆土	約1/5破片	①砂粒を含む ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部上位は無調整	
第20図-5 PL.4	土師杯	覆土	高3.4 約1/3破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面の中央をナデで窪める	
第20図-6	須恵板	覆土	甕胴部破片を利用	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ナデか	側面は磨滅
第20図-7	須恵板	覆土	甕胴部破片を利用	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質		6と同一個体を利用したものか
第20図-8 PL.13-4	土錘	覆土	長さ4.23 幅1.17 重量4.5g	棒状の繊維質のものに粘土を巻きつけて製作されたと思われる		

112号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第22図-1 PL.4	土師杯	覆土	1/5弱破片	①細砂を含む ②暗褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第22図-2	土師杯	覆土	約1/4破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 口縁横ナデ	
第22図-3 PL.4	土師支脚	覆土	脚裾径8.9 上半欠	①細砂を含む ②橙 ③良好 堅緻	外面ナデ 内面指頭ナデ	内面紋目目痕 二次的加熱痕

113号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第24図-1 PL.5	土師杯	覆土	口径12.0 高4.3 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第24図-2 PL.5	土師杯	覆土	高3.5 約1/4破片	①酸化鉄粒が目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第24図-3	土師杯	覆土	約1/6破片	①酸化鉄粒が目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第24図-4 PL.5	土師杯	覆土	口縁部1/4破片	①細砂を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第24図-5	土師杯	覆土	口縁約1/3破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	二次的加熱痕
第25図-6	須恵長頸壺	覆土	肩部破片	①砂粒多い ②明灰 ③還元 堅緻	内外面とも回転利用のナデを行う 肩部端に櫛目状押圧文を廻らす	

第25図-7 PL.5	土師 小形甕	覆土	口縁～肩部1/3	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	肩部横へラケズリ後口縁部横ナデ	
第25図-8	土師 小形壺	覆土	頭部～肩部1/4	①砂粒を多く含む ②明褐 ③普通 硬質	肩部へラケズリ後頭部ナデ	
第25図-9	土師 甕	覆土	口縁部小破片	①細砂を多く含む ②橙 ③普通	体部へラケズリ後口縁部ナデ	
第25図-10	土師 甕	覆土	口縁部小破片	①細砂を多く含む ②橙 ③普通	体部へラケズリ後口縁部ナデ	

114号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第27図-1 PL.5	土師 杯	覆土	口縁部1/3破片	①細砂を多く含む ②明赤褐 ③普通	底外面へラケズリ 内面ナデ 口縁横ナデ	
第27図-2	土師 杯	覆土	口縁部約1/6破片	①酸化鉄粒 黑色鉱物 含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部上位の一部無調整	
第27図-3 PL.5	土師 鉢	覆土	口縁～体部約1/6	①細砂を多く含む ②赤褐 ③良好	体部縦へラケズリ後口縁と内面横ナデ	
第27図-4 PL.5	土師 壺	覆土	体部1/3破片	①酸化鉄粒目立つ ②明赤褐 ③普通	胴上半ナデ 胴下半横へラケズリ	

115号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第29図-1	土師 杯	壁際	口縁～底部1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 受け部は丸味をもつ	
第29図-2 PL.5	土師 杯	覆土	高4.5 口縁～底部1/4	①酸化鉄粒目立つ ②橙～黒 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 受け部はやや鋭い	底部に黒斑あり
第29図-3	土師 杯	覆土	口縁部約1/6破片	①酸化鉄粒目立つ ②灰白 ③やや軟質	口縁は2段の横ナデにより外面に一条 の沈線が廻る 底外面へラケズリ	
第29図-4 PL.5	土師 杯	壁際	口14.6 高3.8 口縁部1/3欠	①酸化鉄粒目立つ ②灰褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-5 PL.5	土師 杯	覆土	口13.6 高3.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②にぶい褐 ③不良	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	底部に積み上げ痕 焼成時の歪みあり
第29図-6	土師 杯	覆土	口縁～体部1/3	①砂粒を多く含む ②灰白 ③やや軟質	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-7	土師 杯	覆土	約1/3破片	①細砂を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

第三章 出土遺物一覧表

第29図-8	土師杯	覆土	約1/4破片	①細砂を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-9 PL.5	土師杯	覆土	口縁～体部約1/3	①細砂を含む ②黄白 ③やや軟質	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	6と同一個体の可能性高い
第29図-10	土師杯	覆土	口縁～体部約1/4	①黒色鉱物目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-11 PL.6	土師鉢	カマド	口縁～体上半2/3	①酸化鉄粒多い ②灰白 ③軟質	口縁横ナデ 内面ナデと粗いヘラミガキ 体外面横へラケズリ	
第29図-12	土師杯	周溝	小破片	①酸化鉄粒多い ②暗褐 ③軟質	口縁横ナデ 底外面横へラケズリ 内面ナデ	
第29図-13 PL.5	土師手捏ね	床	高2.9 1/2破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	指頭によるナデ痕を明瞭に残す	
第30図-14	土師高杯	覆土	杯部1/4破片	①大砂粒を含む ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 杯下半外面粗いヘラミガキ 杯部内面と底部外面粗いミガキ	外面に板殻圧痕
第30図-15	土師高杯	覆土	杯部1/3破片	①酸化鉄粒を含む ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 杯下半ハケメ整形 内面ナデ	
第30図-16	土師高杯	覆土	脚下半約1/4破片	①砂粒を含む ②橙 ③普通	脚外面縦へラケズリ 裾横ナデ後放射状 ヘラミガキ 内面ナデ	
第30図-17 PL.6	土師壺	覆土	口縁～肩部1/4	①細砂を含む ②赤褐 ③良好 堅緻	口縁横ナデ 頸部縦、肩部横ナデ 内面へラナデ	同一個体の破片に口縁折返し部あり
第30図-18 PL.6	土師壺	覆土	口縁1/3	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ頸部縦ハケメ 内面横ハケメ	
第30図-19 PL.6	土師甌	壁際	口25.0 高32.0 底8.6 体一部欠	①砂粒を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	体外面積み上げ痕
第30図-20	土師甕	覆土	口縁～体上半1/4	①酸化鉄粒多い ②明橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	

116号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第32図-1 PL.6	土師杯	覆土	口13.2 高4.2 口縁一部欠	①酸化鉄粒目立つ ②褐 ③良好	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	内面煤付着
第32図-2	土師杯	覆土	高3.8 口縁～底部1/3	①細砂を含む ②橙 ③良好	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第32図-3 PL.6	土師杯	貯蔵穴	口12.7 高4.0 口縁～体一部欠	①白色砂粒目立つ ②にぶい黄褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 口唇内側に面取りを施す	内面黒斑
第32図-4 PL.6	土師杯	覆土	口縁～底部1/4	①酸化鉄粒目立つ ②にぶい橙 ③軟質	口縁は2段の横ナデにより上位でくびれる 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第32図-5 PL.6	土師杯	覆土	口(14.5) 高4.2 約1/2破片	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③良好	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

第32図-6 PL. 6	土師杯	覆土	口縁～底部1/3	①細砂を多く含む ②橙～黒褐 ③不良	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	外面一部に黒斑
第32図-7	土師杯	覆土	口縁底部1/3	①砂粒を多く含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第32図-8	土師杯	覆土	口縁～底部1/4	①砂粒を多く含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第32図-9 PL. 6	土師杯	覆土	口縁～底部1/2	①砂粒を多く含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第32図-10	土師杯	覆土	口縁～底部約1/3	①砂粒を多く含む ②明褐～黒褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第32図-11	土師杯	覆土	口縁～底部1/3	①酸化鉄粒目立つ ②明橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第32図-12 PL. 7	土師(器台)	覆土	受部と裾部欠	①大砂粒を多く含む ②明赤褐 ③普通	外面縦へラケズリ 内面ナデ 脚内面上位指頭ナデツケ	脚外面に沈線状の段が2条廻る
第33図-13 PL. 7	土師甕	覆土	口18.5 高(34.0) 口縁～底1/3	①大砂粒を多く含む ②明橙～黒灰 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラケズリ	
第33図-14 PL. 7	土師甕	床面	口縁～体1/3	①細砂を含む ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	口縁外面、体下位 内面に積み上げ痕
第33図-15	土師甕	覆土	口縁～体上半1/5	①大砂粒を多く含む ②明褐～黒褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	口縁、体内面積み 上げ痕
第33図-16	土師甕	覆土	口縁～体部1/3	①酸化鉄粒目立つ ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	二次的加熱痕
第33図-17	土師甕	カマド	口縁～体上半1/4	①細砂が多い ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第33図-18	土師甕	覆土	口縁～体上半1/2	①細砂が多い ②明橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第33図-19	土師甕	覆土	口縁～体上半1/4	①酸化鉄粒が目立つ ②赤褐～灰褐 ③普通	口縁横ナデ 外面縦へラケズリ 内面ナデ	体外面煤付着
第33図-20	土師甕	覆土	底6.2 体下位～底	①酸化鉄粒が目立つ ②にぶい褐 ③普通	外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第33図-21 PL. 7	土師鉢	覆土	高7.8 底6.4 口縁2/3欠	①細砂を少量含む ②にぶい褐 ③良好	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第33図-22 PL. 7	土師鉢	覆土	口14.2 高5.6 底8.6 完形	①酸化鉄粒が目立つ ②赤味帯びた灰白 ③良好	口縁外面横ナデ 口縁内面横へラケズリ 体部外面粗いナデ	積み上げ痕を残す 底面に木葉痕
第33図-23 PL. 7	土師支脚土器	カマド	高14.5 受部径5.0 完形	①細砂を含む ②にぶい黄橙 ③普通	上半粗いへラケズリ 下半ナデ 内面はほとんど無調整	内外面積み上げ痕 受部は磨滅する

118号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第35図-1	須 惠 杯	覆 土	口(16.9) 高3.9 底10.3 口縁2/3欠	①白色細砂を多く含む ②灰 ③還元、良好	右回転整形 底右回転ヘラ切り後底部 端を回転ヘラケズリ	外面に薄く自然釉 かかる
第35図-2 PL. 8	須 惠 高台杯	覆 土	口(16.1) 高4.5 底9.4 口縁1/3欠	①細砂を含む ②灰白 ③酸化ぎみ、やや軟質	右回転整形 底回転ヘラケズリ後周辺 に1条の沈線を廻らし付高台	
第35図-3	須 惠 高台杯	床 面	底部破片	①白色細砂が目立つ ②青灰 ③還元、良好	底回転ヘラ切り後左回転ヘラケズリ調 整 周縁に沈線を1条廻らし付高台	
第35図-4 PL. 8	須 惠 壺	覆 土	胴部破片	①白色小砂を多く含む ②黒灰 ③還元、堅緻	紐積み上げ後回転利用のナデ 肩部周 縁に2段の櫛状具押圧痕を廻らす	内面に積み上げ痕
第35図-5	須 惠 蓋	壁 際	つまみ部	①大砂粒を含む ②暗褐 ③酸化ぎみ	中央部が突出する 天井部を人為的に 破砕している	円板状土製品とし ての再利用か
第35図-6	須 惠 蓋	壁 際	つまみ部	①白色細砂が目立つ ②灰褐 ③酸化ぎみ	右回転整形 天井部を人為的に破砕し ている	5と並んで検出さ れた
第35図-7	須 惠 高杯	床 面	杯下半～脚部破片	①細砂を多く含む ②灰白 ③酸化ぎみ	紐積み上げ後ナデ	紐積み上げ痕を明 瞭に残す
第36図-8 PL. 8	土 師 杯	覆 土	約1/4破片	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第36図-9 PL. 8	土 師 杯	覆 土	口12.5 高3.5 完形	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	底外面に黒斑
第36図-10 PL. 8	土 師 杯	床 面	口12.4 高3.7 口縁一部欠	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	底外面に黒斑
第36図-11	土 師 杯	覆 土	高3.4 口縁～底1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第36図-12 PL. 8	土 師 杯	覆 土	口縁～底1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第36図-13 PL. 8	土 師 杯	覆 土	口12.6 高2.9 口縁～底1/2	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部上位無調整	
第36図-14 PL. 8	土 師 杯	覆 土	高4.3 口縁～底2/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第36図-15 PL. 8	土 師 杯	覆 土	口縁1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部上位無調整	
第36図-16	土 師 杯	覆 土	高4.8 口縁～底1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第36図-17 PL. 8	土 師 杯	覆 土	口縁～底1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第36図-18 PL. 8	土 師 杯	覆 土	口縁～底約1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第36図-19 PL. 8	土 師 杯	覆 土	口縁～底1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	底部に4×2cmの 楕円孔を穿つ

第37図-20	土師杯	覆土	高4.1 口縁~底1/3	①酸化鉄粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体部外面横ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナデ	口縁に炭化物付着 灯明皿であろう
第37図-21 PL. 8	土師杯	覆土	高4.0 口縁~底1/3	①砂粒を含む ②暗褐 ③普通	口縁横ナデ 体部外面横ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナデ	
第37図-22	土師甕	覆土	口縁部小破片	①砂粒を含む ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体部外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第37図-23	土師甕	覆土	底5.8 孔径2.2 底部破片	①大砂粒を含む ②暗赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体部外面ナデ 内面縦ナデ	
第37図-24	土師甕	覆土	体半~底1/3	①砂粒やや多 ②にぶい褐 ③普通	体下半斜ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ヘラケズリ	
第37図-25 PL.13-2	砥石	覆土	幅8.47 厚さ1.68	厚さの薄い直方体状を呈すると思われる 目の細かい暗灰褐色を呈する凝灰岩を使用し、表面は風化している		

122号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第39図-1	土師埴	貯蔵穴	口縁~肩部約1/4	①砂粒を多く含む ②にぶい明褐 ③普通	口縁横ナデ後弱い放射状ヘラミガキ 胴部横ヘラケズリ後上半ナデ	胴部内面積み上げ 痕
第39図-2 PL. 9	土師埴	床面	高10.6 底2.6 口縁1/2欠	①砂粒を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ後放射状ヘラミガキ 体横ヘラケズリ 内面ナデ	
第39図-3 PL. 9	土師高台椀	床面	口14.7 高5.9 底7.3	①細砂やや多 ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	外面クロ目状の痕跡 付高台の後高 台部全面ナデ 内面丁寧なヘラミガキ	内面黒色 本住居 跡へのまぎれ込み

123号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第41図-1	土師壺	覆土	口縁部1/4破片	①酸化鉄粒等砂粒を含 む ②明赤褐 ③普通	頸部外面浅い縦ヘラケズリ 口縁内外 面とも丁寧な横ナデ	
第41図-2	土師壺	覆土	底7.5 底部破片	①酸化鉄粒等砂粒を多 く含む ②赤褐 ③良好	胴部縦ヘラケズリ 底部内面ナデ	
第41図-3	土師甕	覆土	口縁~胴部約1/5	①小砂粒を多く含む ②赤褐 ③普通	内外面ともナデ	内面に積み上げ痕
第41図-4 PL. 9	土師甕	覆土	口9.1 口縁~胴上半1/2	①小砂粒を含む ②暗褐~黒 ③良好	胴部横ヘラケズリ 口縁と内面は丁寧 なナデ 「S」字のくずれた有段口縁 状を呈する	
第41図-5	土師埴	覆土	胴部1/4破片	①小砂粒をやや含む ②赤褐 ③良好	外面は丁寧なナデ 内面指頭によるナ デツケ	

第三章 出土遺物一覧表

第41図-6	土師埴	覆土	胴部下半破片	①酸化鉄粒が目立つ ②赤褐 ③良好	外面ヘラケズリ 上半ナデ 内面ヘラケズリ	
第41図-7 PL.9	土師高杯	床面	口径16.5 杯部2/3破片	①酸化鉄粒等大砂粒を 多く含む ②暗黄褐 ③普通	内外面とも口縁部横ナデの後やや粗い 放射状ヘラミガキを施す 杯部と脚部 の接合は粘土塊充填で行なう	内面剥離
第41図-8	土師高杯	覆土	脚部1/3破片	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	外面下半縦ヘラケズリ 上半は縦ヘラ ミガキ 内面ナデ 粘土塊充填で接合	
第41図-9 PL.13-5	石製有孔円板	ビットP。	径1.93×1.97 厚0.32×0.17 孔径0.18	多角形状の円形で、断面は「くさび」形を呈する。円孔は中央に2ヶ所並列して穿たれる。黒色を呈する粘板岩様の石材を用い、目の荒い砥石で整形したと思われる。		

124号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第43図-1	土師杯	覆土	口縁～底部約1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	底外面に黒斑
第43図-2 PL.9	土師杯	覆土	口径15.5 高5.7 底5.0 一部欠	①砂粒を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半ナデ 下半ヘラケズリ内面ナデ後ヘラミガキ	底外面に黒斑
第43図-3	土師高杯	覆土	脚部2/3破片	①細砂を多く含む ②明赤褐 ③普通	外面縦方向、内面横方向ヘラケズリ 裾部ナデ	
第43図-4	土師高杯	覆土	口縁1/4と脚部破 片	①細砂を含む ②にぶい赤褐 ③普通	口縁横ナデ 杯部内外面放射状ヘラミ ガキ 脚外面ヘラミガキ、内面ヘラケ ズリ	
第43図-5	土師甕	覆土	口縁～体上半1/3	①砂粒多く含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面横ナデ	
第43図-6	土師甕	床面	高10.9 底6.0 口縁大部分欠	①砂粒多く含む ②にぶい赤褐 ③普通	頸部縦、胴部中位は横ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナデ	底内面指頭圧痕
第43図-7	土師甕	覆土	口縁約1/4破片	①砂粒を多く含む ②赤褐 ③良好 堅緻	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 口縁内面は横、体内面は縦ヘラケズリ	口唇外側に沈線

125号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第45図-1 PL.10	土師高杯	床面	口径18.0 高14.4 底13.4 完形	①砂粒を含む ②赤褐 ③良好 堅緻	杯部内面横ナデ後丁寧な縦ナデ 杯部 外面縦ハケメ後横ナデ 脚柱部外面縦 ハケメ後ナデ 裾部横ナデ 脚柱部内 面は横ヘラケズリ 杯部と脚の接合部 にはぞが残る	裾部に黒斑あり
第45図-2 PL.10	土師高杯	床面	口径18.0 高15.6 底13.7 口縁欠	①酸化鉄粒目立つ ②淡褐 ③普通	杯部内外面ともナデ後放射状ヘラミガ キ 脚部縦ヘラミガキ 内面ケズリ	二次的加熱を受け る

第45図-3 PL.10	土師高杯	貯蔵穴	口16.7 高15.8 底13.4 完形	①酸化鉄粒が目立つ ②赤褐～橙 ③普通	杯部内外面ともナデ後放射状ヘラミガキ 杯底面ヘラケズリ後ヘラミガキ 脚部縦ヘラミガキ 内面ヘラケズリ	口唇部、裾部に黒斑あり 二次的加熱痕
第45図-4 PL.10	土師高杯	覆土	口18.2 高15.9 底13.8 口縁約1/3欠	①砂粒を多く含む ②明赤褐～橙 ③普通	杯部内外面ともナデ後放射状ヘラミガキ 脚部縦ヘラミガキ 内面ヘラケズリ 裾部内面同心円状ヘラミガキ	口縁の一部に黒斑
第45図-5 PL.10	土師高杯	床面	高16.5 底13.2 口縁2/3欠	①砂粒を少量含む ②明橙 ③不良、軟質	杯部内外面ともヘラミガキ 脚柱部外面縦ヘラミガキ 内面横ナデ	
第45図-6 PL.10	土師高杯	床面	口18.3 高15.8 底13.9 口縁約1/4欠	①砂粒を少量含む ②明赤褐 ③良好	杯部外面ヘラケズリ 口縁部横ナデの後放射状ヘラミガキ 脚柱部外面縦ヘラミガキ 内面ヘラケズリ	口縁の一部黒斑
第45図-7	土師甕	貯蔵穴 脇床面	口16.9 高25.1 底5.8 口縁1/4欠	①小砂粒を多く含む ②暗褐 ③普通	外面胴上半に斜ハケメ後口縁～頸部を横ナデ 胴下半横ヘラケズリ 内面斜ヘラケズリ	口縁～胴中に煤付着
第46図-8 PL.9	土師鉢	貯蔵穴	口14.7 高6.5 底6.0 完形	①酸化鉄粒目立つ ②淡褐 ③普通	外面ヘラケズリ後口縁横、体部縦ヘラミガキ 内面放射状ヘラミガキ	
第46図-9 PL.9	土師鉢	床面	口14.8 高6.6 底5.8 完形	①酸化鉄粒目立つ ②淡橙 ③普通	外面ヘラケズリ後口縁横、体部縦ヘラミガキ 内面放射状ヘラミガキ	体部上半に一部黒斑
第46図-10 PL.9	土師鉢	床面	口14.5 高6.0 底5.0 口縁一部欠	①黒色鉱物目立つ ②橙 ③普通	外面ヘラケズリ後粗いヘラミガキ 口縁横ナデ 内面ナデ後まばらな放射状ヘラミガキ	体部の内外面に全体の1/3に黒斑
第46図-11 PL.9	土師鉢	貯蔵穴	口12.5 高6.5 口唇部欠	①大砂粒を多く含む ②赤褐 ③普通	外面ヘラケズリ後ナデ 内面丁寧なヘラナデ 口縁横ナデ	外面に煤付着

126号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第47図-1	土師杯	覆土	口縁～底1/4	①砂粒を多く含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	二次的加熱痕
第47図-2	土師杯	覆土	約1/4破片	①砂粒を多く含む ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第47図-3	須恵鉢	覆土	口縁～体部破片	①白色鉱物が目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ整形	口縁に自然釉がかかり剥落する

127号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第49図-1	土師杯	床面	底部1/4破片	①細砂を含む ②褐灰 ③還元ぎみ	底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

第三章 出土遺物一覧表

第49図-2	土師杯	カマド 焚口	高5.0 底4.4 口縁1/2欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体部下半無調整 内面ナデ後丁寧なヘラミガキ	
第49図-3	土師小形甕	カマド 焚口	口11.5 高9.7 底6.1 約1/3欠	①大砂粒を少量含む ②橙 ③やや不良	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ後斜ヘラミガキ	外面二次的加熱による剥落

128号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第51図-1	土師甕	覆土	口縁～体下位1/3	①砂粒が多い ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横ヘラケズリ 下半縦ヘラケズリ 内面ナデ	体内面に積み上げ 痕
第51図-2	土師甕	覆土	口縁～体中位1/4	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ヘラナデ 口唇外面に沈線	
第51図-3	土師甕	覆土	口22.0 口縁2/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体上位横ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第51図-4	土師甕	覆土	口縁～体上半1/2	①細砂を含む ②明赤 褐 ③良好 堅緻	口縁横ナデ 体上位横ヘラケズリ 内面ヘラナデ 口唇外面に沈線	
第51図-5	土師甕	覆土	口縁～体上半1/2	①細砂を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横ヘラケズリ 下半縦ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第51図-6	土師甕	カマド	口縁～体上半1/2	①黒色鉱物が多い ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第51図-7	土師甕	覆土	口縁～体上位1/3	①黒色鉱物が多い ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第51図-8	土師甕	覆土	口縁～体上位1/3	①砂粒やや多い ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	口縁部に積み上げ 痕
第51図-9	須恵 (皿)	覆土	底6.2 底のみ残存	①軽石、長石を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転クロク整形 底回転糸切り 内面は回転利用の丁寧なナデ	

133号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第53図-1 PL.11	須恵 蓋	覆土	天井部1/4破片	①石英、長石を多く含 む ②灰白 ③酸化済み	上面回転ヘラケズリ後つまみ部成形 下面不定方向のナデ	
第51図-2 PL.11	土師杯	覆土	口縁～底部1/3	①軽石、長石等を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底面ヘラケズリ 体部上位に無調整部分を残す	外面の一部に黒斑
第51図-3 PL.11	土師杯	覆土	口17.4 底部欠	①細砂を少量含む ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底面ヘラケズリ 体部上 位の一部分に無調整部分を残す	
第51図-4 PL.11	土師杯	覆土	口縁～底部1/3	①細砂を含む ②暗橙 ③普通	口縁横ナデ 底面ヘラケズリ 体部上 位に無調整部分を残す	

135号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第54図-1 PL.11	須恵 杯	覆土	口12.2 高3.5 底7.6 完形	①長石、酸化鉄粒を含む ②灰 ③還元、やや発泡きみ	右回転クロ整形 底手持へラケズリ	
第54図-2	土師 甕	覆土	口縁～体上半	①砂粒が多い ②暗橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面へラナデ	口縁中位に積み上げ痕

137号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第55図-1 PL.11	土師 杯	覆土	口13.6 高4.8 口縁1/2欠	①酸化鉄粒目立つ ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 口唇内側に面取り	
第55図-2 PL.11	土師 杯	覆土	高4.5 口縁～底約1/3	①酸化鉄粒、軽石を含む ②暗橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 口唇内側と受部外側に面取り	底部外面に黒斑
第55図-3	土師 甕	覆土	口縁1/4破片	①砂粒が多い ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	外面一部に黒斑
第55図-4	土師 甕	覆土	高13.9 底4.7 口縁の大部分欠	①粗砂が多い ②橙～明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 底へラケズリ 内面へラナデ	

138号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第57図-1	土師 杯	覆土	口縁～底部1/4	①細砂を少量含む ②黒褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第57図-2	土師 杯	覆土	口縁小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部上位は無調整	
第57図-3	土師 甕	覆土	体下半～底1/3	①細砂が多い ②にぶい橙 ③普通	体外面斜へラケズリ 底へラケズリ 内面へラナデか	

139号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第59図-1	土師 杯	覆土	口縁～底部1/4	①酸化鉄粒目立つ ②暗黄褐 ③やや軟質	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

第三章 出土遺物一覧表

第59図-2	土師杯	覆土	高4.5 口縁の大部分欠	①酸化鉄粒目立つ ②暗黄褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ後粗いヘラミガキ	
第59図-3	土師杯	覆土	高4.0 口縁欠 底部2/3	①酸化鉄粒目立つ ②暗橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	内面煤付着
第59図-4	土師甕	覆土	口縁~胴上半1/4	①酸化鉄粒目立つ ②灰白~明褐 ③普通	口縁横ナデ 胴上半横へラケズリ 内面ナデか	外面の約1/2黒斑
第59図-5	土師甕	床面	口14.7 高25.6 口縁~体一部欠	①細砂を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦横へラケズリ後 一部に粗いヘラミガキ 内面へラナデ	胴下半部に煤付着
第59図-6	土師甕	覆土	体下半~底1/3	①砂粒を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ体外面斜横へラケズリ 内面ナデ	2次的加熱痕
第59図-7 PL.11	土師高杯	覆土	脚柱部破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	外面縦へラミガキ 内面へラケズリ 裾部ナデ後へラミガキ	
第59図-8 PL.11	土師鉢	覆土	高6.0 底6.0 口縁体部3/4欠	①酸化鉄粒、黒色鉱物 を含む ②橙 ③普通	体外面ナデか 内面指頭によるナデ	体外面に黒斑 底面に木葉痕
第59図-9 PL.11	土師(甕)	覆土	口22.5 高19.0 底5.8 口縁と体 部一部欠	①細砂を含む ②明橙 ③普通 やや軟質	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	内面下位と外面口 縁下位に紐積み上 げ痕を残す

148号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第61図-1	土師甕	覆土	口縁~体部1/3	①粗砂やや多い ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第61図-2	土師手捏ね	覆土	下半1/2破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	指頭によるナデ	

58号土壌

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第66図-1 PL.12	須恵杯	覆土	口18.0 高3.8 底12.0口縁一部欠	①軽石、長石を含む ②暗橙 ③酸化、軟質	口縁内側に沈線を廻らす 底左回転へ ラケズリ 内面ナデ	外面のみやや還元 ぎみ
第66図-2 PL.12	須恵杯	覆土	口12.0 高4.3 底9.2 口縁一部欠	①軽石、長石が多い ②灰 ③還元、硬質	右回転クロ整形 底回転へラ切り後 回転へラケズリ	
第66図-3 PL.12	土師杯	覆土	口12.5 高4.0 口縁一部欠	①黒色鉱物目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ	
第66図-4 PL.12	土師杯	覆土	高4.9 口縁~底部2/3	①細砂を多く含む ②橙 ③普通	口縁~内面ナデ 底外面へラケズリ	

81号土壌

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第66図-5 PL.12	土師 杯	覆土	口12.8 高3.5 口唇の一部欠	①細砂を多く含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 内面丁寧なナデ 底外面 ヘラケズリ 口縁下位は無調整	

8号溝

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第69図-1 PL.12	土師 杯	覆土	口13.3 高3.9 口唇の一部欠	①黒色鉱物が目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面は丁寧なナデ	底外面の一部黒斑
第69図-2	土師 杯	覆土	口12.2 高4.3 口縁1/2欠	①細砂粒を含む ②明橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面はナデか	
第69図-3 PL.12	土師 杯	覆土	口12.9 高3.8 完形	①砂粒を多く含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面はナデ	
第69図-4 PL.12	土師 杯	覆土	口11.2 高3.8 口縁~底1/4欠	①細砂を多く含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面 はナデ 体部上位の一部は無調整	
第69図-5	土師 杯	覆土	口16.8 高5.0 口縁1/3欠	①黒色鉱物目立つ ②明褐 ③普通	口縁~内面横ナデ 底外面ヘラケズリ	
第69図-6 PL.12	土師 杯	覆土	口13.3 高3.6 口縁一部欠	①軽石等砂粒を多く含 む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面 はナデか	
第69図-7	土師 杯	覆土	高(3.5) 口縁~底部約1/2	①酸化鉄粒が目立つ ②橙~黄褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面 ナデ	底外面に黒斑
第69図-8	土師 高杯	覆土	脚部破片	①酸化鉄粒等細砂を多 く含む ②明橙 ③普通 やや軟質	外面縦ヘラケズリ後ナデ 内面指ナデ	内面に2段の積み 上げ痕を残す
第69図-9 PL.12	土師 壺	覆土	口20.5 口縁の一部、胴下 半の大部分欠	①砂粒を多量に含む ②橙~明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 胴部外面横と斜方向ヘラ ケズリ 内面は横ヘラナデ	
第69図-10	土師 甕	覆土	口縁~体上半1/3	①黒色鉱物等細砂を多 量に含む ②橙 ③普 通	口縁横ナデ 体部外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデか	
第69図-11	土師 甕	覆土	口縁小破片	①細砂を多量に含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体部外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	

第Ⅳ章 小 結

本報文で扱ったのは三ッ木遺跡のうちのほんのわずかな部分であり、集落跡としての様相を把握するためには、この南西側に続く上武国道地域調査分や、更に南側に展開する遺跡群をも合わせて検討しなければならぬのは言うまでもないが、100年前後の時間幅による全体の大きな動向についてはすでに概括したところである。その後更に出土土器編年の細時期区分を進める中で、25～50年程の時間幅を単位とする分析を行なった結果、^(註2) 既述の段階では明らかにし得なかった本遺跡のより具体的な変遷過程とそれの示すところの問題点のある程度把握できたので、ここではその概要を述べ、集落の全体像とその歴史的背景を究明するための今後の検討課題としておきたい。

三ッ木遺跡では上武国道地域と早川河川改修地域分において、4世紀後半～11世紀代に亘る集落が営まれたと考えられる。集落の動向はけっして一様ではなく、時期的に空白な部分や、様相の急変等を見出す事ができる。まず初期の段階で4世紀後半と5世紀代にそれぞれ集落が形成されるが、それは小規模で短期間の存在であり、又出土土器から見る限りある程度の空白期間があったものと考えられる。具体的には和泉期後半と考えられる122号住居跡、125号住居跡の前後の時期に相当する遺構が検出されなかった事から、この段階の集落は断続的なものであったと想定される。古墳時代後期の鬼高期中頃には再び集落が形成され、6世紀中頃より7世紀中頃まで継続して営まれたようである。その立地は調査区の南東部に集中する傾向が見られ、集落主体は更に南東側に展開する可能性が強い。次期の奈良時代前半に到ると集落の様相は一変する。その立地は鬼高期の集落と小さな谷地を挟んで調査区北西部に集中し、地形に沿って孤状に配置される傾向が窺える。又集落構成の中に新たに掘立柱建物が加わったと考えられ、景観的にもそれ以前とはかなり異なるものであったと想定される。住居形態についても、横長長方形で主軸を南北方向にとるものが一般的になる。更にカマド位置についてはこの時期に限って北壁中央のものが目立つようになる。これらの特徴は鬼高期には全く見られなかった現象であり、しかもこれは漸移的ではなく、急激的な変化によるものであったと考えられる。一方奈良時代後半より平安時代前半までは時間的な間断がなく、集落が継続して営まれるようであり、その間に大きな様相の変化を見出す事はできないが、竪穴規模の縮小平均化や、立地が南西側に移る事等は漸移的な変遷としてとらえる事ができる。平安時代後半に到ってもこの傾向は続くが、10世紀後半～11世紀前半代のある時期に遺構分布が非常に稀薄になることから断絶する期間が存在した可能性がある。

以上のような本遺跡における集落様相の変遷については現段階では遺跡全体の中の一部の傾向と見るべきであり、その全容の解明には周辺地域における遺跡との関係をも含め、台地全体を視野にした検討が必要であろう。特に指摘されるところの奈良時代集落の在り方は「計画村落」的な位置付けも可能かと考えている。又集落の空白期間についても台地上における集落の移動等の現象を示唆するものとも考えられる事から、その理解のためには同一編年基準による台地上の遺跡相互の分析が今後必要になるものと思われる。(大木)

(註)

- 1 境町教育委員会の調査による西今井遺跡、三ッ木遺跡(『西今井・三ッ木遺跡調査概報』1980)や西林遺跡、下田遺跡(『西林遺跡第1次発掘調査概要』1979、『西林遺跡 下田遺跡 発掘調査の概要』1980)、当事業団調査による三ッ木越戸遺跡(『三ッ木越戸遺跡』1981)等がある。
- 2 井上唯雄「調査の成果と問題点」『三ッ木遺跡』群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 建設省 1984

写真図版



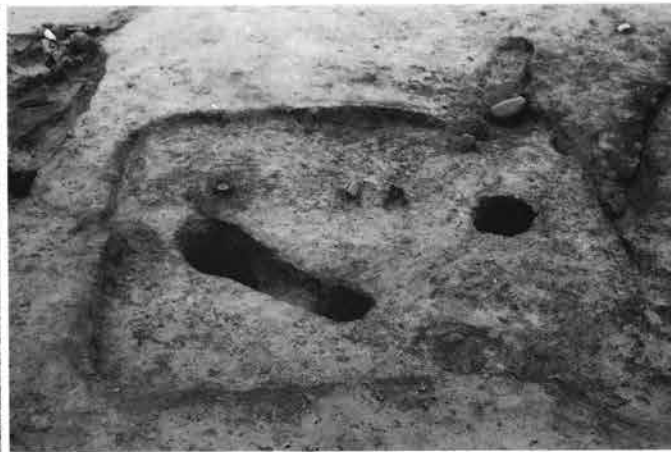
95号住居跡



96号住居跡



97号住居跡



99号住居跡



102・107号住居跡



109号住居跡



113号住居跡



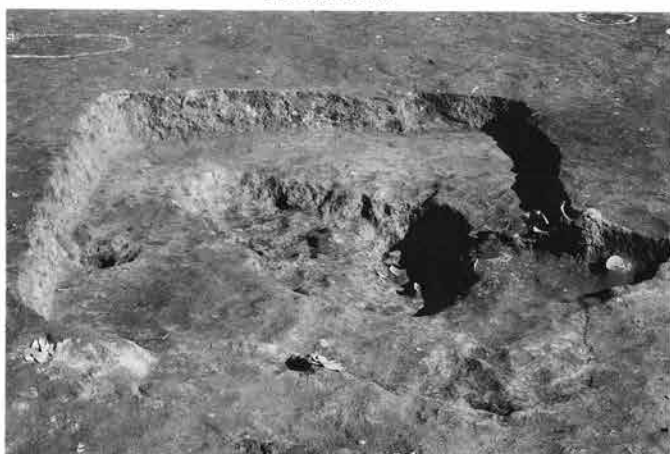
115号住居跡



123号住居跡



125号住居跡



128号住居跡



137号住居跡



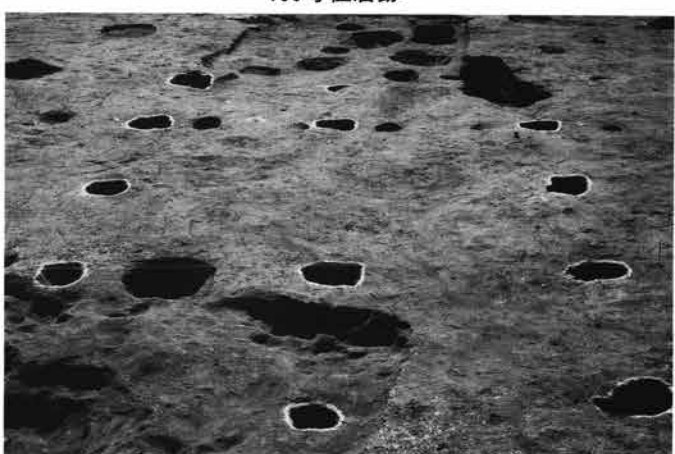
138号住居跡



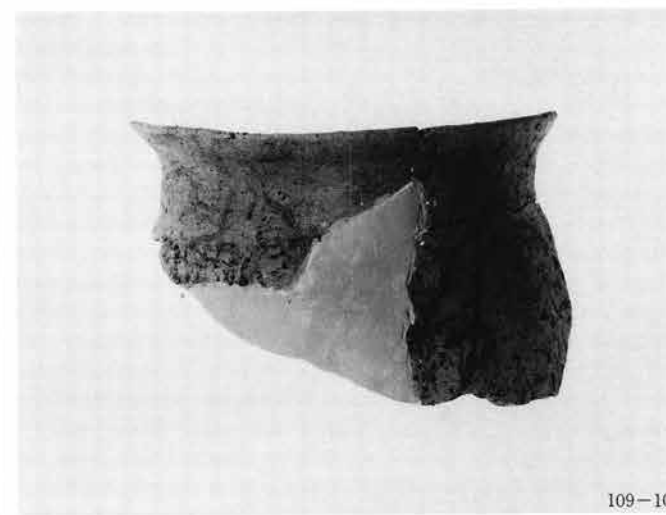
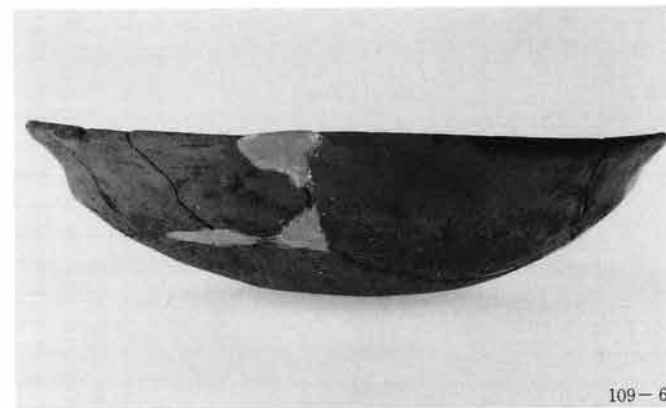
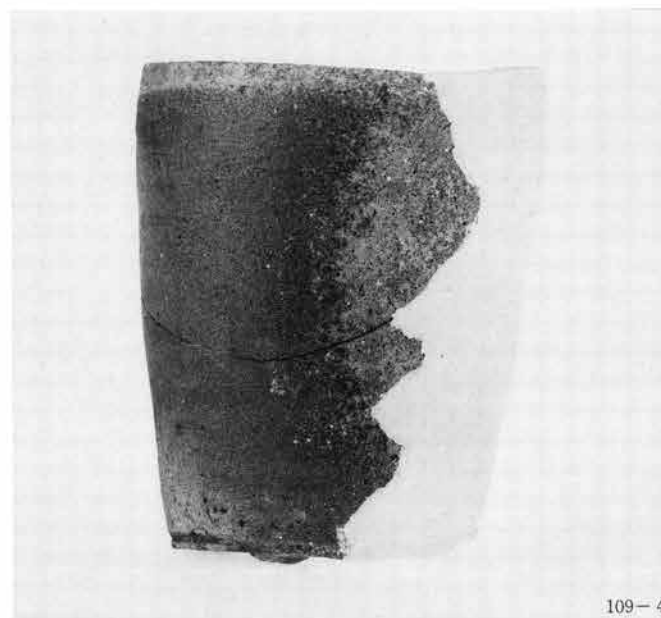
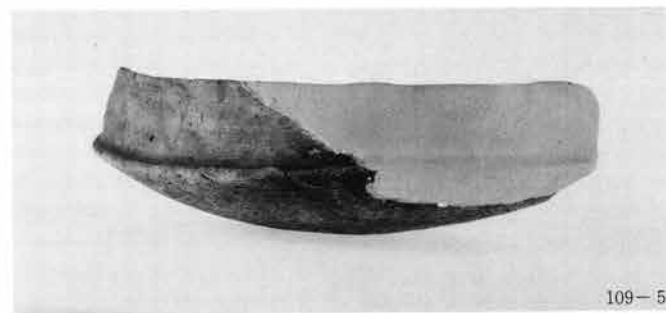
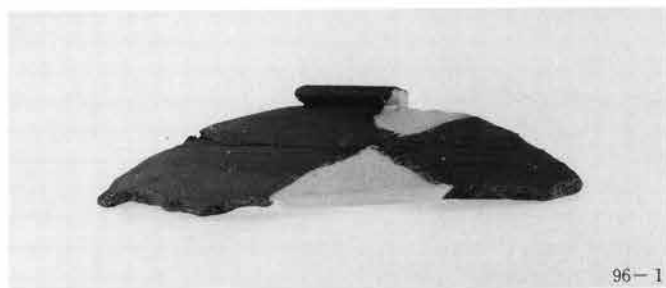
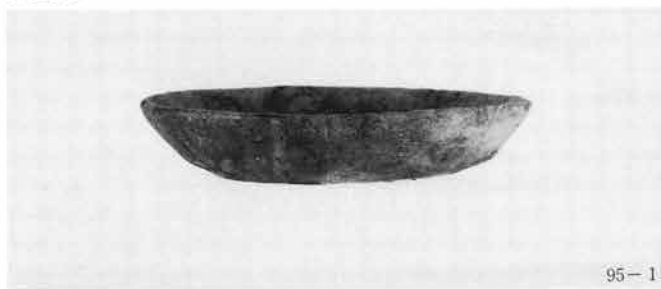
139号住居跡



4号掘立柱建築遺構

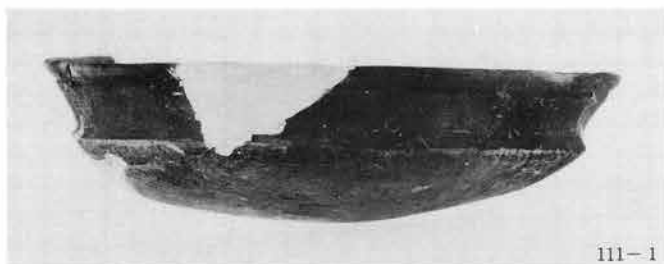


5号掘立柱建築遺構

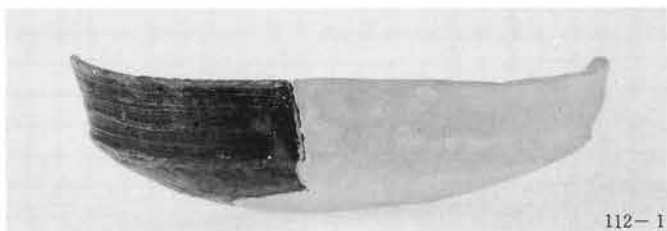




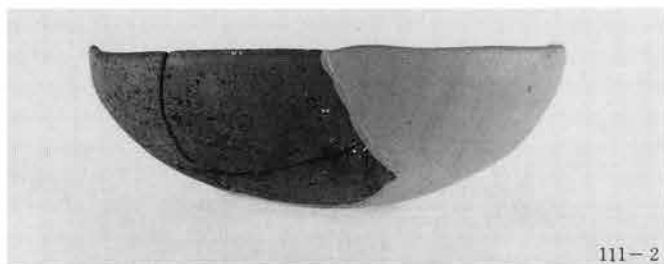
100-1



111-1



112-1



111-2



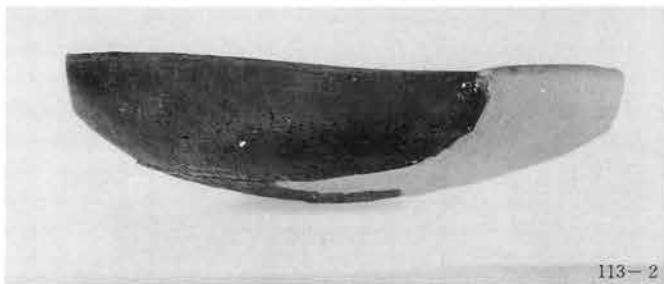
112-3



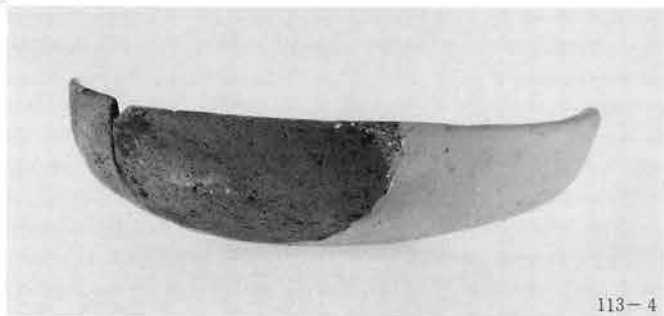
111-5



113-1



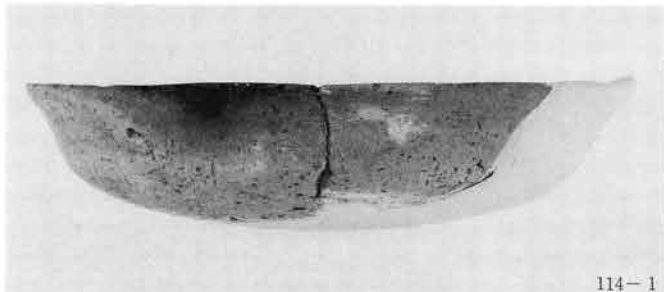
113-2



113-4



113-7



114-1



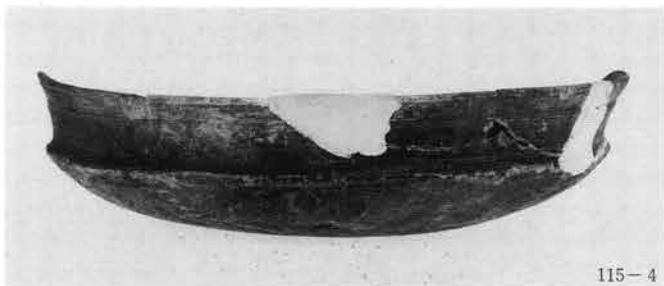
114-4



114-3



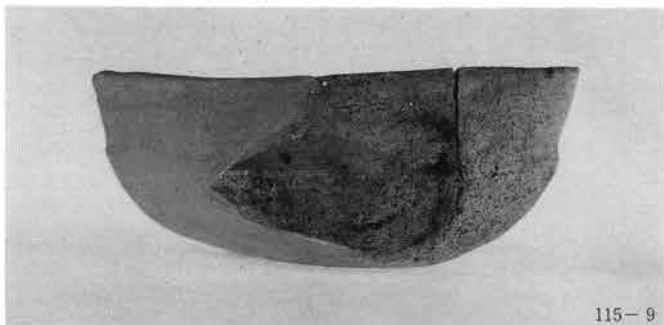
115-2



115-4



115-5



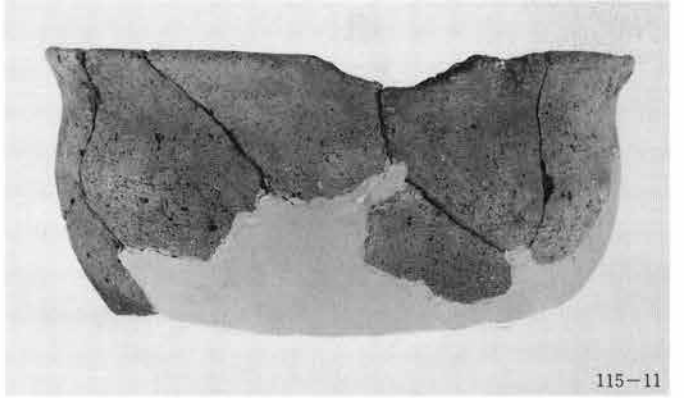
115-9



115-13



115-19



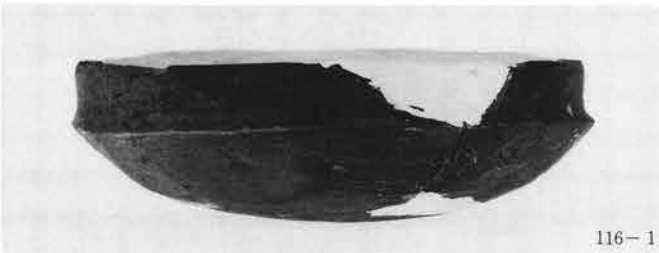
115-11



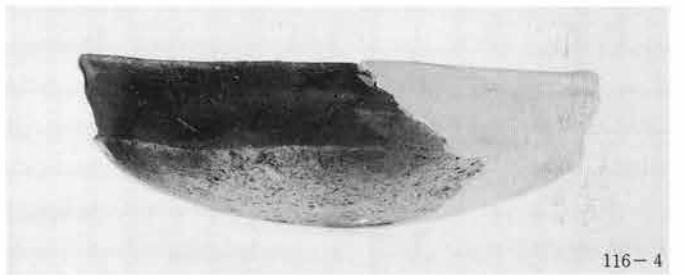
115-17



115-18



116-1



116-4



116-3



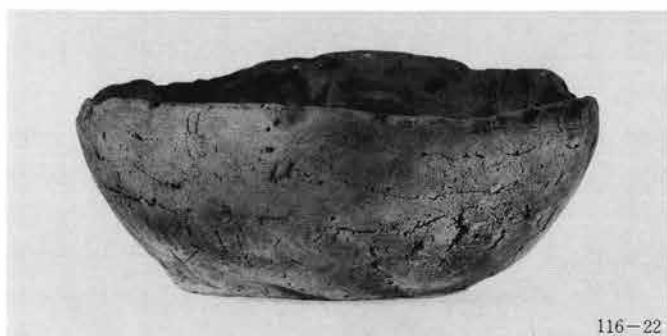
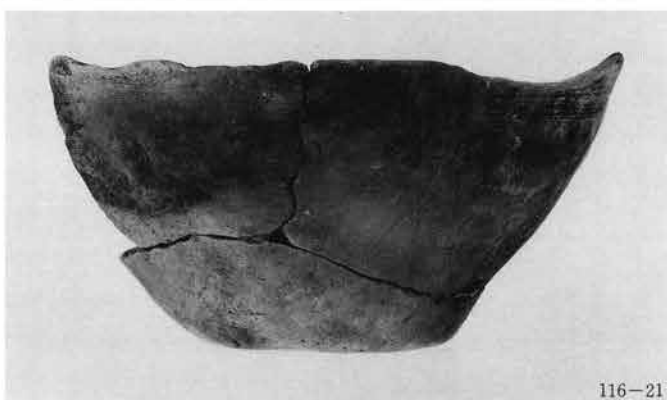
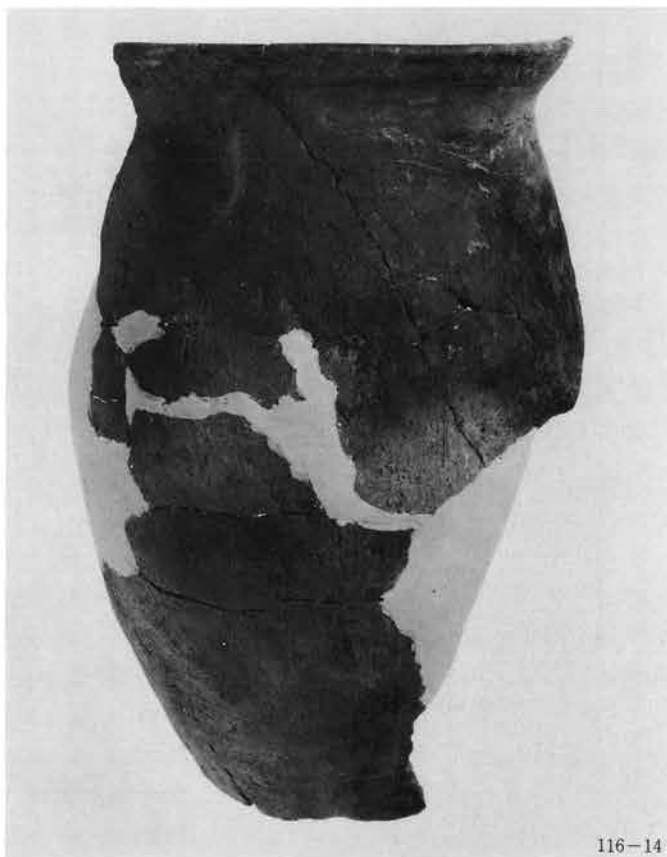
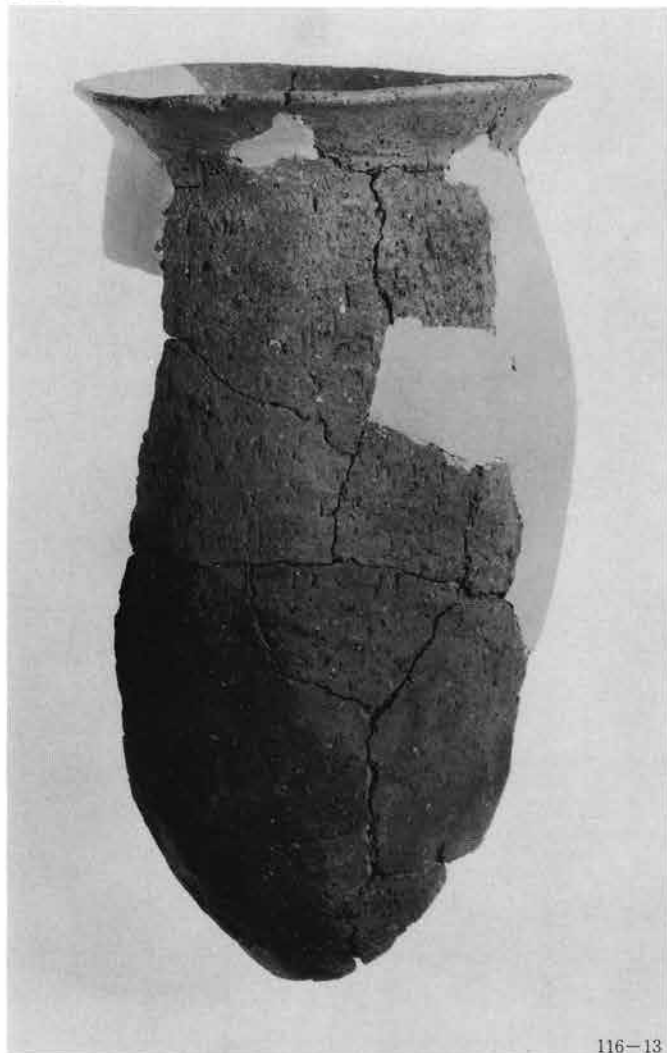
116-6

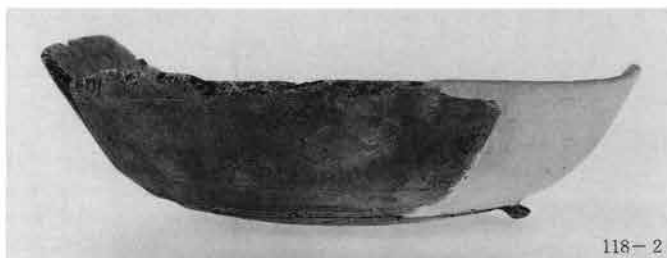


116-5



116-9





118-2



118-4



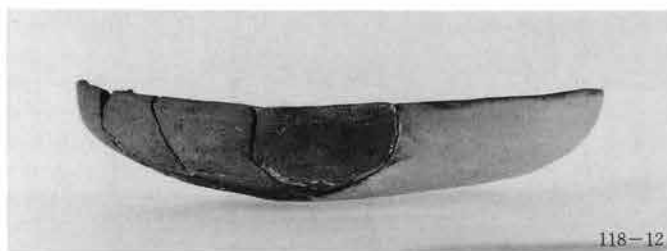
118-8



118-9



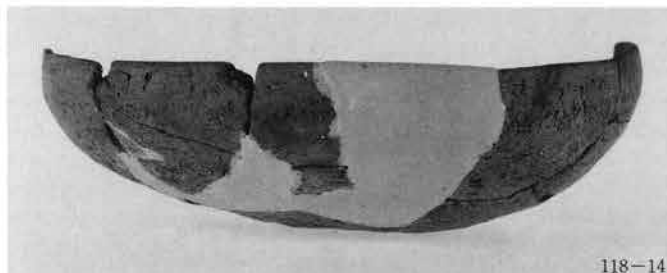
118-10



118-12



118-13



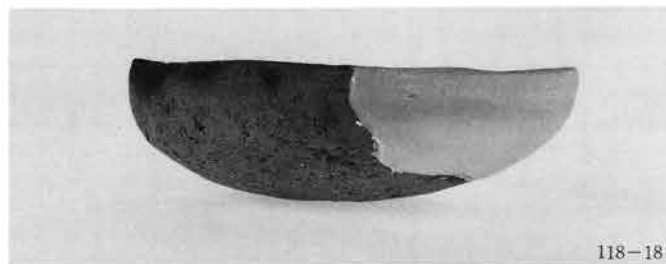
118-14



118-15



118-17



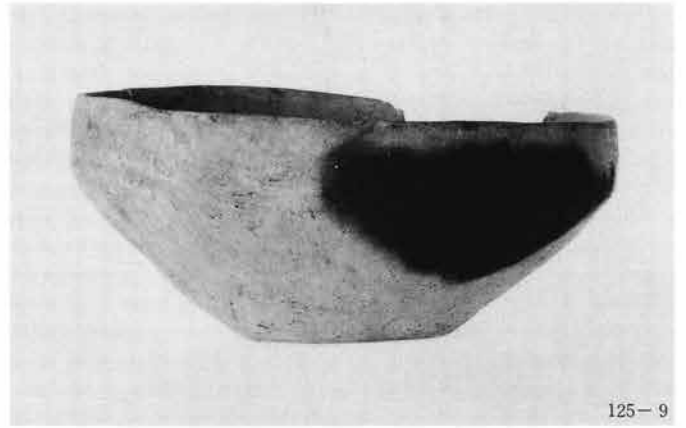
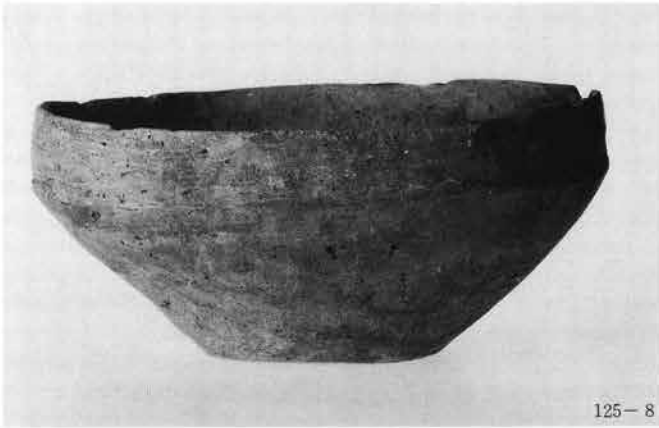
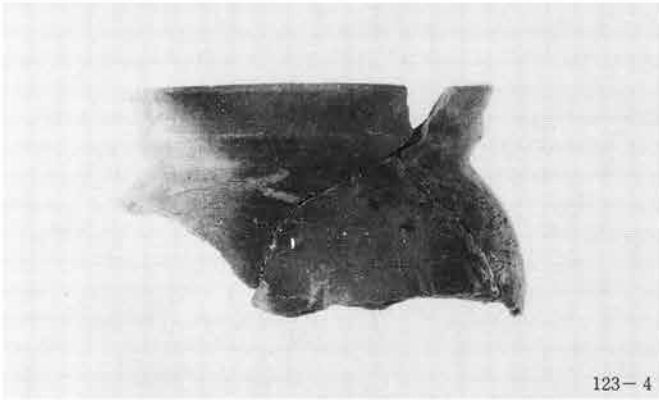
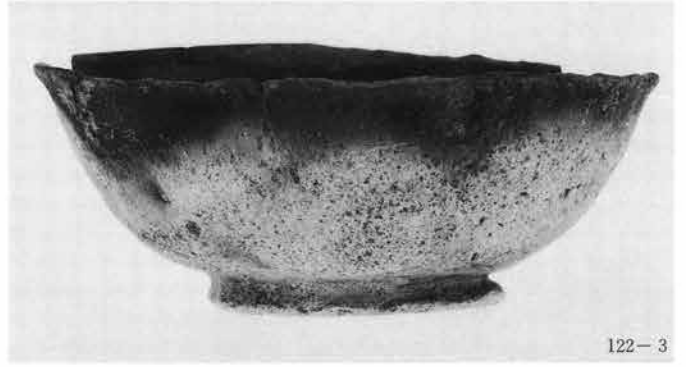
118-18



118-19



118-21





125-1



125-2



125-3



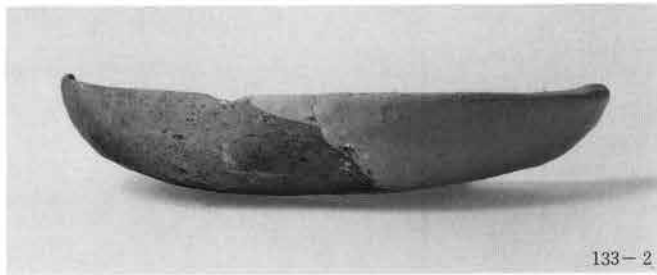
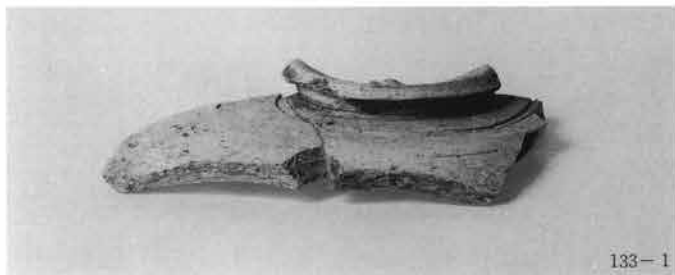
125-4

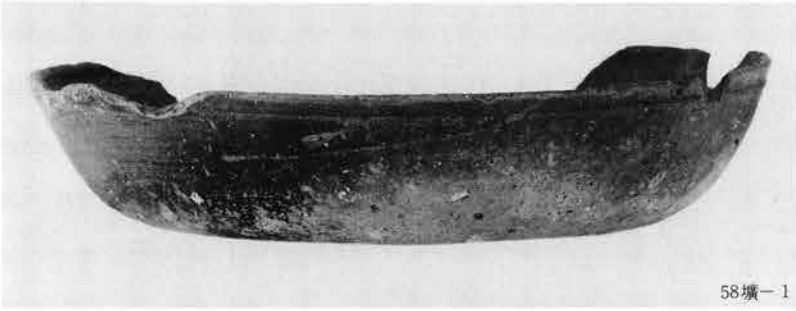


125-5



125-6

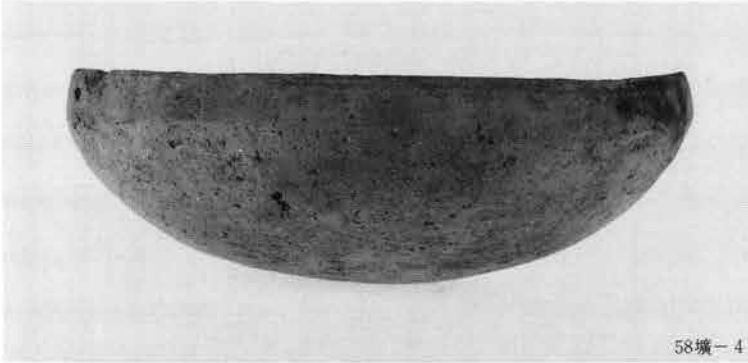




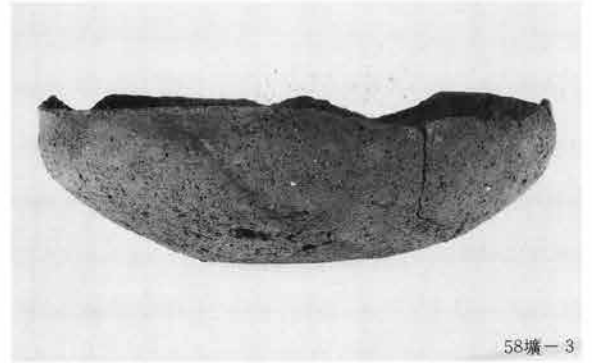
58墳-1



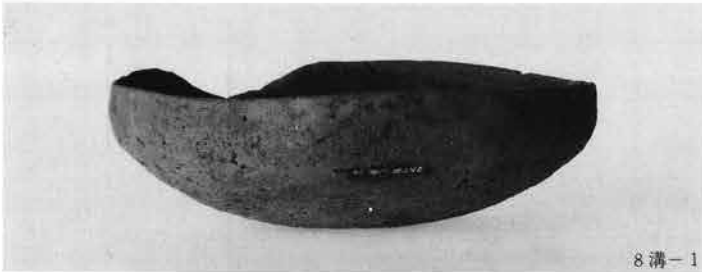
58墳-2



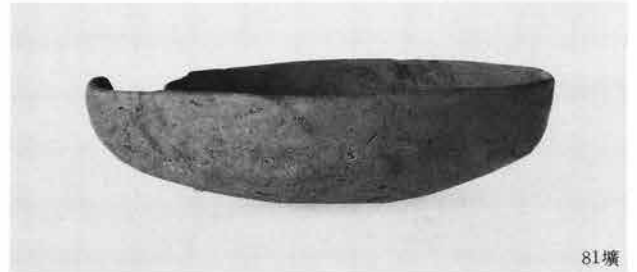
58墳-4



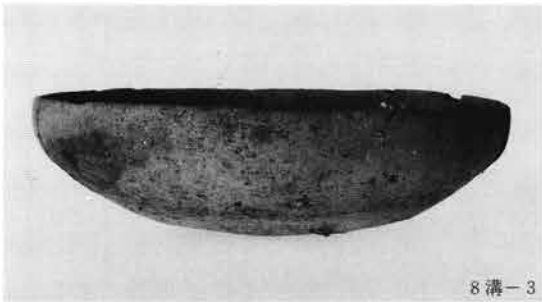
58墳-3



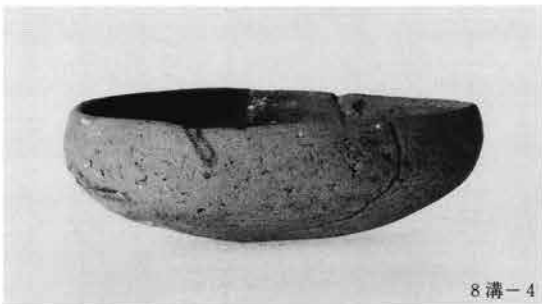
8溝-1



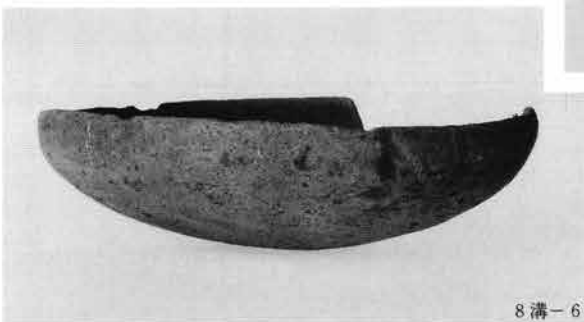
81墳



8溝-3



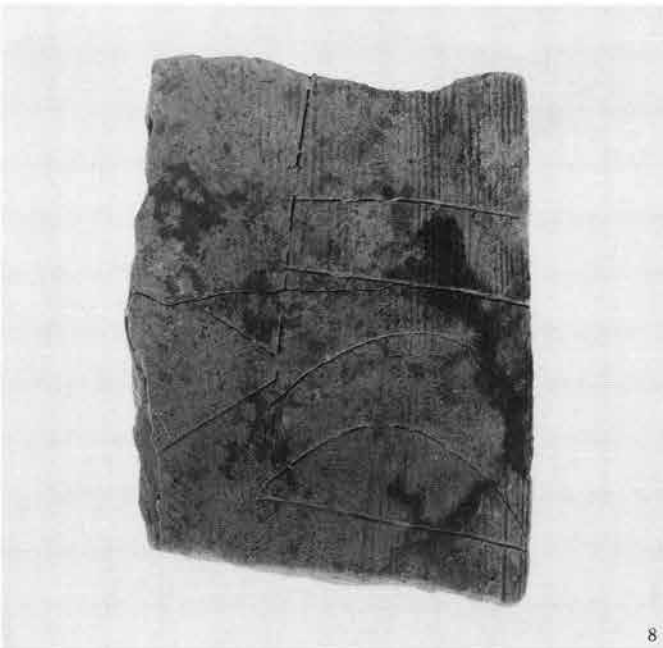
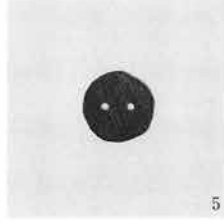
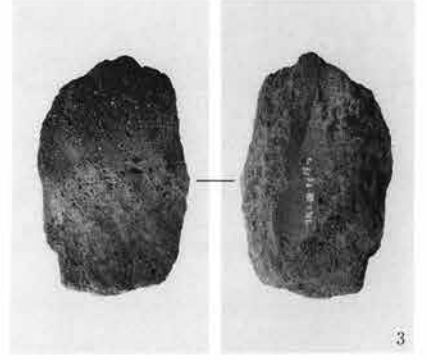
8溝-4



8溝-6



8溝-9



- 1 97号住居跡 (砥石)
- 2 118号住居跡 (砥石)
- 3 96号住居跡 (羽口)
- 4 111号住居跡 (土錘)
- 5 123号住居跡 (有孔円板)
- 6 100号住居跡 (紡錘車)
- 7 106号住居跡 (埴輪馬)
- 8 107号住居跡 (盾)

三ツ木遺跡

早川 河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和60年12月20日 印刷
昭和60年12月25日 発行

編 集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
Tel (0279) 52-2511(代)

発 行 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
Tel (0279) 52-2511(代)

印刷 / 上毎印刷工業株式会社



第71図 遺構配置図